

# 平安京左京三条四坊十五町跡

— 亀屋町・上白山町における埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平安京左京三条四坊十五町跡

— 亀屋町・上白山町における埋蔵文化財発掘調査報告書 —

株式会社  
イビソク

株式会社 イビソク

# 平安京左京三条四坊十五町跡

— 亀屋町・上白山町における埋蔵文化財発掘調査報告書 —

株式会社 イビソク

## 例 言

1. 本書は京都市中京区御幸町通御池上る亀屋町386番4・京都市中京区麩屋町通御池上る上白山町243・245・247・249番に所在する、平安京左京三条四坊十五町跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、文化財保護法第93条第1項に基づき平成28年3月25日付けで届け出された土木工事に伴い、平成28年3月28日・6月27日に京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が試掘調査を実施した結果、平安京跡に関連する遺構が検出されたため、同課により発掘調査の実施が指示されたものである。[京都市番号15H567・16H549]
3. 本調査は、ホテル建設工事に伴う事前調査として、京阪電鉄不動産株式会社の委託を受けた株式会社イビソクが実施した。
4. 発掘調査は、平成28年9月5日～11月18日、平成29年2月20日～4月21日にかけて実施した。
5. 発掘調査は、京都府教育庁指導部文化財保護課、および京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導・助言の下、株式会社イビソクが実施した。
6. 発掘調査は次の体制で行った。

調査主体 株式会社イビソク  
調査員 吉村晶・石井明日香  
調査補助員 伊藤雅哉・小池智美

7. 本報告書の編集は、吉村が行った。
8. 本報告書の執筆分担は、以下の通りである。  
第1章 吉村、第2章 吉村、第3章 石井、第4章 吉村、第5章 第1・2・3節 株式会社パレオ・ラボ、第4節 Battseugel Tsogzolmaa[バトツェンゲル ツォグゾルマー]、第6章 吉村
9. 本報告書では次に示した地図を調整・使用している。

京都市地形図(1:2,500)「三条大橋」「御所」京都市都市計画局発行

10. 本報告書で使用している条坊復元図は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所から座標資料の提供をうけて作成した。
11. 本報告書で示す方位・座標は、国土座標第VI系(世界測地系)、水準値は東京湾平均海面(T.P.)に基づく数値である。
12. 本書に掲載した写真は、現地撮影を吉村・石井、遺物撮影を横山亮(オフィスメガネ)が行った。
13. 報告書作成にあたり、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができた。  
池本良一・品角阿止美(史迹美術同協会)・鈴木忠司(公益財団法人古代学協会)・藤原卓(公益財団法人益富地学会館)・山中章(三重大学名誉教授)(五十音順/敬称略)
14. 出土遺物については、関連する図面・写真等の記録類と共に、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課にて保管している。

## 凡 例

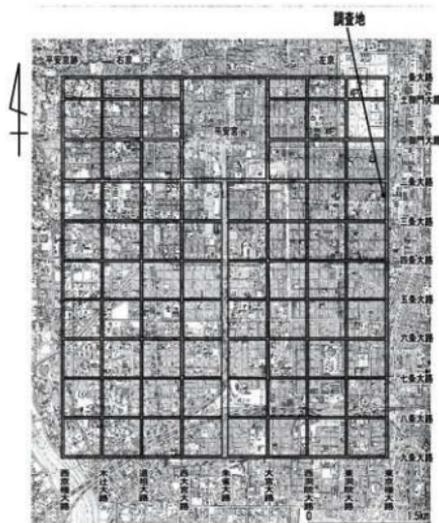
1. 遺構・遺物写真の縮尺は任意である。
2. 遺構番号は各調査面の番号を頭一桁に付し、検出順に通し番号を後ろ三桁に割り当てた。その後、編集段階で遺構の性格を付与して表記した。
3. 遺構の計測値は、残存値に [ ] を付けて表記した。
4. 表で示した出土遺物の計測値は、残存値に [ ]、復元値に ( ) を付けて表記した。
5. 本報告書で用いた土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』を使用した。
6. 出土遺物の年代は、下記の分類・編年を基調とした。
  - ・小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年の研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀—』京都編集工房
  - ・中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
  - ・藤澤良祐 2007『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系 愛知県

第1表 平安京土器型式—年代対応表

(長岡京)

調査面	平安時代				鎌倉時代				室町時代				徳川時代	
700頃	800頃	900頃	1000頃	1090～1190頃	1220頃	1300頃	1400頃	1500頃	1590～1600頃	1600頃	1700年代頃	1800年代頃		
京都I	京都II	京都III	京都IV	京都V	京都VI	京都VII	京都VIII	京都IX	京都X	京都XI	京都XII	京都XIII	京都XIV	
古	新	古	新	古	新	古	新	古	新	古	新	古	新	

(小森 2005 に基づいて作成)



第1図 平安京復元図と調査地の位置

# 目 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の経過	
第2章 位置と環境	3
第3章 遺 構	7
第1節 基本層序 (第6・7図)	
第2節 遺構の概要	
第3節 第1遺構面検出の遺構 (第8図・図版一・二)	
第4節 第2遺構面検出の遺構 (第9図・図版四・五)	
第5節 第3遺構面検出の遺構 (第10図・図版七・八)	
第6節 第4遺構面検出の遺構 (第11図、図版一〇・一一)	
第7節 第5遺構面検出の遺構 (第12図、図版一四・一五・一六)	
第4章 遺 物	31
第1節 遺物の概要	
第2節 第1遺構面出土遺物	
第3節 第2遺構面出土遺物	
第4節 第3遺構面出土遺物	
第5節 第4遺構面出土遺物	
第6節 第5遺構面出土遺物	
第5章 科学分析	53
第1節 平安京左京三条四坊十五町跡のプラント・オパール分析	
第2節 平安京左京三条四坊十五町跡の花粉分析	
第3節 堆積物中の珪藻化石群集	
第4節 平安京左京三条四坊十五町跡の動物遺体	
第6章 まとめ	65
第1節 整地および遺構の分布	
第2節 園池について	
第3節 牛馬骨出土遺構について	

## 挿 図 目 次

第1図	平安京復元図と調査地の位置	
第2図	調査地位置図 (縮尺1/2, 500)	1
第3図	調査区配置図 (縮尺1/600)	2
第4図	周辺調査位置図 (縮尺1/4, 000)	3
第5図	四行八門と調査位置関係図 (縮尺1/2, 000)	4
第6図	1・3区壁面図 (縮尺1/100)	8
第7図	2区壁面図 (縮尺1/100)	9
第8図	第1遺構面全体図 (縮尺1/200)	10
第9図	第2遺構面全体図 (縮尺1/200)	11
第10図	第3遺構面全体図 (縮尺1/200)	12
第11図	第4遺構面全体図 (縮尺1/200)	13
第12図	第5遺構面全体図 (縮尺1/200)	14
第13図	第1遺構面遺構図 (縮尺1/50)	17
第14図	第2遺構面遺構図1 (縮尺1/20・1/50)	19
第15図	第2遺構面遺構図2 (縮尺1/50)	20
第16図	第3遺構面遺構図1 (縮尺1/50)	22
第17図	第3遺構面遺構図2 (縮尺1/20)	23
第18図	第4遺構面遺構図1 (縮尺1/50)	25
第19図	第4遺構面遺構図2 (縮尺1/50)	26
第20図	第4遺構面遺構図3 (縮尺1/30)	27
第21図	第5遺構面遺構図1 (縮尺1/50)	29
第22図	第5遺構面遺構図2 (縮尺1/50)	30
第23図	第1遺構面出土遺物実測図1 (縮尺1/4)	34
第24図	第1遺構面出土遺物実測図2 (縮尺1/4)	35
第25図	第1遺構面出土遺物実測図3 (縮尺1/4)	36
第26図	第2遺構面出土遺物実測図1 (縮尺1/1・1/4)	39
第27図	第2遺構面出土遺物実測図2 (縮尺1/2・1/4)	41
第28図	第2遺構面出土遺物実測図3 (縮尺1/4)	42
第29図	第3遺構面出土遺物実測図1 (縮尺1/4)	44
第30図	第3遺構面出土遺物実測図2 (縮尺1/4)	47
第31図	第4遺構面出土遺物実測図 (縮尺1/4)	49
第32図	第5遺構面出土遺物実測図 (縮尺1/4)	52
第33図	灰に含まれる植物珪酸体分布図	53
第34図	灰から検出された植物珪酸体	54

第35図	平安京左京三条四坊十五町跡における花粉分布図	56
第36図	平安京左京三条四坊十五町跡 池5026試料 No. Dから産出した花粉化石	58
第37図	堆積物中の珪藻化石分布図 (主な分類群を表示)	61
第38図	堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真	62
第39図	〔横割り切断〕 櫛割りの製作工程 (西本他1999)	64
第40図	〔縦割り切断〕 籠の製作工程 (丸山2007)	64
第41図	整地および遺構検出範囲 1 (縮尺1/250)	67
第42図	整地および遺構検出範囲 2 (縮尺1/250)	68
第43図	池5026の変遷	70

## 目 次

第1表	平安京土器型式一年代対応表	
第2表	周辺調査地一覧	4
第3表	遺構概要表	15
第4表	遺物概要表	31
第5表	試料1g当りのプラント・オパール個数	53
第6表	花粉分析試料一覧	55
第7表	産出花粉孢子一覧表	56
第8表	珪藻化石分析試料一覧	59
第9表	堆積物中の珪藻化石産出表	61
第10表	出土遺物観察表	71
第11表	出土石製品観察表	77

## 図 版 目 次

図版一	1. 1区第1遺構面全景 (西から)	4. 井戸1035 断割り (北から)	
	2. 2区第1遺構面全景 (西から)	5. 井戸1035 木枠 (北から)	
図版二	1. 3区第1遺構面全景 (南から)	図版四	1. 1区第2遺構面全景 (西から)
	2. 礎石1034 断割り (北から)		2. 2区第2遺構面全景 (北から)
	3. 柱穴2004 断面 (北から)	図版五	1. 3区第2遺構面全景 (南から)
	4. 柱穴1041 礎石検出 (南から)		2. 柱穴2003 (南から)
	5. 土坑1017 断面 (北から)		3. 柱穴2034 (北から)
図版三	1. 土坑1050 断面 (南西から)		4. 土坑2014 断面 (東から)
	2. 土坑1076 礎石検出 (北から)		5. 土坑2014 (南から)
	3. 井戸1035 (北から)		

- |      |                         |      |                                |
|------|-------------------------|------|--------------------------------|
| 図版六  | 1. 土坑2020 断面 (北から)      | 図版一五 | 1. 1区第5遺構面全景 (西から)             |
|      | 2. 土坑2031 (南から)         |      | 2. 2区第5遺構面全景 (北から)             |
|      | 3. 土坑2054 遺物出土 (北から)    | 図版一六 | 1. 3区第5遺構面全景 (南から)             |
|      | 4. 土坑2078 断面 (西から)      |      | 2. 土坑5004・5005 断面 (北から)        |
|      | 5. 土坑2076 遺物出土 (北から)    |      | 3. 土坑5004・5005 (北から)           |
|      | 6. 溝2011 断面 (西から)       |      | 4. 土坑5014 断面 (南から)             |
|      | 7. 溝2009・2011 (東から)     |      | 5. 溝5006 断面 (西から)              |
| 図版七  | 1. 1区第3遺構面全景 (西から)      | 図版一七 | 1. 土坑5028 集石検出 (東から)           |
|      | 2. 2区第3遺構面全景 (北から)      |      | 2. 土坑5028 断面 (東から)             |
| 図版八  | 1. 3区第3遺構面全景 (南から)      |      | 3. 土坑5038 断面 (東から)             |
|      | 2. 土坑3007 断面 (南から)      |      | 4. 池5026 断面 (北東から)             |
|      | 3. 土坑3014 断面 (東から)      |      | 5. 池5026 石敷 (溝状窪み)断面<br>(北東から) |
|      | 4. 土坑3015・3095 断面 (南から) | 図版一八 | 1. 池5026-1石敷 (南から)             |
|      | 5. 土坑3024 (西から)         |      | 2. 池5026-1 石敷 (西から)            |
| 図版九  | 1. 土坑3062遺物出土 (南から)     | 図版一九 | 1. 池5026-2・土坑5038 (南から)        |
|      | 2. 土坑3070 (東から)         |      | 2. 池5026-2・土坑5038 (西から)        |
|      | 3. 土坑3080 (北から)         | 図版二〇 | 1. 第1遺構面出土遺物1                  |
|      | 4. 土坑3094 断面 (北から)      | 図版二一 | 1. 第1遺構面出土遺物2                  |
|      | 5. 土坑3094 遺物出土 (南から)    | 図版二二 | 1. 第2遺構面出土遺物1                  |
| 図版一〇 | 1. 1区第4遺構面全景 (西から)      | 図版二三 | 1. 第2遺構面出土遺物2                  |
|      | 2. 2区第4遺構面全景 (北から)      | 図版二四 | 1. 第2遺構面出土遺物3                  |
| 図版一一 | 1. 3区第4遺構面全景 (南から)      |      | 2. 第3遺構面出土遺物1                  |
|      | 2. 柱穴4043 (東から)         | 図版二五 | 1. 第3遺構面出土遺物2                  |
|      | 3. 道路状遺構4004 (南から)      | 図版二六 | 1. 第3遺構面出土遺物3                  |
|      | 4. 土坑4055 断面 (北から)      |      | 2. 第4遺構面出土遺物1                  |
|      | 5. 土坑4055 遺物出土 (東から)    | 図版二七 | 1. 第4遺構面出土遺物2                  |
| 図版一二 | 1. 柱列1 (南から)            |      | 2. 第5遺構面出土遺物                   |
|      | 2. 柱列2 (東から)            | 図版二八 | 1. 出土動物遺体                      |
|      | 3. 柱列3 (西から)            |      | 2. 打撃による小孔箇所                   |
| 図版一三 | 1. 柱穴4012 (柱列1) (南から)   |      |                                |
|      | 2. 柱穴4065 (柱列2) (北から)   |      |                                |
|      | 3. 柱穴4046 (柱列3) (東から)   |      |                                |
|      | 4. 溝4042 断面 (東から)       |      |                                |
|      | 5. 溝4042 (西から)          |      |                                |
| 図版一四 | 1. 3区第5遺構面全景 (オルソ写真)    |      |                                |
|      | 2. 1区第5遺構面全景 (オルソ写真)    |      |                                |

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

本調査は、ホテル建設に伴う発掘調査である。調査地は、京都市中京区御幸町通御池上る亀屋町386番4・京都市中京区麩屋町通御池上る上白山町243・245・247・249番に所在する、平安京跡（遺跡番号11）である。当該地において京阪電鉄不動産株式会社によりホテルが建設されることになり、京阪電鉄不動産株式会社より京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」という）へ、平成28年3月25日付で文化財保護法第93条第1項に基づく届出を行った。京都市文化財保護課はこれを受け、平成28年3月28日と6月27日に試掘調査を実施したところ、当該地に平安時代以降の遺構が残存していることが確認された（受付番号15H567）。そのため京都市文化財保護課から発掘調査の指導があり、調査については、京阪電鉄不動産株式会社から発掘調査の委託を受けた株式会社イビソクが実施することになった。株式会社イビソクは、文化財保護法第92条に基づき京都府教育委員会に平成28年8月18日付で埋蔵文化財発掘調査の届出をし、許可されたので平成28年9月5日より調査を開始した。

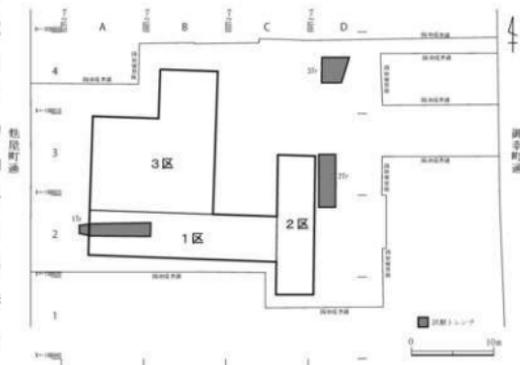


第2図 調査地位置図（縮尺1/2,500）

## 第2節 調査の経過

発掘調査は、平成28年9月5日から11月18日〔京都市番号15H567〕、平成29年2月20日から平成29年4月21日〔京都市番号16H549〕まで実施した。京都市文化財保護課の指導・監督の下、試掘調査の結果に基づいて調査区域を設定し、調査区は発掘指導面積の形状と既設建物解体工事の順により1区、2区、3区を設定した(第3図)。1区は5.5m×23m(126.5㎡)、2区は17m×4.5m(76.5㎡)を測り、隣接する1区と2区は反転調査した。3区は11.5m×18.7m×14m(192.0㎡)を測る。調査は1区と2区は京都市番号15H567、3区は京都市番号16H549として実施した。最初はバックホウによる機械掘削として近世以降の堆積層の除去作業を行った。機械掘削と平行して、攪乱の除去と土層の堆積状況を確認した。機械掘削後は、遺構検出面を精査して遺構検出を行った。試掘調査の結果を踏まえつつ、4面またはそれ以上の遺構面も想定して調査した。特に良好に残存していると予想された中世面の調査を十分に行えるように工程を組み進めていった。調査面毎の年代は土層観察と出土遺物を根拠とし、第1遺構面は江戸時代、第2遺構面は室町時代後期～安土桃山時代、第3遺構面は室町時代前期、第4遺構面は平安時代後期～鎌倉時代、第5遺構面は平安時代中期以前として調査した。この間、それぞれの遺構面の検出時、完掘時には、京都市文化財保護課の検査を受けた。遺構検出と平行して、遺構配置図(略測図)を作成し、遺構の配置や重複する遺構の先後関係などの把握に努めた。遺構の記録作業は、土層断面図などを手実測で行い、必要に応じてトータルステーションやボールによる垂直写真を用いて遺構平面測量を行い図化した。また各遺構の情報(種類、位置、成果等)および作業状況を記述した台帳を作成した。なお遺構の位置関係と遺物の取り上げのために調査区に合わせて東西方向に西から東へAからD、南北方向に南から北へ1から5までの10mグリッドを設定した。遺構土層断面図と遺物実測図は、デジタルトレースを行い、現場計測図面と合わせて編集を行なった。編集に伴って、各遺構を検討し、遺構の性格を判断していった。出土した遺物は、洗浄、注記、接合ののちにランク分けを行い、実測対象遺物を抽出した。遺物のランク分けにあたっては、報告書の

記載の有無を基準に、掲載遺物をAランク、参考遺物をBランク、それ以外をCランクとしている。報告書掲載遺物は、掲載順にコンテナに収納し、非掲載遺物は、遺構番号順にコンテナに収納した。これらは京都市文化財保護課の「京都市出土文化財の保管替えマニュアル」に則り実施している。



第3図 調査区配置図(縮尺1/600)

## 第2章 位置と環境

今回の調査地は、現在の京都市役所の西約100mに位置し、御幸町通と麩屋町通に面している。

平安京の条坊では平安京左京三条四坊十五町のほぼ中央にあたる。東は東京極大路、西は富小路、南は三条坊門小路、北は押小路に面した町であり、四行八門の区割りでは、十五町の西二～三行北三～五門に収まる。文献史料によると、十五町には歌人の三条右大臣として知られる右大臣の藤原定方の邸宅「山井殿」があったとされる。定方は十五町の「山井殿」、十町の「中西殿」、七町の「大西殿」の並ぶ邸宅を所有していた。没後、山井殿は定方の外孫である藤原永頼に伝えられ、永頼の娘婿の大納言藤原道頼に受け継がれる。その後、藤原道長の手に渡り、その妻明子と娘寛子の邸宅になる。

室町時代には応仁の乱を契機に荒廃した京都が復興する中で、下京として発展した市街地の北東外にあたる。

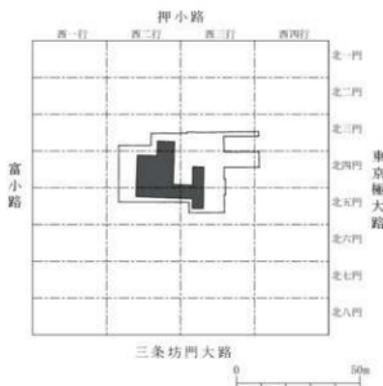
安土桃山時代から江戸時代には豊臣秀吉が実施した天正地割による町屋が新設される。この天正十八（1590）年の都市改造により、上京と下京の2つに分かれていた市街も再び1つにつながった。荒廃していた街路の再開発と併せて、既存の通りと通りの間に新たな通りが開かれた。

御幸町通と麩屋町通は天正の地割以来の通りである。御幸町通の名の由来は、秀吉が禁裏御所に参内するときに利用したことからも、天子が御幸になることからともいわれている。麩屋町通の名は、麩を扱う店が多かったことに由来するもので、江戸時代中期にも二条下尾張町付



第4図 周辺調査位置図 (縮尺1/4,000)

近や三条通との交差点付近に豆腐屋・麩屋・麵屋が多かったようである。しかしこれら麵麩店は早い時期に姿を消している。再開発の時、それまでの富小路の位置が全体的に東に移されたと考えられるが、一筋西に新たに通された通りが富小路通を名乗るようになった。ただし位置関係は、麩屋町通が本来の平安京の富小路に近い。江戸時代には、麩屋町通沿いに木地屋・東国問屋・灯台屋・銅道具・竹材木などの商家があり、鍛冶や弓師などの職人が住んでいたようである。また、御池通との交差点の北に白山神社があることから、白山通とも呼ばれたという。



第5図 四行八門と調査位置関係図 (縮尺 1/2,000)

#### 参考文献

- 野間光辰 編 1967『京雀』巻第二『新修京都叢書』第1巻 pp.187～188、臨川書店  
 野間光辰 編 1969『京羽二重』『新修京都叢書』第2巻 pp.14～15、臨川書店  
 野間光辰 編 1969『京町鑑』『新修京都叢書』第3巻 p.185、臨川書店  
 野間光辰 編 1976『京都坊目誌』『新修京都叢書』第17巻 pp.222～223、臨川書店

第2表 周辺調査地一覧

遺跡名	番号	調査	概要	文献
左京区 西四坊三 町	1	発掘	No.14調査区：平安時代の土坑・土器類。	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
	2	発掘	No.15調査区：室町時代の土坑など。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
	3	立会	No.9-10調査区：室町前半の遺構・遺物を多く検出。	『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
	4	立会	-2.0m、時期不明の包含層（土器類）。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成20年度』京都市文化市民局
	5	立会	6d-1.55mにて室町の包含層。	『京都市内遺跡立会調査報告 昭和60年度』京都市文化観光局
	6	立会	6d-1.5mにて室町の井戸。	『京都市内遺跡立会調査報告 昭和63年度』京都市文化観光局
	7	立会	6d-1.88mにて鎌倉～江戸の土坑。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成2年度』京都市文化観光局
	8	試掘	6d-2.05mで室町時代の土坑遺構1基。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成6年度』京都市文化観光局
左京区 西四坊七 町	9	立会	No.1：-2.0m、江戸前期の包含層（土器類）。 No.2：-1.0m、江戸後期の包含層（土器類）。-1.25m、江戸中期の包含層（土器類）。-1.85m、時期不明の包含層（土器類）。-2.2m、江戸初期の包含層（土器類、発掘物未詳見）。 No.3：-1.6m、平安中期～室町の包含層（土器類、輸入青磁類）。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』京都市文化市民局
	10	立会	-0.7m、江戸後期の包含層。-1.90m、鎌倉中期の包含層（土器類）。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成15年度』京都市文化市民局
	11	立会	-0.2mで時期不明の暗赤褐色土層。-0.6mで褐色色粗砂を検出。遺構、遺物は確認できず。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』京都市文化市民局
	12	立会	No.1：-0.42m、奈良以降の包含層。-1.12m、近世の包含層。No.2：-1.5m、江戸後期の包含層（土器類）。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局
	13	試掘	6d-1.05m以下包含層5、江戸2、室町2。	『京都市内遺跡立会調査報告 昭和60年度』京都市文化観光局
	14	立会	No.1：-1.05m、平安の包含層（土器類、軒瓦）。-1.35m、平安後期の包含層（土器類、白色土器皿、須臾器、平皿）。-1.65m以下、黄褐色粗砂の地山。No.2：-1.37m、時期不明の赤土。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成12年度』京都市文化市民局
	15	発掘	室町時代の自然河川、平安時代の堀跡、室町時代の寄持寺の堀跡、桃山時代の池など各種掘出。	『平安京左京西四坊七町跡・寄持寺跡』国鉄文化財株式会社

遺跡名	番号	調査	概要	文献
左京三条西坊八町	16	立会	No.1:0.6m、近世以降の痕跡、No.2:0.7m、中世の包含層(土師器類、土製品、瓦片)。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成28年度』京都市文化市民局
	17	立会	Q-1.25mにて鎌倉・室町の土坑各1。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局
	18	試掘	Q-0.2m以下、包含層3、鎌倉～室町2、江戸1、土坑2、平安後期の1、鎌倉前期1、鎌倉の舟形1。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和69年度』京都市文化観光局
	19	立会	1.65mで平安中期の包含層、2.13m以下、古墳の包含層(布疋式土器類、土製品)2、2.78m以下、瓦片層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化市民局
	20	立会	江戸時代後期・中期の包含層、横山～江戸初期の土坑3基、室町時代前期・中期の包含層、鎌倉時代の土坑、古墳時代の瓦片層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成15年度』京都市文化市民局
	21	立会	1.16mまで近世以降の土層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化市民局
	22	試掘	Q-1.7m以下、地山、中世の土坑を抽出するが、敷地大半は近世の瓦葺。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』京都市文化市民局
	23	立会	Q-0.85m以下室町・江戸・時期不明の包含層各1。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局
	24	立会	Q-0.5m以下、江戸後期・時期不明の包含層各1。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局
	25	立会	Q-1.35mにて室町の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局
西京左三条二町条	26	立会	No.1:1.9mで平安後期～中世の痕跡、-2.03m以下で平安後期の痕跡3、No.2:-2.4mで江戸初期の土坑4、-1.90m以下、に、黄褐色粘土の地山。No.3:-1.6mで二条大路路面、-1.64m以下、黄褐色砂の地山。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化市民局
	27	立会	0.2m、江戸末期の包含層。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局
	28	立会	-1.7mまで現代墓土。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成16年度』京都市文化市民局
	29	試掘	Q-1.6mで室町時代の遺物包含層。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成6年度』京都市文化観光局
	30	立会	No.1:-0.25m、近世以降の包含層、-1.3m、江戸後期の包含層(横山)2、-0.7m、近世以降の包含層。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成19年度』京都市文化市民局
	31	立会	Q-0.4m以下平安後期・鎌倉後期・江戸の包含層各1。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局
左京三条西坊九町	32	試掘	Q-2.9mまで発見、以下地山の砂となる。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成13年度』京都市文化市民局
	33	立会	-1.50m、江戸中～後期の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局
	34	立会	No.1:-1.02m、横山の包含層(土師器類、集結陶器類戸美濃系土灰土器小砂)、-1.3m、鎌倉前期の包含層(土師器類)、1.45mで黄褐色粘土の地山を切って平安末期のビレット(土師器類)、No.2:-1.3m、江戸前期の包含層(土師器類)、-1.48m、横山の包含層(土師器類、白磁、瓦片)、-1.85mで黄褐色粘土の地山を切って時期不明の痕跡、No.3:-2.6m、平安後期の包含層(土師器類)、-2.64m以下、黄褐色砂の地山。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』京都市文化市民局
	35	立会	Q-1.88m以下、平安前期の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成4年度』京都市文化観光局
	36	立会	No.1:-1.3m以下、平安後期・鎌倉の包含層、No.2:-1.3mで横山～江戸初期の包含層、1.95m以下、に、黄褐色粘土の無遺物層、横山より江戸初期の塚壘、塚部に「みたと藤土工師門」の刻印あり、No.3:-2.17mで平安前期かそれ以前の土坑(土師器、煎茶壺)。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局
	37	立会	Q-1.6mにて室町の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局
	38	立会	No.2:-2.0m、江戸の包含層(土師器類)、-2.3m以下、灰オリーブ色砂の地山、No.3:-1.9m以下、オリーブ褐色砂の地山。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局
	39	立会	-1.47m、江戸初期の痕跡(土師器類)。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』京都市文化市民局
	40	立会	Q-1.85mにて室町の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局
	41	立会	No.1:-2.2m、室町中期の包含層(土師器類)、No.2:-1.37m、室町時代の土坑、鎌倉・江戸の瓦葺、-1.85m、時期不明の包含層(瓦片)。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局
左京三条西坊十町	42	立会	Q-0.68m、江戸後期の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』京都市文化市民局
	43	立会	-3.2mまで既存基礎。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局
	44	試掘	Q-1.8mで中世以前の遺構を抽出。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局
	45	発掘	江戸時代の流路・植栽、平安時代の江戸・土坑・柱穴、室町時代の溝・柱列・土坑、江戸時代前期の井戸・土坑・石組、江戸時代後期の井戸・室・土坑・柱穴。	『平安京左京三条坊十町跡』2004-4 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
	46	発掘	平安時代の瓦工路、陶器片等に關する遺物が多く出土。	『平安京左京三条坊十町跡』2004-10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
	47	発掘	平安時代～室町前期の溝・小路路面と西側側溝・土坑・柱穴などを抽出。	『平安京左京三条坊十町丸丸跡遺跡』古代文化調査会
	48	発掘	古墳時代の土師類出土。平安～鎌倉の三条坊門小路の北側溝抽出。	『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所
	49	立会	No.14調査区：富小路路面・西側溝。	『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
左京三条西坊十町	50	発掘	No.16調査区：室町時代後半の溝造工跡とみられる遺構・溝造関連遺物。	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
	51	発掘	No.17調査区：平安時代の富小路路面・側溝。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
	52	発掘	弥生～古墳時代の遺物を含む発見、平安時代後期の溝造、鎌倉時代の土坑・溝・井戸・柱穴などを抽出。	『平安京左京三条坊十町：コスキヤリ跡富小路新築に伴う調査』古代文化調査会
	53	試掘	No.1:Q-1.8mで近世後・江戸時代の包含層、土坑を抽出、No.2:0.7m以下、江戸時代の包含層、1m以下、室町時代の包含層、-1.8m以下、平安時代～室町時代の土坑を抽出。	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター
	54	立会	Q-1.22m以下、推定三条坊門小路路面5。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化市民局 1988
	55	立会	No.15調査区：室町前半の遺構・遺物をまとめた形が多く抽出。	『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997
	56	発掘	No.18調査区：時期不明の土坑・井戸・発見。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994
	57	立会	No.1:Q-1.3mで室町の包含層、No.2:-2.6mで地山を切った時期不明の現状遺構。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成26年度』京都市文化市民局 2015
左京三条西坊十四町	58	立会	Q-0.85m以下、路面。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991
	59	立会	No.1:Q-0.85mで鎌倉末期の包含層、-0.7mで鎌倉前期の包含層、-3.6mで横山の包含層、-1.7mで時期不明の包含層。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006
	60	立会	No.1:Q-1.34mで横山～江戸初期の包含層、No.2:-1.72mで平安中期の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』京都市文化市民局 2002
	61	立会	Q-1.8mで横山の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化市民局 1988
	62	立会	Q-1.65～2.50mまで近世の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001
	63	試掘	遺重なる河川の氾濫により、遺構の残存状況は悪い。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成16年度』京都市文化市民局

遺跡名	番号	調査	概要	文献
左京二条西坊十五町	64	立会	№1: G1-1.06mで室町の包含層。-2.31mで室町の包含層。-2.6mで室町の包含層。 №2: -2.00m以下、室町の包含層。-2.21m時期不明の包含層。-2.86mで埋土。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成27年度』京都市文化市民局 2016
	65	立会	G1-1.11mで緑オリーブ褐色砂礫を切ってオリーブ褐色砂礫シルトの中世土灰吹積層(土師器層)。-1.42mで黄褐色砂礫。-1.82～-2.06mで短柱状褐色粘土質シルト(泥団)。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成28年度』京都市文化市民局 2017
	66	立会	東京橋大踏路の跡と調査を要す №1: G1-1.06m以下、室町の包含層。時期不明の踏面2。-1.9m以下、流れ堆積。 №2: -1.66以下、踏面2。 №3: -2.32mで平安後期の土師器層(西側溝)。	『京都市内遺跡立会調査概観 平成9年度』京都市文化市民局 1998
	67	立会	G1-1.87mで平安末～鎌倉の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概観 平成6年度』京都市文化観光局
	68	立会	G1-0.2m以下、江戸前期の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概観 昭和61年度』京都市文化観光局
	69	立会	G1-0.6mで近世以前の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概観 平成19年度』京都市文化市民局 2008
	70	立会	G1-0.2mで近世以前の包含層。-1.65mで時期不明の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概観 平成15年度』京都市文化市民局
	71	立会	G1-2.1mで平安末期の包含層を切って土坑4(平安後期2、江戸1、時期不明)。	『京都市内遺跡試掘立会調査概観 昭和61年度』京都市文化観光局
	72	試掘	G1-2.1mで平安末期の包含層。	『京都市内遺跡試掘調査概観 平成13年度』京都市文化市民局
	73	立会	G1-0.2mで室町の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概観 平成15年度』京都市文化市民局
	74	立会	G1-1.82m以下、平安後期。この層を切って平安～室町の土坑4。時期不明の東西方向土坑。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成27年度』京都市文化市民局 2016
	75	立会	G1-0.9mで江戸の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概観 昭和58年度』京都市文化観光局
	76	発掘	平安時代の池坊・唐土・柱穴・鎌倉～室町時代の土坑・井戸・墓石基礎、桃山～江戸時代の建物基礎・井戸・石垣・土坑など	『平安京左京三条四坊十五町烏丸御池遺跡: 池坊町の調査』古代文化調査会
	77	立会	G1-1.27m以下、推定中世の踏面3。室町以降。	『京都市内遺跡試掘立会調査概観 昭和62年度』京都市文化観光局
	78	立会	G1-1.45mで平安末期の土坑。	『京都市内遺跡試掘立会調査概観 平成元年度』京都市文化観光局
79	立会	G1-1.28mで江戸の包含層(中埋)。	『京都市内遺跡立会調査概観 平成11年度』京都市文化市民局	
左京二条西坊十六町	80	立会	G1-1.33mで時期不明の包含層。-1.52mで時期不明の包含層。-1.6mで室町の包含層。-1.72mで平安の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概観 平成12年度』京都市文化市民局
	81	立会	G1-1.05mで平安～鎌倉の土坑(土師器、緑褐色陶器、瓦器類)。-1.95m以下、短柱状褐色砂礫堆土。	『京都市内遺跡立会調査概観 平成11年度』京都市文化市民局
	82	立会	G1-0.2m以下、包含層3(室町1、江戸2)。	『京都市内遺跡試掘立会調査概観 昭和59年度』京都市文化観光局
	83	立会	№1: G1-1.55m・-1.63mで江戸前期の包含層2。 №2: -2.16mで江戸前期の包含層。 №3: -1.0mで室町末期の厚吹積堆積。-1.3mで室町後期の包含層。-1.5mで時期不明の包含層。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006
	84	立会	G1-1.3m以下、平安後期の推定東京橋大踏路面、東側溝、江戸の落込み。	『京都市内遺跡立会調査概観 平成3年度』京都市文化観光局
東京橋大踏	85	立会	№1: G1-0.43m以下、平安後期-江戸の包含層。-1.98 m以下、流れ堆積。 №2: -0.95 m以下、平安・室町の包含層。-1.7 m以下、短柱状褐色砂礫の厚吹積物。	『京都市内遺跡立会調査概観 平成8年度』京都市文化市民局 1997
	86	立会	G1-1.7mで室町の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概観 昭和61年度』京都市文化観光局 1987
	87	立会	G1-1.08mで平安後期の土坑。	『京都市内遺跡立会調査概観 平成9年度』京都市文化市民局 1998
	88	立会	G1-0.5mで暗褐色砂礫(図・堆土多量含)の江戸末期包含層。-0.8～-0.92mで黄褐色砂礫	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成28年度』京都市文化市民局 2017
	89	試掘	G1-1.35mで鎌倉末～室町前期の土坑3。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008
	90	試掘	G1-1.1mで時期不明の包含層。-2.2mで室町の土坑1	『京都市内遺跡試掘立会調査概観 昭和58年度』京都市文化観光局 1984
	91	試掘	№19調査区: 平安時代前期の東京橋大踏路面・東側溝。	『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概観』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
	92	立会	G1-0.92mで幅2.1m以上、深さ0.3m以上、の室町の南北方向の溝跡堆積。	『京都市内遺跡立会調査概観 平成9年度』京都市文化市民局 1998
	93	立会	№1: G1-0.9mで灰黄褐色砂礫の氾濫吹堆積。 №2: -2.45 m以下、土色黄褐色砂礫の堆土。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成23年度』京都市文化市民局 2012
	94	試掘	G1-1.1mで近世の土坑。土師器、土師器器、陶器類、墓石基礎などが出土。 1～4区では6面の遺構面を調査。抄巻半跡の遺構の位置を明らかにした。寺町以前の遺構としては平安から室町の井戸・土坑・溝などが確認した。寺町以前の遺構としては平安から室町の井戸・土坑・溝などや、土坑・柱穴、室町の石室・土坑、平安時代の土坑・埋蔵・埋土、鎌倉～室町代の土坑・溝・井戸・溝跡・倉所・建物・庫裏基礎。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局 2011
寺町日域	95	発掘	1～4区では6面の遺構面を調査。抄巻半跡の遺構の位置を明らかにした。寺町以前の遺構としては平安から室町の井戸・土坑・溝などが確認した。寺町以前の遺構としては平安から室町の井戸・土坑・溝などが確認した。寺町以前の遺構としては平安から室町の井戸・土坑・溝などが確認した。	現地説明会資料
	96	発掘	安土桃山時代の土坑・堀・踏面・柱穴・墓石・墓坑、江戸時代前期の土坑・石列・踏面・墓坑、江戸時代中期の土坑・石列・踏面・三和土・埋蔵・溝・瓦葺り・溝、江戸時代後期の土坑・埋蔵・埋土、鎌倉～室町代の土坑・溝・井戸・溝跡・倉所・建物・庫裏基礎。	『寺町日域(本能寺跡)』2017-10公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
	97	立会	№2: G1-1.32 mで近世の包含層。-1.54 mで鎌倉の包含層。-1.65 mで黒褐色粗砂礫。 №3: -2.7 mまで埋土。-3.0 mまで河川堆積と考えられる褐色粗砂礫(埋土)。-2.38 m主と暗褐色(砂礫)の堆土。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成27年度』京都市文化市民局 2016
	98	立会	№1: G1-0.4 m以下、褐色砂礫の氾濫吹堆積。 №2: -1.0 mで時期不明の包含層。-1.2 m以下、暗褐色砂礫の氾濫吹堆積。	『京都市内遺跡立会調査概観 平成19年度』京都市文化市民局 2008
99	立会	№2: G1-0.6 mで江戸前期の包含層。 №7: -1.1 mで江戸前期の包含層。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成23年度』京都市文化市民局 2012	

## 第3章 遺構

### 第1節 基本層序（第6・7図）

調査地は、麩屋町通と御幸町通が東西に面し、複数の建物にまたがる範囲で、建物解体後の更地の状態から調査を行った。

標高 42.4 mの現地表面から約 1.3～2.2 m下までが表層の造成土である。このうち現地表面から 0.7 m下で、0.2 m程の厚さで広がる焼土層を確認した。以下、明黄褐色砂礫の洪水層と赤褐色砂泥の焼土層が互層になっており、焼土層は最大 3 時期分を確認できている。各面の高低差は、全体的に西高東低で下面に行くに従い平坦になる。部分的に、近世以降の掘削・攪乱で地山面まで整地土が失われている箇所があるが、残存状態の良い部分では江戸時代、室町時代後期から安土桃山時代、室町時代前期、平安時代後期から鎌倉時代、平安時代中期以前の 5 つの遺構面が確認できたため、5 面の調査を行った。なお、3 区の A 2 グリッド北側から A 3 グリッドにかけてはすべての面で整地の単位が良好に残存していた。

第 1 遺構面は、表土層を除去し、暗灰黄色泥砂と暗灰黄色砂泥、灰褐色粘質土で確認した。江戸時代の初期に成立した遺構面で、標高は 41.0～41.4 m である。表土直下にあたるため、近・現代の攪乱坑も同一遺構面で確認できる。

第 2 遺構面は、第 1 遺構面を形成する厚さ 15～25cm の暗灰黄色泥砂と暗灰黄色砂泥、灰褐色粘質土を除去し、しまりのあるにぶい黄褐色砂泥と灰黄褐色砂泥で確認した。室町時代後期から安土桃山時代に成立した遺構面で、標高は 40.9～41.2 m である。

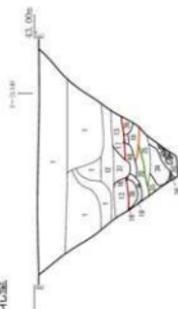
第 3 遺構面は、第 2 遺構面を形成する厚さ 11～15cm の黄褐色砂泥と灰黄色砂泥、灰黄褐色砂泥を除去し、しまりの強い黄褐色泥砂と黄褐色砂泥で確認した。第 3 遺構面は室町時代前期に成立した遺構面で、標高は 40.9 m 程である。第 3 遺構面は、大きく攪乱で壊されていた B 2 グリッド南半分と C 2 グリッド西側 3 分の 2 を除いた範囲で確認した。

第 4 遺構面は、第 3 遺構面を形成する厚さ 15～18cm の黄褐色泥砂と黄褐色砂泥を除去し、しまりの強い灰オリーブ色シルト（ウグイス土整地）と灰オリーブ色砂礫土で確認した。平安時代後期から鎌倉時代に成立した遺構面で、標高は 40.7～40.8 m と下面の落ち込みを均すように整地を施している。

第 5 遺構面は、第 4 遺構面を形成する厚さ 14～30cm の灰オリーブ色シルトと灰オリーブ色砂礫土を除去し、地山である灰黄褐色砂質土で確認した。平安時代中期以前に成立し、標高は 40.4～40.6 m と西から東にむけて落ちこむ地形を表している。

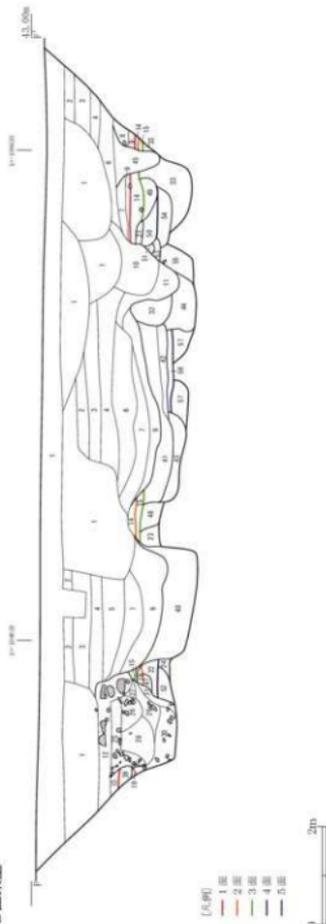


## 2区北壁

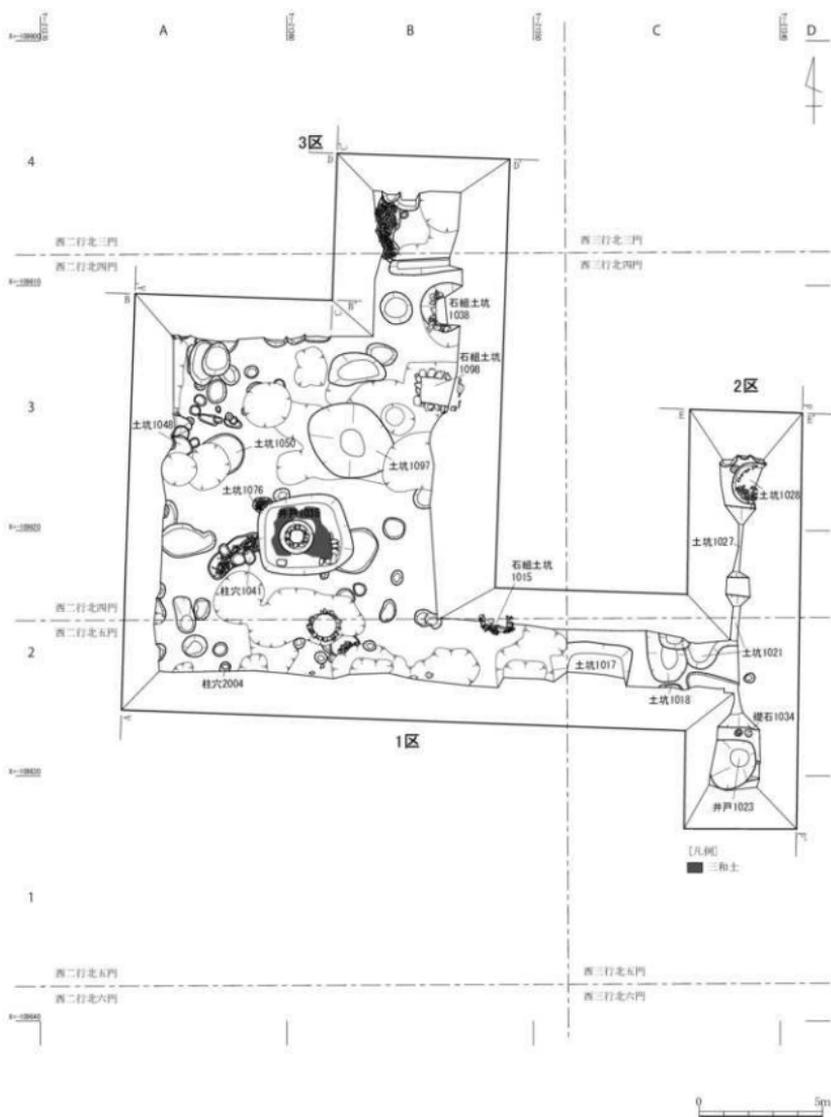


- |    |             |          |             |
|----|-------------|----------|-------------|
| 1  | 粘土・凝灰       |          |             |
| 2  | 粘土          |          |             |
| 3  | 粘土          |          |             |
| 4  | 粘土          |          |             |
| 5  | 粘土          |          |             |
| 6  | 粘土層         |          |             |
| 7  | 粘土          |          |             |
| 8  | 灰褐色砂泥       | しまりあり    |             |
| 9  | 灰褐色砂泥       | しまりあり    | 【土原1006】    |
| 10 | 凝灰色砂泥       | しまり強い    |             |
| 11 | 凝灰色砂泥       | しまり強い    | 礫入の種多く含む    |
| 12 | 凝灰色砂泥       | しまり強い    | 階段状に層まれた石あり |
| 13 | 灰褐色粘質土      | 堅質少      |             |
| 14 | 灰褐色粘質土      | 堅質少      | 粘性多         |
| 15 | 灰褐色砂泥       | しまりあり    |             |
| 16 | 黒褐色砂泥       | しまり強い    |             |
| 17 | 灰褐色砂泥       | しまりあり    |             |
| 18 | 凝灰色砂泥       | しまり強い    |             |
| 19 | 凝灰色砂泥       | 堅質あり     | 灰化物含む       |
| 20 | 凝灰色砂泥       | 堅質あり     |             |
| 21 | 灰黄褐色砂泥      | しまり強い    |             |
| 22 | 凝灰色砂泥       | しまりあり    |             |
| 23 | 凝灰色砂泥       | しまり強い    |             |
| 24 | 灰褐色粘質土      |          |             |
| 25 | 黒褐色粘質土      | しまり強い    | 礫入の種多く含む    |
| 26 | 凝灰色砂泥       | しまり強い    |             |
| 27 | 凝灰色砂泥       | しまり強い    | 礫入の種多く含む    |
| 28 | 凝灰色砂泥       | しまり強い    |             |
| 29 | 黒褐色砂泥       | しまり・粘性あり |             |
| 30 | 黒褐色砂泥       | しまりあり    | 礫入の種多く含む    |
| 31 | 灰白色砂泥       | しまりあり    |             |
| 32 | 灰白色砂泥       | しまり・粘性あり |             |
| 33 | 灰黄褐色砂泥      | 粘性       | しまりあり       |
| 34 | 灰黄褐色砂泥      | しまり強い    |             |
| 35 | 凝灰色粘質土      | しまり強い    |             |
| 36 | 凝灰色粘質土      | しまり強い    |             |
| 37 | 黒褐色砂泥       | しまりあり    | 【土原1006】    |
| 38 | 凝灰色砂泥       | しまりあり    | 【土原1007】    |
| 39 | 凝灰色砂泥       | しまりあり    | 【土原1033】    |
| 40 | 黒色粘土・灰褐色粘質土 | しまりあり    | 【土原1047】    |
| 41 | 凝灰色粘質土      | しまりあり    | 【土原1026】    |
| 42 | 凝灰色粘質土      | 堅質強い     | 【土原1028】    |
| 43 | 凝灰色粘質土      | 堅質強い     | 【土原1029】    |
| 44 | 凝灰色砂泥       | 【土原1019】 | 【土原1051】    |
| 45 | 凝灰色砂泥       | しまり強い    | 【土原1052】    |
| 46 | 凝灰色砂泥       | 【土原1028】 | 【土原1053】    |
| 47 | 凝灰色砂泥       | 【土原1028】 | 【土原1054】    |
| 48 | 凝灰色砂泥       | 堅質強い     | 【土原1013】    |
| 49 | 凝灰色粘土       | 【土原3019】 |             |
| 50 | 凝灰色砂泥       | しまりあり    | 【土原3011】    |
| 51 | 凝灰色砂泥       | 【土原3012】 |             |
| 52 | 凝灰色砂泥       | 【土原3012】 |             |
| 53 | 黒褐色粘質土      | 【土原4033】 |             |
| 54 | 灰黄褐色砂泥      | しまり・粘性強い | 【土原4032】    |
| 55 | 凝灰色粘土       | 粘性強い     | 【土原1006】    |
| 56 | 凝灰色砂泥       | しまり強い    |             |
| 57 | 明灰褐色粘質土     | しまりあり    | 【土原4064】    |

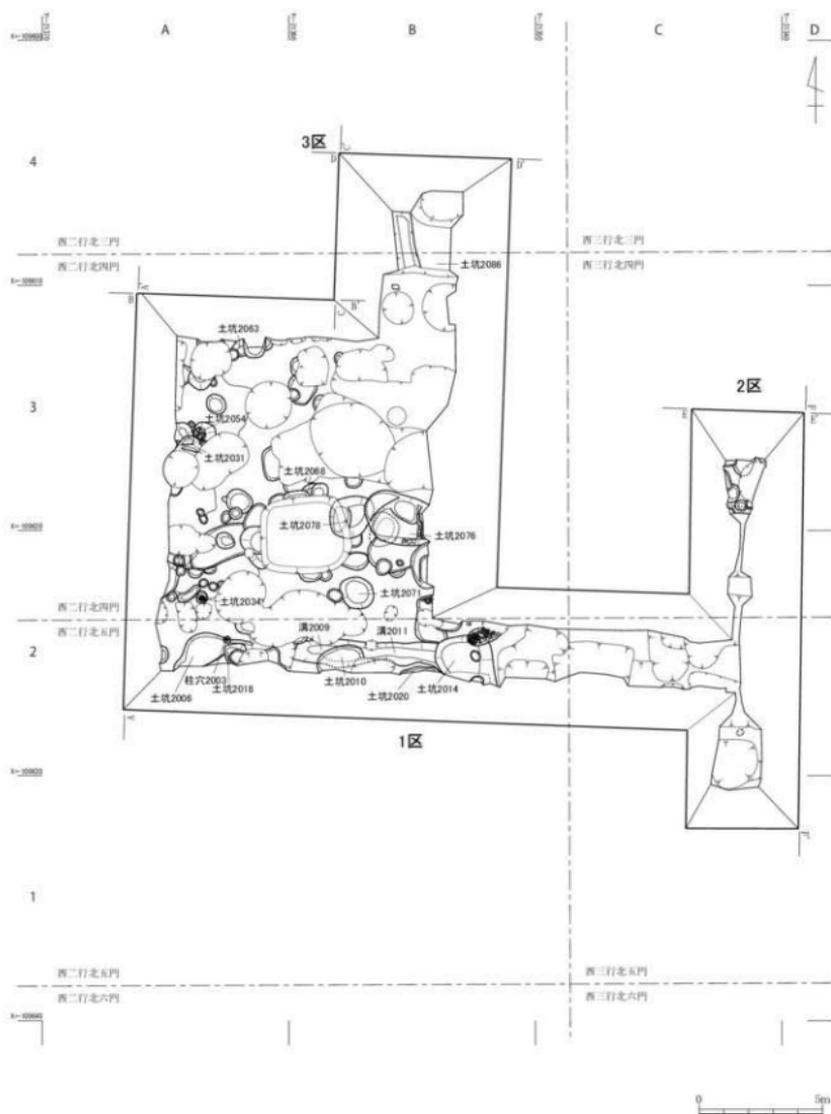
## 2区東壁



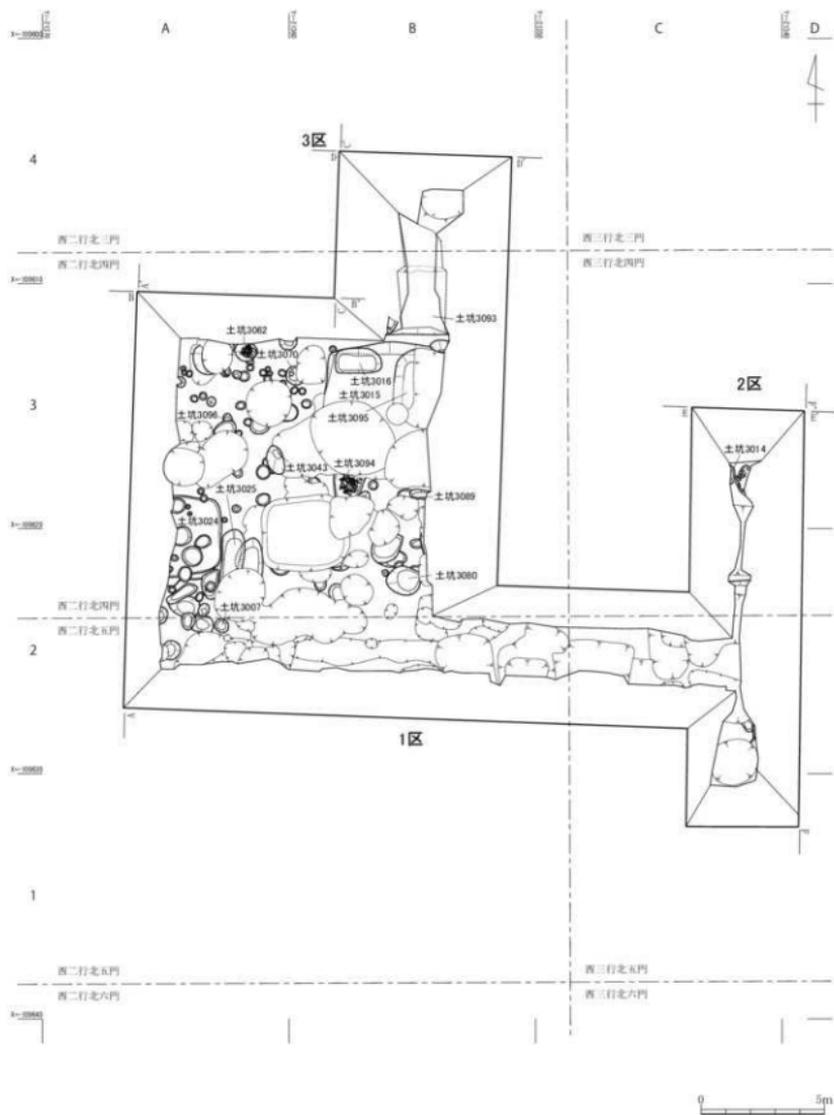
第7図 2区壁面図 (縮尺 1/100)



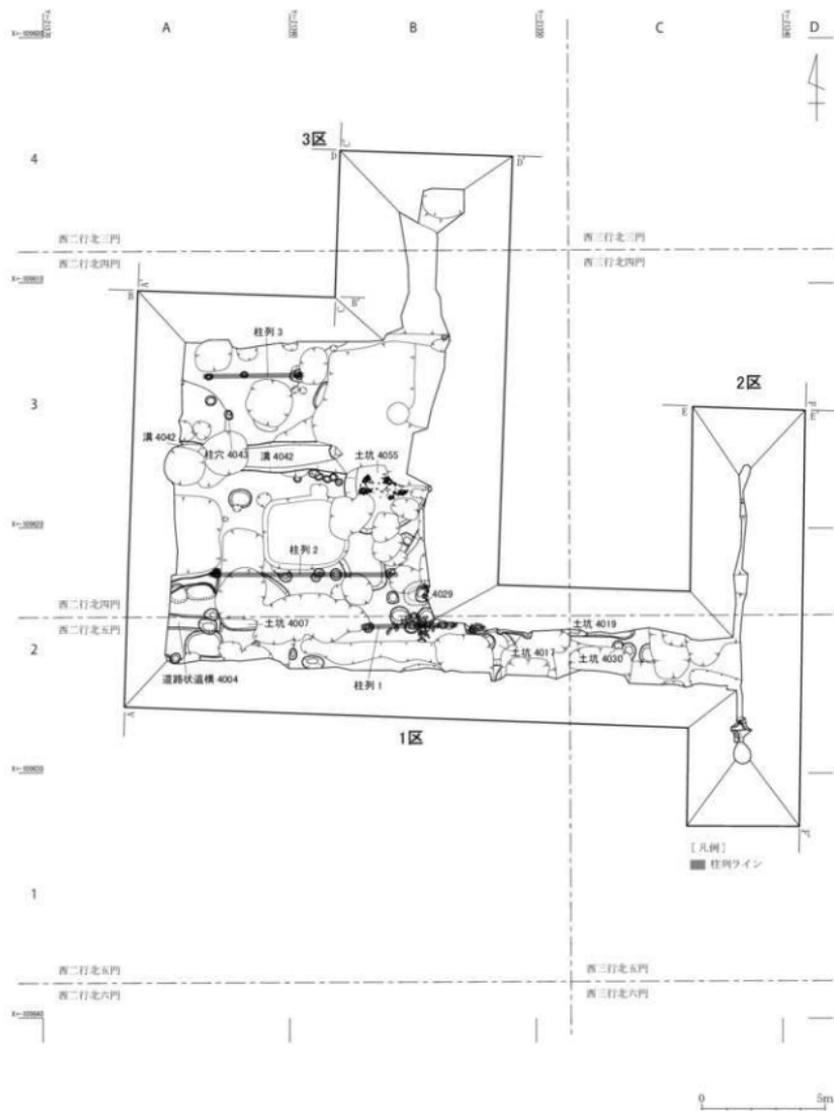
第8図 第1遺構面全体図 (縮尺1/200)



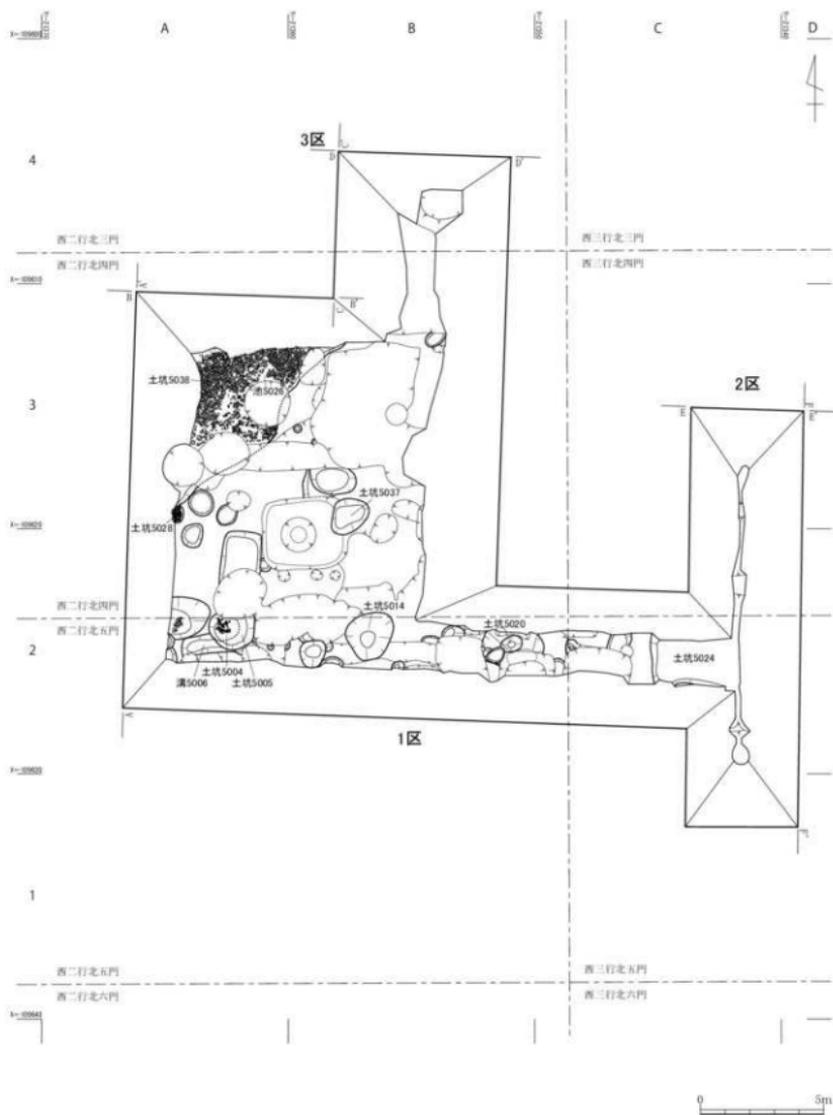
第9图 第2遺構面全体图 (縮尺1/200)



第10图 第3遺構面全体図(縮尺1/200)



第11図 第4遺構面全体図(縮尺1/200)



第12图 第5遺構面全体図(縮尺1/200)

## 第2節 遺構の概要

発掘調査では、平安時代中期から江戸時代までの408基の遺構を検出した。確認した遺構は、ピット、柱穴、柱列、土坑、井戸、溝、池である。

第1遺構面では、主に江戸時代の遺構を99基検出した。主な遺構は、柱穴、土坑、井戸である。また、江戸時代中期以降の方形石組土坑も確認した。

第2遺構面では、主に室町時代後期から安土桃山時代の遺構を101基検出した。主な遺構は、柱穴、土坑、溝である。

第3遺構面では、主に室町時代前期の遺構を102基検出した。主な遺構は土坑である。ピットも複数基検出したが、明確に建物や塀等の復元はできなかった。

第4遺構面は主に平安時代後期から鎌倉時代の遺構を69基検出した。主な遺構は、柱穴、柱列、土坑、溝である。柱列は掘方を伴わず整地層に礎石が埋め込まれているものや、一部礎石を据え付けた柱穴を確認している。

第5遺構面は地山面で、主に平安時代中期から鎌倉時代の遺構を38基検出した。主な遺構は、土坑、溝、池である。場所によっては上層で整地が繰り返されたため、遺構の時期に幅がある。

以下、主な遺構を一覧にした(第3表)。

第3表 遺構概要表

時代	主な遺構
江戸時代 (第1遺構面)	礎石 1034 柱穴 1041、2004 土坑 1017、1050、1076、1097 井戸 1035
室町時代後期 ～ 安土桃山時代 (第2遺構面)	柱穴 2003、2034 土坑 2014、2020、2031、2089、2054、2063、2076、2078、2090 溝 2009・2011
室町時代前期 (第3遺構面)	土坑 3007、3014、3015、3024、3062、3070、3080、3094、3095
平安時代後期 ～ 鎌倉時代 (第4遺構面)	柱穴 4043 柱列 1 (柱穴 4011-4012-4025) 柱列 2 (柱穴 4057-4040-4047、柱穴 4048-4049-4065) 柱列 3 (柱穴 4044-4045-4046) 土坑 4055 溝 4042 道路状遺構 4004
平安時代中期～鎌倉時代 (第5遺構面)	土坑 5004・5005、5014、5024、5028、5038 溝 5006 池 5026

### 第3節 第1遺構面検出の遺構（第8図・図版一・二）

第1遺構面で検出した遺構は、主に江戸時代である。

#### 礎石 1034（第13図、図版二）

C2グリッドで検出した、30cm四方の隅丸方形の石である。礎石とみられ、大きな据付穴や根石等はない。上面が平坦になるよう、明黄褐色粘土の整地面に直接埋め込まれている。礎石1034に対応する柱穴や礎石は確認できなかった。

#### 柱穴 1041（第13図、図版二）

A2グリッドで検出した、0.65m×[0.45m]、深さ0.09mを測る柱穴である。平面は円形で、底部に30cm×25cmの扁平な川原石を据え付けている。埋土は黒褐色砂泥である。

埋土からは16世紀（京都X期）の遺物が出土した。

#### 柱穴 2004（第13図、図版二）

A2グリッドで検出した、[0.37m]×0.32m、深さ0.12mを測る柱穴である。埋土は褐灰色砂泥である。少量の拳大の栗石と人頭大の方形の川原石を埋め込む礎石据付穴とみられる。柱穴2004に対応する柱穴列・礎石等は確認できなかった。

埋土から遺物は出土していない。

#### 土坑 1017（第13図、図版二）

C2グリッドで検出した、[2.64m]×[1.56m]、深さ0.91mを測る大型の土坑である。平面は方形である。埋土は全体的に褐灰色泥砂を多く含み、最下層に黒色粘土が広がる。

埋土からは16世紀後葉～17世紀中頃（京都X期新～XI期）の遺物が出土した。

#### 土坑 1050（第13図、図版三）

A3グリッドで検出した、1.6m×[0.77m]、深さ0.57mを測る土坑である。西側を攪乱で壊されているが、平面は円形で、断面は逆台形である。

埋土からは16世紀末～17世紀中頃（京都XI期）の遺物が出土した。

#### 土坑 1076（第13図、図版三）

A3グリッドで検出した、0.72m×[0.45m]、深さ0.57mを測る集石土坑である。平面は円形で、断面はU字形である。埋土は灰黄褐色砂泥で底面に15cm程の石、その間を詰めるように上面に5cm程の石を詰めており、根石と考えられる。

埋土からは近世の遺物が出土した。

#### 井戸 1035（第13図、図版三）

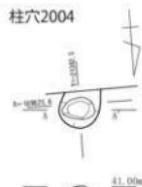
A・B2～3グリッドで検出した、3.82m×3.27m、深さ2.05mを測る井戸である。方形の堅穴に、検出面から1.10mの深さで黄褐色土の三和土を張り、周囲に30cm×20cm程の扁平な方形の石を巡らせている。堅穴中央に直径1.4m、深さ0.95mを測る円形の井戸本体がつくられている。井戸枠は石組みで、石組の最下層には方形に組まれた木枠を検出した。

埋土からは17世紀後半～18世紀前半（京都X期古～新）の遺物が出土した。

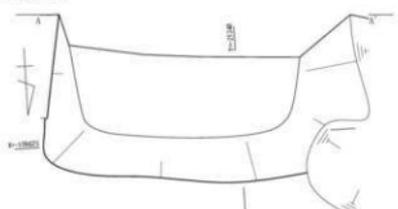
礎石1034



柱穴2004



土坑1017

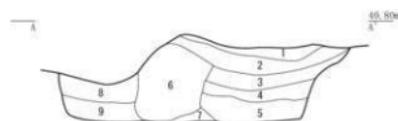


柱穴1041



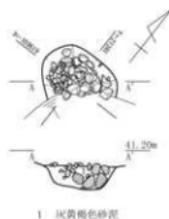
1 黒褐色砂泥 炭化物混じる。砂粒粗い。

1 褐色砂泥 しまりあり



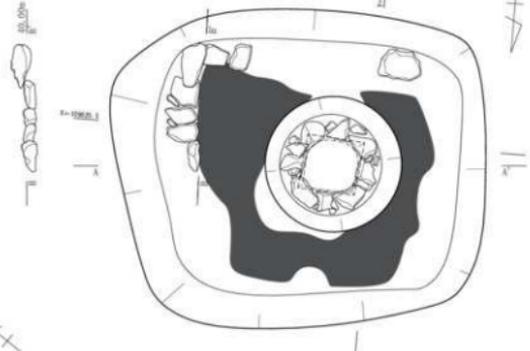
- |                 |              |
|-----------------|--------------|
| 1 灰色粘土          | 6 黒褐色粘土      |
| 2 黄灰色砂泥 土器片含む   | 7 炭化物・不純物混じる |
| 3 灰色砂泥          | 8 褐色粘質土      |
| 4 黒色粘土          | 9 黒色粘質土      |
| 5 暗黄灰色砂泥 炭化物混じる |              |

土坑1076

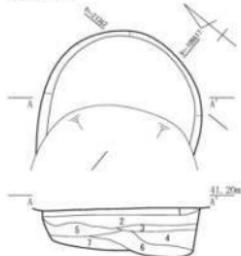


1 灰黄褐色砂泥

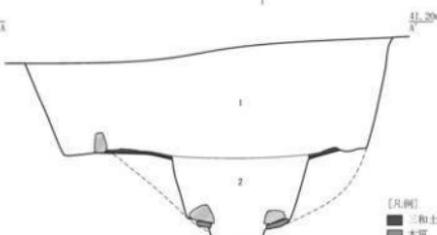
井戸1035



土坑1050



- 1 褐色砂泥 しまりあり
- 2 褐色砂泥 しまり強い
- 3 黒褐色粘土
- 4 灰黄褐色砂泥 しまり弱い
- 5 灰褐色砂泥 砂粒多量含む
- 6 褐色粘土 灰白色粘土ブロック含む
- 7 黒褐色粘土 粘性強い



- 1 赤褐色粘土 機土粒2.5以上炭化物多く含む
- 2 暗褐色砂泥

〔凡例〕  
 ■ 三和土  
 ■ 木質



第13図 第1遺構面遺構図(縮尺1/50)

#### 第4節 第2遺構面検出の遺構（第9図・図版四・五）

第2遺構面で検出した遺構は、主に室町時代後期から安土桃山時代である。

##### 柱穴 2003（第14図、図版五）

A2グリッドで検出した、 $0.33\text{ m} \times 0.29\text{ m}$ 、深さ $0.11\text{ m}$ を測る柱穴である。平面は円形の掘方で、断面は逆台形である。埋土にはふい黄褐色砂泥が堆積しており、埋土中に根石とみられる拳大の礫が詰まっている。礎石は確認できなかった。

埋土からは14世紀後半～15世紀前半（京都Ⅶ期）の遺物が出土した。

##### 柱穴 2034（第14図、図版五）

A2グリッドで検出した、 $0.39\text{ m} \times 0.36\text{ m}$ 、深さ $0.1\text{ m}$ を測る柱穴である。埋土は灰黄褐色砂泥で、埋土中に根石とみられる拳大の礫を多く含む。

埋土からは12世紀末～14世紀中頃と15世紀中頃～15世紀末（京都Ⅵ～Ⅶ期とⅨ期）の遺物が出土した。

##### 土坑 2014（第14図、図版五）

B2グリッドで検出した、 $2.45\text{ m} \times [1.82\text{ m}]$ 、深さ $1.03\text{ m}$ を測る大型の土坑である。平面は隅丸方形で、溝2009・2011を壊している。埋土は暗灰黄色粘質土と灰黄色砂質土が互層に堆積している。

埋土からは16世紀末～17世紀中頃（京都Ⅹ期新～Ⅺ期）の遺物が出土した。

##### 土坑 2020（図版六）

B2グリッドで検出した、 $[1.70\text{ m}] \times [0.37\text{ m}]$ 、深さ $0.6\text{ m}$ を測る土坑である。埋土はレンズ状に堆積し、最下層は黒色粘質土である。

埋土から遺物は出土していない。

##### 土坑 2031（第14図、図版六）

A3グリッドで検出した、 $[1.08\text{ m}] \times 0.72\text{ m}$ 、深さ $0.42\text{ m}$ を測る土坑である。平面は円形で、断面はU字形である。埋土は上層に灰褐色泥砂、下層に褐色砂泥が堆積している。上層はコースター形の土師器の破片が多く、下層は須恵器の破片が多い。上層と下層で埋没した時期差があるものと考えられる。

埋土からは11世紀末～13世紀中葉（京都Ⅴ期～Ⅵ期）の遺物が出土した。

##### 土坑 2054（第14図、図版五）

A3グリッドで検出した、 $[0.92\text{ m}] \times [0.83\text{ m}]$ 、深さ $0.4\text{ m}$ を測る土坑である。平面は円形で、断面はU字形である。埋土は褐色泥砂である。底面から遺物が多く出土した。

埋土からは12世紀中葉～12世紀末（京都Ⅴ期中～Ⅵ期古）の遺物が出土した。

##### 土坑 2063（第14図）

A3グリッドで検出した、 $[0.7\text{ m}] \times [0.4\text{ m}]$ 、深さ $0.4\text{ m}$ を測る土坑である。埋土は暗灰褐色砂泥である。

埋土からは11世紀末～13世紀後葉（京都Ⅴ期～Ⅶ期古）の遺物が出土した。

柱穴2003



1 上に、黄褐色砂泥  
しまりあり

柱穴2034



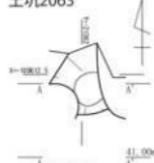
1 灰黄褐色砂泥

土坑2031



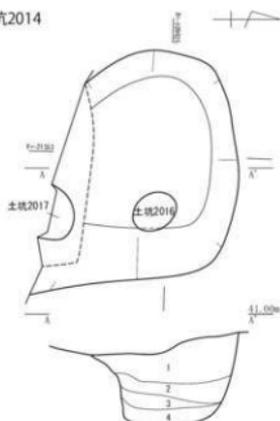
1 灰褐色泥砂 しまりあり  
2 暗灰色砂泥 粘性強い

土坑2063



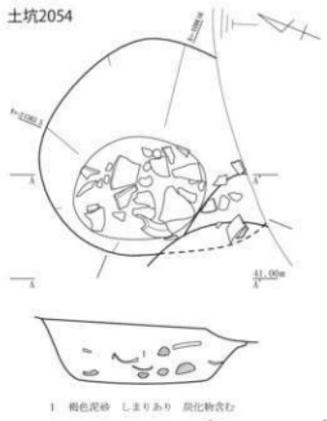
1 暗灰色砂泥 土器多く含む

土坑2014



1 暗灰色粘質土 3 暗灰色粘質土  
2 灰黄色砂質土 4 灰黄色砂質土

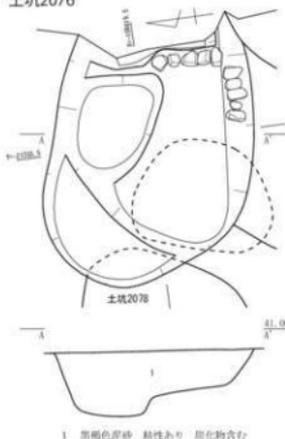
土坑2054



1 褐色泥砂 しまりあり 炭化物含む

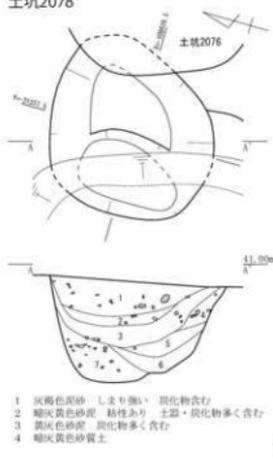
0 50cm  
土坑 2054 のみ

土坑2076



1 黒褐色泥砂 粘性あり 炭化物含む

土坑2078



1 灰褐色泥砂 しまりあり 炭化物含む  
2 暗灰色砂泥 粘性あり 土器・炭化物多く含む  
3 黄灰色砂泥 炭化物多く含む  
4 暗灰色粘質土

5 黄灰色粘質土  
6 灰黄色砂質土  
7 暗灰色砂泥

0 1m

第14図 第2遺構面遺構図1 (縮尺1/20・1/50)

**土坑 2076** (第 14 図、図版六)

B 2・3 グリッドで検出した、[3.14 m] × 1.93 m、深さ 0.72 m を測る大型の土坑である。平面は楕円形で、上層で直角に組んだ石列を検出した。石の大きさは 20cm × 10cm 程で、用途は不明である。埋土は黒褐色泥砂で、下層から遺物が多く出土した。

埋土からは 16 世紀中葉～17 世紀前葉(京都 X 期中～XI 期中)の遺物が出土した。

**土坑 2078** (第 14 図、図版六)

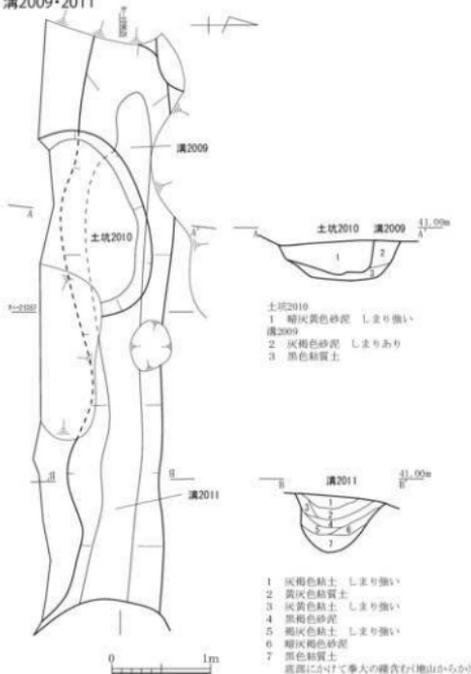
B 2・3 グリッドで検出した、2.02 m × 1.7 m、深さ 0.98 m を測る大型の土坑である。平面は隅丸方形、断面は逆台形で、東側を土坑 2076 に壊されている。埋土は上層に灰褐色砂泥、中層に暗灰黄色砂質土、下層に黄灰色粘質土、暗灰黄色砂礫が堆積する。

埋土からは 16 世紀中葉～17 世紀前葉(京都 X 期中～XI 期中)の遺物が出土した。

**溝 2009・2011** (第 15 図、図版六)

B 2 グリッドで検出した、検出長 5.7 m、幅 0.93～1.17 m、深さ 0.46 m～0.73 m を測る、東西方向(N-91°-E)に延びる溝である。四行八門の推定軸線より約 1 m 南で並行している。

**溝 2009・2011**



土坑 2010 に壊されており、検出時は 2 つの隅丸長方形の土坑が重複しているものと考えていたが、埋土や形状から見て同一のものと判断した。また、東側を土坑 2014 で壊されており、以東では確認できていない。

埋土からは 16 世紀初頭～17 世紀中頃(京都 X 期～XI 期)の遺物が出土した。

第 15 図 第 2 遺構面遺構図 2 (縮尺 1/50)

### 第5節 第3遺構面検出の遺構（第10図・図版七・八）

第3遺構面で検出した遺構は、主に室町時代前期である。

#### 土坑 3007（第16図、図版八）

A2グリッドで検出した、0.59 m × 0.54 m、深さ0.16 mを測る土坑である。平面は円形である。埋土は黄褐色泥砂で、瓦の破片が多く出土した。

埋土からは14世紀後半～15世紀前半および16世紀（京都Ⅷ期およびⅩ期）の遺物が出土した。

#### 土坑 3014（第16図、図版八）

C3グリッドで検出した、[0.78 m] × [0.19 m]、深さ0.12 mを測る土坑である。平面は楕円形とみられる。埋土は黒褐色粘質土で、焼土とみられる黒色の炭化物と白色の粘土ブロックを含んでいる。

埋土からは16世紀（京都Ⅹ期）の遺物が出土した。

#### 土坑 3015（第16図、図版八）

B3グリッドで検出した、[4.17 m] × [1.6 m]、深さ0.98 mを測る大型の土坑である。平面は方形、断面は箱型とみられるが、攪乱や土坑3092・3095などにより大部分を壊されている。

埋土は土器片や有機質、炭化物を多く含んでいる。

埋土からは16世紀初頭～17世紀前葉（京都Ⅹ期～Ⅺ期）の遺物が出土した。

#### 土坑 3095（第16図、図版八）

B3グリッドで検出した、[1.35 m] × [0.79 m]、深さ0.68 mを測る土坑である。石組土坑1098に壊されており平面形は不明だが、断面はU字形である。

埋土からは16世紀初頭～17世紀中頃（京都Ⅹ期～Ⅺ期）の遺物が出土した。

#### 土坑 3024（第16図、図版八）

A3グリッドで検出した、3.32 m × [2.03 m]、深さ0.24 mを測る土坑である。平面は方形で、断面は逆台形である。埋土はしまりの強い灰黄色粘土である。底部で地山の砂礫土が露出しており、第2遺構面造成時の整地で固められたものと考えられる。

埋土からは10世紀中頃～11世紀後半（京都Ⅲ期～Ⅳ期）の遺物が出土した。

#### 土坑 3062（第17図、図版九）

A3グリッドで検出した、0.93 m × [0.72 m]、深さ0.36 mを測る土坑である。平面は円形である。埋土は灰褐色泥砂で、比較的残りの良い状態の土師器の皿が多く出土した。

埋土からは12世紀前葉～13世紀前葉（京都Ⅴ期中～Ⅵ期中）の遺物が出土した。

#### 土坑 3070（第17図、図版九）

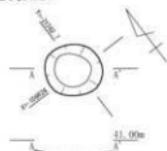
A3グリッドで検出した、0.77 m × [0.55 m]、深さ0.23 mを測る土坑である。平面は円形で、断面は逆台形である。埋土は暗灰黄色砂泥で、遺構の中央あたりで掘鉢（133）の下半部が底部を上にした状態で出土した。

埋土からは16世紀初頭～17世紀中頃（京都Ⅹ期～Ⅺ期）の遺物が出土した。

#### 土坑 3080（第16図、図版九）

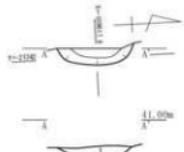
B2グリッドで検出した、1.37 m × 1.21 m、深さ0.31 mを測る土坑である。平面は円形である。

土坑3007



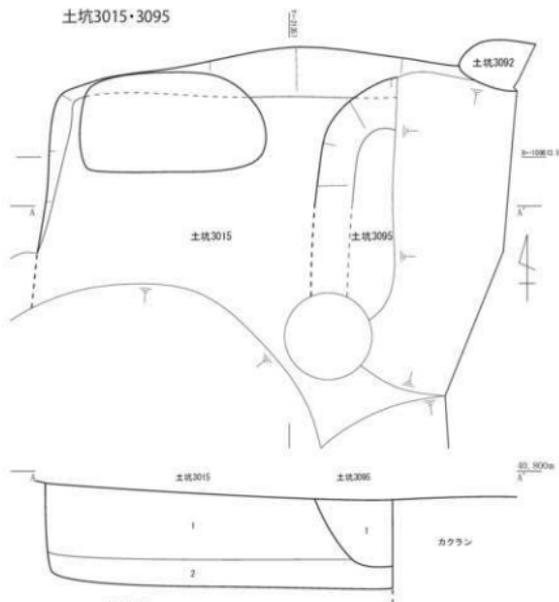
1 黄褐色泥砂 しまり強い  
瓦・拳人の礎多く含む 瓦葺

土坑3014



1 黒褐色粘質土 しまり強い  
炭化物・白色の粘土ブロック  
混じる (焼土少)

土坑3015・3095



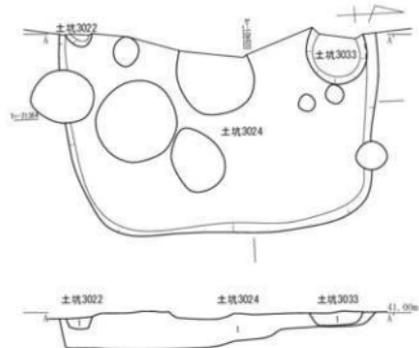
土坑3015

1 褐色泥砂 しまりあり 土器片等多く含む  
一部、黒褐色砂泥のブロック(骨を多く含む)が混じる  
2 灰褐色粘質土 粘性強い

土坑3095

1 黒褐色泥砂 しまり強い

土坑3024

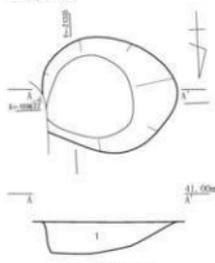


土坑3022  
1 灰黄褐色泥砂

土坑3024  
1 灰黄色粘土 しまり強い

土坑3033  
1 黄灰色粘土 しまり強い

土坑3080



1 灰黄褐色泥砂



第16図 第3遺構面遺構図1 (縮尺1/50)

埋土は灰黄褐色泥砂である。埋土に細かい土師器片を多く含んでおり、東端では完形の土師片がまとまって出土した。

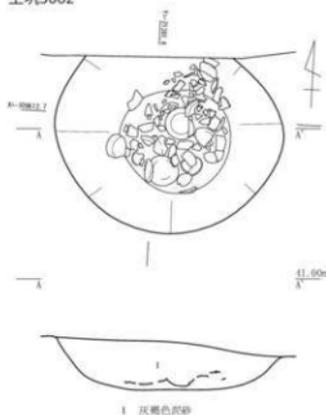
埋土からは13世紀後葉～15世紀前葉（京都Ⅶ期～Ⅷ期）の遺物が出土した。

#### 土坑3094（第17図、図版九）

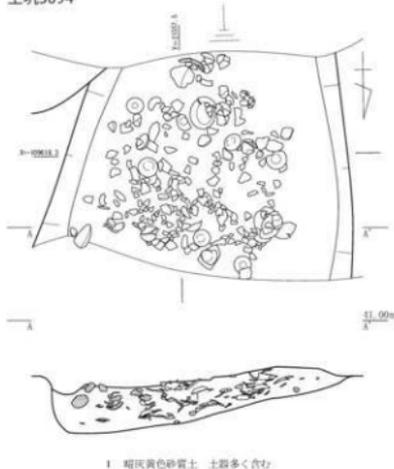
B3グリッドで検出した、[1.29 m] × 0.88 m、深さ0.18 mを測る土坑である。平面形は南北を攪乱で壊されているため不明だが、断面は東側が低い逆台形である。埋土は暗灰黄色砂質土で、土師器の皿がまとまって出土した。

埋土からは13世紀後葉～14世紀末（京都Ⅶ期～Ⅷ期中）の遺物が出土した。

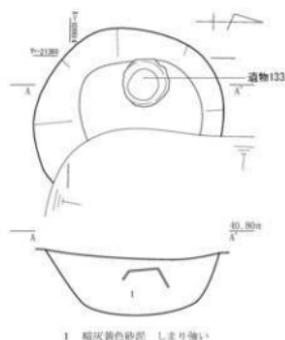
#### 土坑3062



#### 土坑3094



#### 土坑3070



第17図 第3遺構面遺構図2（縮尺1/20）

## 第6節 第4遺構面検出の遺構（第11図・図版一〇・一一）

第4遺構面で検出した遺構は、主に平安時代後期から鎌倉時代である。

### 柱穴4043（第18図、図版一一）

A3グリッドで検出した、0.39m×0.32m、深さ0.1mを測る柱穴である。平面は円形である。20cm×15cmの方形の礎石が確認でき、埋土には灰黄褐色泥砂が堆積していた。

埋土から遺物は出土していない。

### 柱列1（第18図、図版一二・一三）

B2グリッドで検出した、東西方向（N-89°-E）の礎石を伴う柱穴列（柱穴4011、4012、4025）である。検出長は約3.7mで、石の大きさは30cm前後である。

いずれも掘方は浅く、整地層に直接石を埋めこみ上面が平らになるように川原石を並べている。石上面の標高は40.65～40.68mである。ただ柱穴4025は礎石が浮いている状態で、掘方とした埋土は別の遺構である可能性もある。後述する道路状遺構4004の主軸上にあることや、四行八門の推定線と並行すること等を踏まえると、町家建物や区画に関する遺構と考えられる。

柱穴4011、4012の埋土からは11世紀前半～12世紀末（京都V期～VI期）、柱穴4025の埋土からは16世紀末の遺物が出土した。

### 柱列2（第18図、図版一二・一三）

A～B2グリッド調査区南側で検出した、東西方向（N-89°-E）の柱穴列（柱穴4057-4040-4047、4048-4049-4065）である。検出長は約7.4mで、柱穴の大きさは45cm前後である。柱穴4047、4048は、柱穴4047が柱穴4048を壊しており、一連ではなく建て直したものとみられる。

柱穴の中で根石を伴うもの（柱穴4057）や礎石を伴うもの（柱穴4065）を確認した。柱穴4057は拳大の礎を敷いた上に15cm×10cm程の扁平な川原石を置いている。ただし、川原石の高さや位置から考えると礎石ではなく、根固めである可能性もある。柱穴4065は5cm程の石と褐色砂泥の埋土の上に、上面が平坦になるように礎石となる川原石を据え付けている。

柱穴4040の埋土からは11世紀末～12世紀後葉（京都V期）、柱穴4047、4065の埋土からは11世紀末～13世紀中葉（京都V期～VI期）、柱穴4049の埋土からは13世紀後葉～14世紀中頃（京都VII期）、柱穴4057の埋土からは11世紀前半～12世紀後葉（京都IV期～V期）の遺物がそれぞれ出土した。

### 柱列3（第18図、図版一二・一三）

A～B3グリッドで検出した、調査区北側で検出した東西方向（N-88°-E）の柱穴列（柱穴4044-4045-4046）である。検出長は約3.9mで、柱穴の大きさは0.3～0.4mである。埋土は褐色灰色泥砂である。

柱穴4046は小礎の上に15cm×10cm程の川原石をおいている。掘方の隅に寄っていること、上面が傾いていることから根固めの一部であると考えられる。

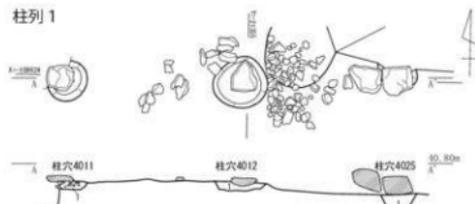
柱穴4044の埋土からは11世紀前半～12世紀後葉（京都IV期～V期）、柱穴4045の埋土からは古代～中世の遺物が出土した。

### 柱穴4043



1 灰黄褐色砂

### 柱列 1



柱穴 4041

1 黒褐色砂泥 しまりあり 礎石(上面が平らな45~50cmくらい)の石) 据付穴

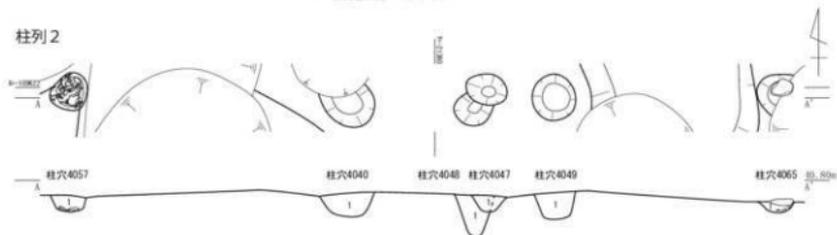
柱穴 4042

1 緑灰黄色砂泥 しまりあり 礎石(上面が平らな45~50cmくらい)の石) 据付穴

柱穴 4025

1 黒褐色砂泥 しまりあり

### 柱列 2



柱穴 4057

1 黄灰色砂質土 3cm程の小礫含む

柱穴 4040

1 褐色色泥砂

柱穴 4047

1 褐色色泥砂

柱穴 4048

1 灰黄褐色泥砂 3cm程の小礫多く含む

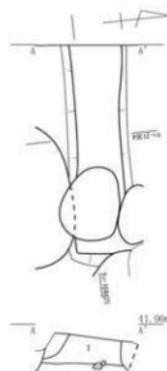
柱穴 4049

1 褐色色泥砂

柱穴 4065

1 褐色色泥砂

### 道路状遺構4004



1 灰黄色粘質土 しまり強い  
土手状の硬化面

### 柱列 3



柱穴 4044

1 褐色色泥砂 しまりあり

柱穴 4045

1 褐色色泥砂 しまりあり

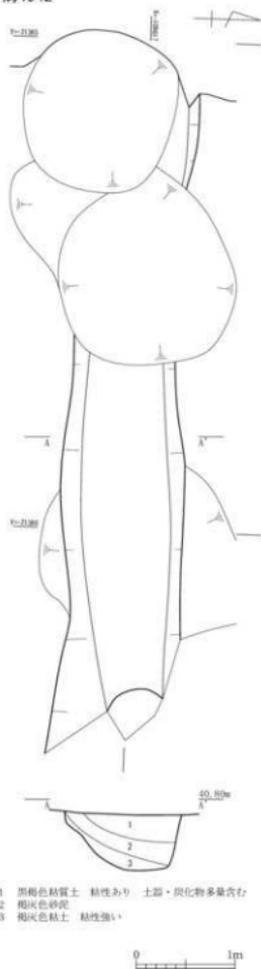
柱穴 4046

1 褐色色泥砂 しまり強い



第18図 第4遺構面遺構図1 (縮尺1/50)

溝4042



第19図 第4遺構面遺構図2 (縮尺1/50)

土坑 4055 (第20図、図版一)

B 3 グリッドで検出した、[3.38 m] × [2.87 m]、深さ 0.44 m を測る土坑である。平面は楕円形で、断面は緩く落ち込んでいる。埋土は東から西へ向けてレンズ状に堆積し、中心の炭化層を挟んで上下に遺物がまともに出て出土した。

埋土からは 13 世紀後葉～ 15 世紀前半 (京都Ⅶ期中～Ⅷ期中) の遺物が出土した。

道路状遺構 4004 (第18図、図版一)

A 2 グリッドで検出した、検出長 2.24 m、幅 0.6 m、高さ 0.21 m を測る東西方向に延びる土手状の硬化面である。しまりの強い灰黄色粘質土である。

遺物の出土は少なく、上層の遺構に壊された整地の残存とも考えられるが、柱列 1 とほぼ同一線上にあることや、四行八門の推定軸線と並行することから、区画のための塀の土台、道路などの可能性が考えられる。

埋土からは 14 世紀後半～ 15 世紀前半 (京都Ⅷ期) の遺物が出土した。

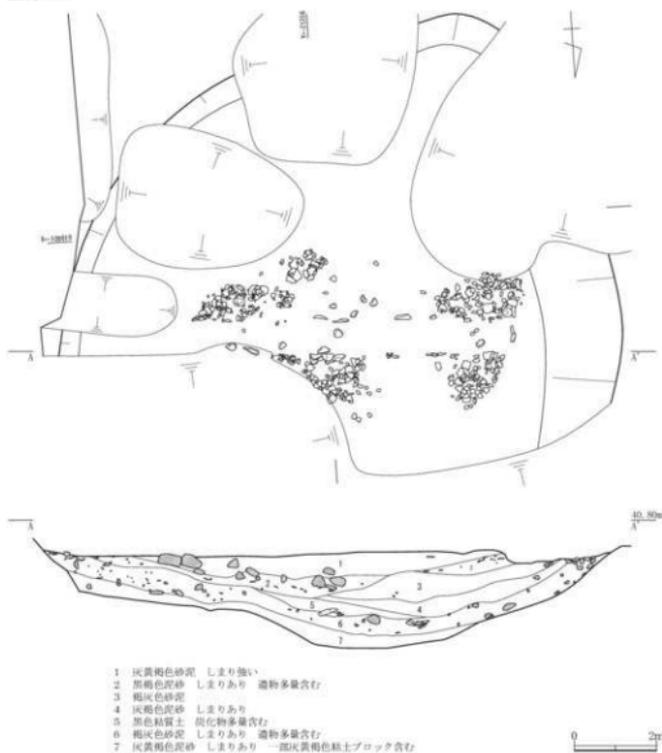
溝 4042 (第19図、図版一二)

A～B 3 グリッドで検出した、検出長 5.6 m、幅 1.25 m、深さ 0.6 m を測る、東西方向 (N-89° -E) に延びる溝である。西から東へ傾斜し、底面の標高は西端で 40.18 m、東側で 39.89 m と最大 0.29 m の高低差がついている。

断面は U 字形で、南から北にかけて緩く傾斜しており、埋土も南から北へ流れている。埋土は 3 層に分かれており、上層の黒褐色粘質土から土師器皿などが多く出土した。

埋土からは 12 世紀前葉～ 13 世紀前葉 (京都Ⅴ期中～Ⅵ期中) の遺物が出土した。

土坑4055



第20図 第4遺構面遺構図3 (縮尺1/30)

## 第7節 第5遺構面検出の遺構（第12図、図版一四・一五・一六）

第5遺構面で検出した遺構は、主に平安時代中期から鎌倉時代である。

### 土坑 5004・5005（第21図、図版一六）

A2グリッドで検出した、1.84 m × 1.31 m、深さ0.51 mを測る土坑である。平面は楕円形の掘方とみられ、北壁面に続いている。埋土は灰褐色土と黒褐色土が互層になっており、埋土中からは大量の土師器の皿が出土している。2つの円形土坑が重複しているが、時期差はほぼないものと判断して同時に調査を行った。

埋土からは14世紀中葉～15世紀初頭（京都Ⅶ期新～Ⅶ期中）の遺物が出土した。

### 土坑 5014（第21図、図版一六）

B2グリッドで検出した、2.1 m × [1.9 m]、深さ0.78 mを測る土坑である。平面は楕円形の掘方とみられる。埋土は下層にオリブ褐色泥砂が溜まっており水分を多く含む。

埋土からは13世紀初頭～中葉（京都Ⅵ期中～新）の遺物が出土した。

### 溝 5006（第21図、図版一六）

A2グリッドで検出した、検出長1.45 m、幅0.73 m、深さ0.54 mを測る東西方向（N-83°-E）に延びる溝である。土坑5004・5005に壊されている。

四行八門の推定軸線から0.6 m～0.8 m離れており、やや北東に振れているため完全に並行とは言えないが、上層で繰り返して東西方向に延びる溝や道路状遺構などがつくられていることから、区画溝の可能性が考えられる。

埋土からは14世紀中葉～14世紀末頃（京都Ⅶ期新～Ⅶ期中）の遺物が出土した。

### 土坑 5028（第21図、図版一七）

A3グリッドで検出した、[0.75 m] × [0.5 m]、深さ0.25 mを測る集石土坑である。埋土は褐色砂泥で、拳大の礫が3～4層に重なっている。上部は池5026に壊されており、埋土には池5026の埋土が混じる。

埋土から遺物は出土していない。

### 土坑 5038（第21図、図版一七）

A3グリッドで検出した、1.5 m × [0.65 m]、深さ0.3 mを測る土坑である。池5026の石敷の下で検出した。平面形は楕円形とみられ、埋土は明青灰色粘土である。粘性が強く上層の池5026とは異なる土である。

### 池 5026（第22図、図版十七・十八・十九）

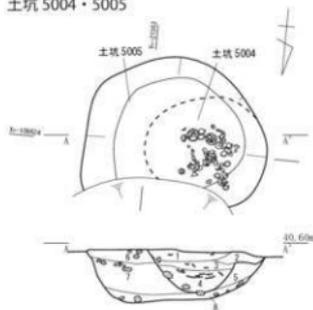
A3グリッドで[6.7 m] × [6.8 m]の範囲で検出した池である。平面形は、大半が調査区外へ延びており全容は明らかでない。深さは最大1.0 mで、断面形は一度緩やかに落ちた後さらに底部に向けてもう一段落ちた形となっている。埋土は粘土と砂質土が互層となり、レンズ状に堆積する。下層に行くほど粘性や水分が多く、埋土が灰黄褐色から明青灰色へと変化する。

明青灰色砂泥と粘土が混じる池の最下層に、1重～3重程に重なった石敷を検出した。遺構上端から底面まで石が敷き詰められており、検出面から0.4 mの深さで一度緩やかな平坦面を作り、調査区北壁の断面では掘方から3.5 m西で急激に落ち込んでいることが確認できる。また、この

落ち込みまでは石の大きさが15cm～20cmで強固であったのに対し、底部の石は10cm～15cmで脆弱になっている。石敷の下層より溝状の窪みも確認した。

埋土からは11世紀中葉または14世紀～16世紀(京都IV期またはVII期中～XI期古)の遺物が出土した。

### 土坑 5004・5005



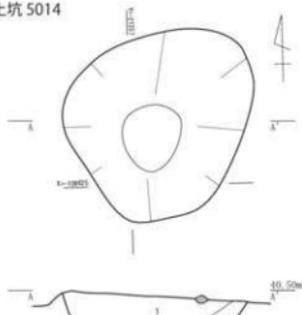
#### 土坑 5004

- 1 灰褐色粘質土 多量の土師器を含む
- 2 褐色粘土
- 3 灰褐色砂礫
- 4 黒褐色砂泥 多量の土師器を含む

#### 土坑 5005

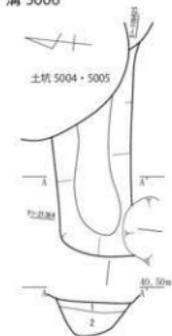
- 1 灰黄褐色砂質土 多量の土師器を含む
- 2 濃い褐色砂泥
- 3 黒褐色粘質土 粘質強い 粘土ブロックを含む
- 4 灰黄褐色砂礫 粘土を含む

### 土坑 5014



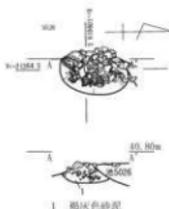
- 1 黒褐色泥砂 しまり強い  $\phi$ 10cm前後の礫、Feを含む
- 2 赤色粘質砂泥 土器を含む
- 3 暗灰黄色泥砂 しまりや強い  $\phi$ 10cm前後の礫を含む
- 4 オリーブ褐色泥砂  $\phi$ 10cm前後の礫を含む

### 溝 5006



- 1 暗灰黄色砂泥 シルト質 しまり強い
- 2 黒褐色砂泥 粘性あり

### 土坑 5028



- 1 褐色灰砂泥

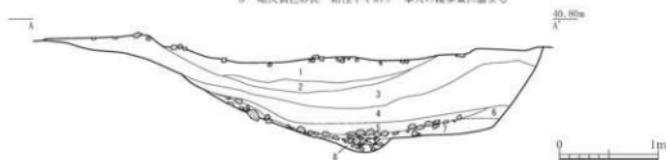
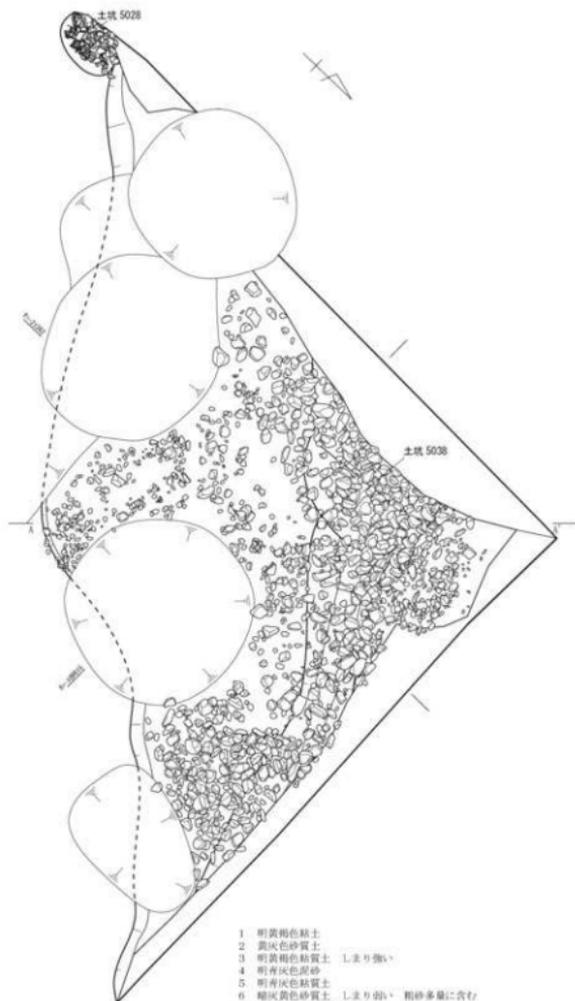
### 土坑 5038



- 1 明赤灰色粘土 しまり・粘性かなり強い



第21図 第5遺構面遺構図1 (縮尺1/50)



第 22 図 第 5 遺構面遺構図 2 (縮尺 1/50)

## 第4章 遺物

### 第1節 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物はコンテナ数で78箱である。整理段階でランク分けを行った結果、86箱となった。遺物の種類は土師器、須恵器、陶磁器、焼締陶器、瓦質土器、弥生土器、石器、石製品、金属製品など縄文時代から江戸時代までの遺物が出土した。内訳は近世以降（第1遺構面相当）が38箱、中世（第2～第4遺構面相当）が40箱、古代以前（第5遺構面相当）が8箱で、特に室町時代の遺物が多い。

以下、遺構別に概要を述べる。掲載遺物の詳細については、第4表の出土遺物観察表に記載した。

第4表 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク 点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
江戸時代 (第1遺構面)	土師器、陶器、磁器、瓦、土製品、石製品、金属製品、埴埴、骨、貝	38	土師器7点、青磁2点、後継陶器2点、施釉陶器13点、磁器6点、瓦3点、土製品2点、石製品3点、骨16点(3.5箱)	1.5	33
室町時代後期 ～ 安土桃山時代 (第2遺構面)	土師器、須恵器、山瓦質土器、白磁、青磁、山茶碗、陶器、磁器、瓦、土製品、石製品、金属製品、骨、貝、取織、埴埴	40	土師器20点、須恵器1点、瓦質土器5点、白磁1点、青磁1点、山茶碗1点、焼締陶器2点、施釉陶器16点、緑釉陶器1点、磁器3点、土製品4点、石製品7点、石器1点(3箱)	0.5	16.5
室町時代前期 (第3遺構面)	土師器、白色土器、須恵器、瓦質土器、白磁、青磁、山茶碗、陶器、磁器、瓦、石製品、金属製品		11		
平安時代後期 ～ 鎌倉時代 (第4遺構面)	土師器、白色土器、須恵器、瓦質土器、白磁、青磁、焼締陶器、施釉陶器、戻釉陶器、緑釉陶器、陶器、磁器、瓦、石製品、金属製品、埴埴		7		
平安時代中期 以前 (第5遺構面)	土師器、須恵器、瓦質土器、白磁、青磁、戻釉陶器、緑釉陶器、陶器、瓦、石製品、金属製品	8	土師器16点、古式土師器1点、須恵器1点、施釉陶器1点、陶器1点、土製品1点(0.5箱)		7.5
合計		86箱	226点(9箱)	2箱	75箱

### 第2節 第1遺構面出土遺物

#### 土坑1017（第23図、図版二〇）

土師器・瓦質土器・青磁・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦・石製品（砥石）・金属製品（銅銭）が出土している。

1は土師器の皿である。厚手の丸底であり、内面にヘラによる凹線状図線が明瞭に施される。2は青磁の碗である。腰高であり削出し高台は無軸で畳付に窯磁が付着する。初期伊万里の1630～1650年代のものと考えられる。3は焼締陶器である。信楽の挿鉢で、挿鉢目は7条1単位である。B7類の16世紀末のものと考えられる。4は施釉陶器である。瀬戸美濃の天目茶碗で、高台内側は中央が下がる。体部は直線的に開いて口縁部はくびれ、端部は外反する。16世紀末（大窯第4段階）のものと考えられる。5・6は砥石である。5は両側面と小口を含め5面使用されている。携帯型の中砥石で、石材は大文字山などで産出されるアブライトである。6は表裏2面使

用されている。携帯型の中砥石で、石材は珪質頁岩が熱変成を受けたホルンフェルスである。

出土した遺物の時期は、16世紀後葉～17世紀中頃（京都X期新～XI期）である。

#### 土坑 1018（第23図、図版二〇）

土師器・瓦質土器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・金属製品が出土している。

7は施釉陶器である。瀬戸美濃の碗で、削出し高台であり、内外面に長石釉が施されている。17世紀前葉のものと考えられる。

出土した遺物の時期は、16世紀末～17世紀中頃（京都XI期）である。

#### 土坑 1021（第23図、図版二〇）

土師器・須恵器・瓦質土器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦・土製品（輪羽口）・石製品（砥石）・金属製品（銅銭・具足・刀子）が出土している。

8は土師器の羽釜である。球形の体部中央に鑊が付き、口縁部はL字状に外反する。内面にヨコハケが施されている。9は施釉陶器である。織部の向付で、扇形かと思われる。10は磁器の大皿である。底部に多量の窯砂が付着する。内面に青花鹿もしくは鳳凰文が施される。中国福建省漳州窯産の17世紀前半のものと考えられる。11は土製品の輪羽口である。外面に寸紗の痕がみられる。

出土した遺物の時期は、16世紀末～17世紀前半（京都XI期古～新）である。

#### 井戸 1023（第24図、図版二〇）

土師器・白磁・焼締陶器・磁器・瓦が出土している。

12・13は井戸枠瓦である。凸面全面に滑り止めの押型が施される。12は凹面に縦方向の擦り傷が多数みられる。寸法は八九物に近いが、厚さは約3cmで反りは小さく重厚なつくりである。これらの他にも凸面の押型がない瓦が出土しているが、凹面に12と同様の傷がみられるものもある。この傷は、井戸から水を汲み上げる際につるべが当たってきたものという考察がされている（註1）。そのため、傷の多い瓦は、上下の際に接触頻度の高い井戸の中段に積まれたものと推察する。井戸を廃絶した際に崩落した構造物であり、江戸時代末以降のものと考えられる。

出土した遺物の時期は、18世紀中頃～19世紀末（京都XIII期～XIV期）である。

#### 土坑 1027（第23図、図版二〇）

土師器・瓦質土器・白磁・青磁・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦・土製品（埴壇）・石製品（砥石）・金属製品（銅製品）・その他（骨・貝）が出土している。

14・15は土師器である。14は皿で、口縁部は肥厚し、内面に凹線状図線がみられる。15は焙烙鍋で、口縁部は外側へ開く。外面に煤が付着している。16・17は施釉陶器である。16は唐津の溝縁皿で、削出し高台であり、見込みに砂目跡が残る。1720～1730年代のものと考えられる。17は黄瀬戸の小坏で、底部は削出し高台である。18は磁器の小碗である。底部に多量の窯砂が付着する。外面に染付東屋山水文が描かれる。初期伊万里の1630～1650年代のものと考えられる。19は砥石である。表裏面に深い研磨溝が縦方向に各4条、横方向に複数条みられる。側面も1面使用されている。石材は珪質頁岩である。

出土した遺物の時期は、16世紀末～18世紀前半（京都XI期～XII期）である。

#### 土坑 1028 (第 23 図、図版二一)

土師器・白磁・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦・土製品(埴埴)・金属製品(火箸)が出土している。20 は軟質施釉陶器の蓋である。平面楕円形と推定され、内外面に透明釉が施されているが風化で剥離が進んでいる。18 世紀～19 世紀のものと思われる。他に「深草/砂川/権兵衛」の刻印をもつ焼塩壺の蓋がある。

出土した遺物の時期は、17 世紀～18 世紀前半(京都 XI 期中～XII 期)である。

#### 井戸 1035 (第 23 図、図版二一)

土師器・瓦質土器・白磁・青磁・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦・石製品・金属製品(鉄釘)・その他(骨)が出土している。

21・22 は施釉陶器である。21 は京碗で、外面に鉄絵が描かれ、内外面に黄釉が施される。22 は唐津の京焼風陶器の中皿で、見込みに鉄絵楼閣山水文が描かれ、内外面に貫入のある黄釉が施される。高台内に刻印がみられる。23 は青磁である。肥前の皿で、高台無軸であり、見込みに蛇の目軸刺しが施される。17 世紀後半～18 世紀前半のものと考えられる。24・25 は磁器である。24 は伊万里の碗で、外面に染付のコンニャク印判草文と高台内に「大明年製」銘が描かれる。18 世紀初頭のものと考えられる。25 は伊万里の仏匱具で、外面に染付のコンニャク印判牡丹文が描かれる。高台に窯砂が付着する。18 世紀前葉のものと考えられる。

出土した遺物の時期は、17 世紀後半～18 世紀前半(京都 XII 期古～新)である。

#### 石組土坑 1038 (第 25 図、図版二一)

土師器・瓦質土器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦・土製品(埴埴)・その他(骨)が出土している。26 は土師器の皿である。口縁部は肥厚し、外面にユビオサエ、内面に凹線状圏線が明瞭にみられる。27 は施釉陶器である。京焼の京碗で、見込みに鉄絵東屋山水文が描かれ、内外面に黄釉が施される。高台内に刻印がみられる。28・29 は磁器である。28 は碗で、外面に染付草花文が描かれる。高台は無軸である。初期伊万里の 1630～1650 年代のものと考えられる。29 は大皿で、施釉は厚く内面に青花草花文が描かれる。高台に窯砂が付着する。中国福建省漳州窯産の 17 世紀前半のものと考えられる。30 は土製品の埴埴である。筒形で、外面には自然釉や付着物がみられる。内面の成分分析の結果、亜鉛と銅が検出されたため、真鍮と考えられる(註 2)。

出土した遺物の時期は、16 世紀末～17 世紀頃(京都 X 期新～XI 期中)である。

#### 土坑 1048 (第 25 図、図版二一)

土師器、施釉陶器が出土している。

31・32 は土師器の皿である。31 は口縁を内側へ折り返すコースター形である。32 は赤色系で、口縁端部は内傾し三角形を呈する。

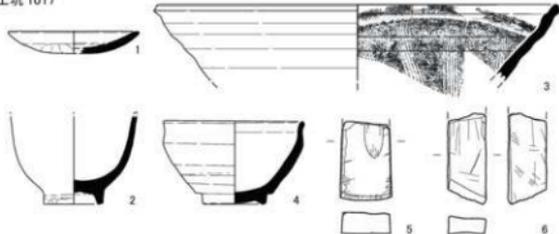
出土した遺物の時期は、11 世紀末～13 世紀中葉(京都 V 期～VI 期)である。

#### 土坑 1050 (第 25 図、図版二一)

土師器・須恵器・瓦質土器・白色土器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・その他(焼土・骨)が出土している。

33・34 は施釉陶器である。33 は唐津の皿で、内面に鉄絵が描かれる。古唐津で 17 世紀前葉の

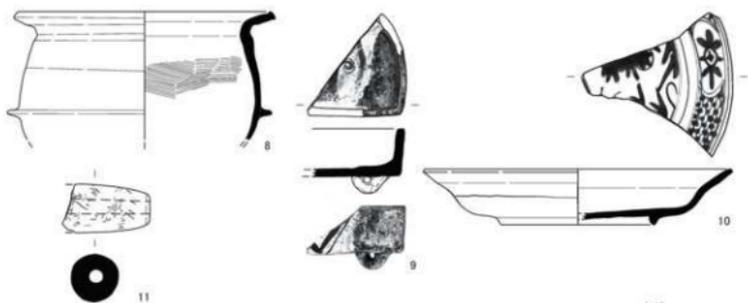
土坑 1017



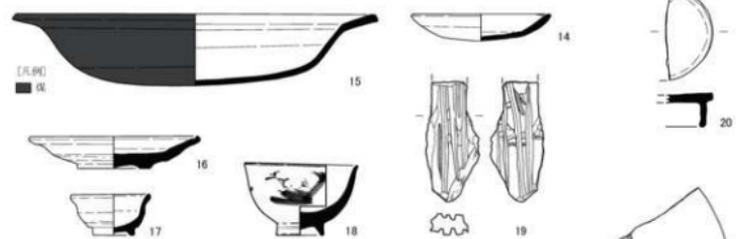
土坑 1018



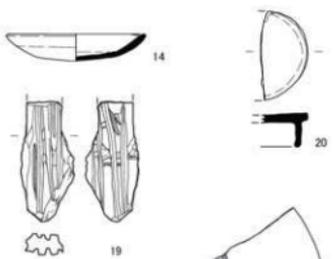
土坑 1021



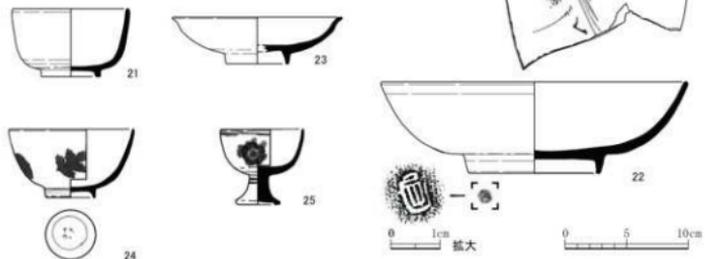
土坑 1027



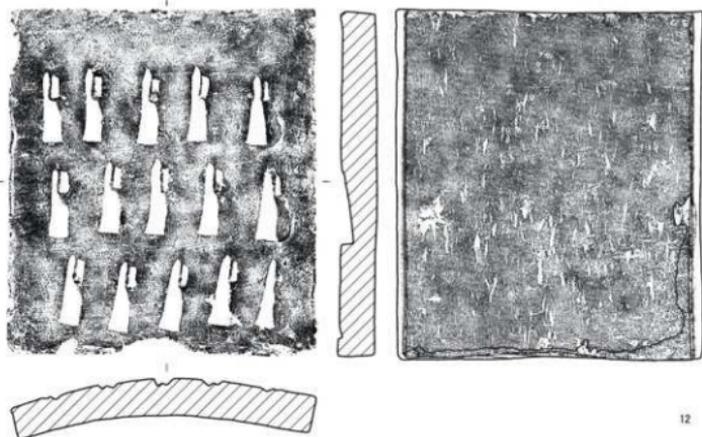
土坑 1028



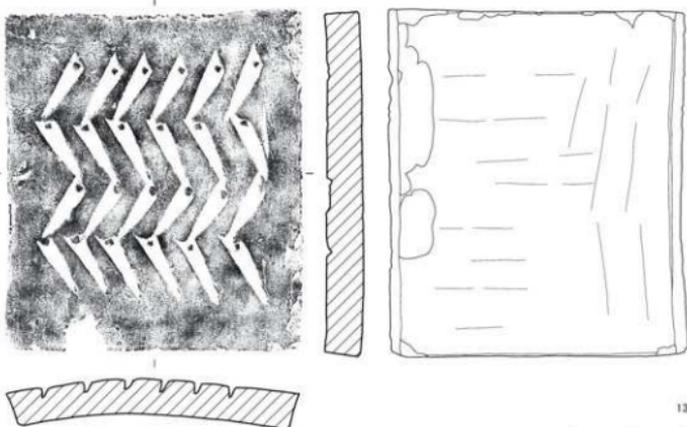
井戸 1035



第 23 图 第 1 遺構面出土遺物実測図 1 (縮尺 1/4)



12



13

第24図 第1遺構面出土遺物実測図2 (縮尺1/4)

ものと考えられる。34は織部の皿で、内外面に織部釉が施される。見込みに目跡が残る。35は焼締陶器である。丹波の播鉢で、口縁端部は角形を呈し、播り目はヘラ状工具による1条1単位である。Ⅷ期D類で16世紀後半～17世紀前半のものと考えられる。内面に赤色顔料が付着している。成分分析の結果、ベンガラである(註2)。

出土した遺物の時期は、16世紀末～17世紀中頃(京都XI期)である。

土坑 1097 (第 25 図、図版二)

土師器・瓦質土器・青磁・焼締陶器・施軸陶器・瓦・金属製品 (鉄釘・鋌・銅製煙管)・その他 (骨) が出土している。

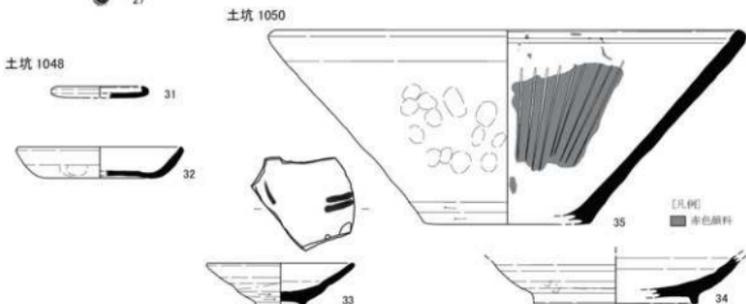
36・37は施軸陶器である。36は瀬戸美濃の碗で、削出し高台であり、内外面に透明度の高い灰釉が施される。見込みに目跡が残る。37は志野の皿で、削出し高台であり、高台も施軸される。内面に鉄絵圈線草花文が描かれる。見込みに目跡が残る。17世紀前葉のものと考えられる。38は軒平瓦で、瓦当文様は巴文剣頭文である。凹面に布目痕が残る。山城産の12世紀のものと考えられる。混入品であろう。

出土した遺物の時期は、16世紀末～17世紀前葉 (京都XI期古～中) である。

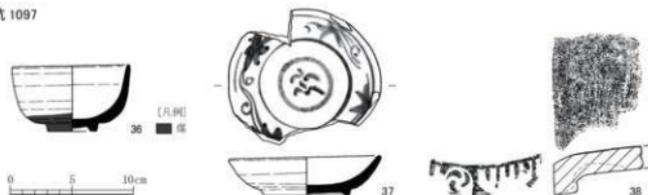
石組土坑 1038



土坑 1048



土坑 1097



第 25 図 第 1 遺構面出土遺物実測図 3 (縮尺 1/4)

### 第3節 第2遺構面出土遺物

#### 土坑 2006 (第26図、図版二二)

土師器・須恵器・瓦質土器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦・金属製品(鉄釘・銅製煙管)が出土している。

39は瓦質土器の瓦灯である。中央部に器台を持つ皿である。40は施釉陶器で、瀬戸美濃の天目茶碗である。削出し高台は高台内の削り込みが浅く、体部は直線的に開いて口縁部はくびれ端部は外反する。17世紀前葉(登窯第1段階)のものと考えられる。

出土した遺物の時期は、16世紀末～17世紀中頃(京都XI期)である。

#### 溝 2009 (第26図、図版二二)

土師器・焼締陶器・施釉陶器・磁器が出土している。

41は土師器の皿である。内面に凸状圏線の痕跡がある。42は施釉陶器で、志野の水指である。外面に鉄絵が描かれる。43は磁器の輪花碗である。器厚は薄く、外面に青花飛鳥文が描かれる。景徳鎮産で16世紀後半のものと考えられる。

出土した遺物の時期は、16世紀初頭～17世紀中頃(京都X～XI期)である。

#### 土坑 2010 (第26図、図版二二)

土師器・施釉陶器・磁器・石製品(砥石)が出土している。

44は施釉陶器である。志野の碗と思われる。

出土した遺物の時期は、16世紀初頭～末(京都X期)である。

#### 溝 2011 (第26図、図版二二)

土師器・白磁・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦・石製品(基石?)・金属製品(銅製煙管)・その他(焼土)が出土している。

45・46は土師器である。45は白色系の皿で、内面に凹線状圏線がやや強く施される。46はミニチュア土器のつぼつぼである。外面全周に墨書が書かれている。47は施釉陶器で、瀬戸美濃の段皿である。削出し高台で、内外面に透明度の高い灰釉が施される。48は土製品の取鍋である。小型で、内面には緑青が付着している。成分分析の結果、青銅である(註2)。

出土した遺物の時期は、16世紀後葉～17世紀中頃(京都X期新～XI期)である。

#### 土坑 2014 (第26図、図版二二)

土師器・瓦質土器・青磁・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦・土製品(埴塙・取鍋・轆轤口)・石製品(砥石)・金属製品(銅製煙管・鉄鉾・鉄釘・刀子)が出土している。

49～51は白色系の土師器の皿である。49は口径5.6cmの小型、50は小型、51は内面に凹線状圏線がみられる大型である。52は焼締陶器である。信楽の描鉢で、描り目は6条1単位の片口である。B6b類で16世紀後葉のものと考えられる。53～55は施釉陶器である。53は黄瀬戸の小皿で、全面に施釉されている。54は瀬戸美濃の天目茶碗で、体部は直線的に開き、口縁部はくびれ端部は外反する。内外面には柿釉が施される。17世紀後半(登窯第2段階)のものと考えられる。55は織部の折縁大皿で、内面に鉄絵植物文が描かれる。56は青磁の碗である。高台は無釉である。初期伊万里の1630～1650年代のものと考えられる。57は磁器の筒型碗であ

る。外面に染付撫子唐草文が描かれる。初期伊万里の1610～1630年代のものと考えられる。58～60は土製品の取鍋である。58は小型で、内面には緑青が付着している。成分分析の結果、鉛・銅合金である。59は中型で、内面は被熱により赤色化している。内面の成分分析の結果、金属は検出されなかった。60は大型で、口縁端部は角形、内外面はナデによる調整が施される。内面の成分分析の結果、銅合金が検出された(註2)。61・62は砥石である。62は表裏面と側面1面が使用されている。どちらも仕上げ砥石で、石材は珪質頁岩である。

出土した遺物の時期は、16世紀後葉～17世紀中頃(京都X期新～XI期)である。

#### 土坑 2018 (第27図、図版二二)

土師器・瓦質土器・青磁・焼締陶器・施釉陶器が出土している。

63は施釉陶器の黄瀬戸の皿である。内外面に黄瀬戸釉と胆礬が施される。

出土した遺物の時期は、16世紀後葉(京都X期新～XI期古)である。

#### 土坑 2031 (第27図、図版二二)

土師器・須恵器・瓦質土器・白磁・金属製品が出土している。

64～66は土師器の皿である。64はコースター形である。65は赤色系で、口縁部に強いヨコナデを施している。66は白色系で、体部は内湾形状で口縁端部を上方へつまみ上げている。

出土した遺物の時期は、11世紀末～13世紀後葉(京都V期～VI期)である。

#### 土坑 2054 (第27図、図版二二)

土師器・須恵器・山茶碗・白磁・青磁・焼締陶器・金属製品(鉄釘)が出土している。

67は土師器の皿で、赤色系で口縁端部は丸みがある。68は須恵器の甕である。口縁部から頸部にかけて丁寧にヨコナデを施している。69は白磁の皿である。底部は無軸で削出し高台である。70は山茶碗の碗である。南部系の12世紀中葉(尾張型第4型式期)のものと考えられる。71は石鍋である。外面には縦方向のミガキが施される。石材は和歌山産出と思われる緑泥岩・結晶片岩である。外側面に面取りのケズリがあり、破片を温石などに再利用した可能性がある。

出土した遺物の時期は、12世紀中葉～12世紀末(京都V期～VI期古)である。

#### 土坑 2063 (第27図、図版二三)

土師器・瓦質土器・白磁・瓦が出土している。

72・73は土師器の皿である。72は赤色系で、外面底部に板状圧痕がみられる。73は白色系で、外面体部にユビオサエが施される。74は瓦質土器の鍋である。体部は垂直に立ち上がり、口縁部は受け口状を呈する。内面体部にヨコハケが施される。

出土した遺物の時期は、11世紀末～13世紀後葉(京都V期～VII期古)である。

#### 土坑 2068 (第27図、図版二三)

土師器・瓦質土器・白磁・陶器が出土している。

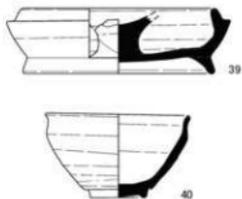
75は土師器の皿である、赤色系で、口縁端部は三角形を呈する。

出土した遺物の時期は、13世紀中頃～14世紀中頃(京都V新～VII期)である。

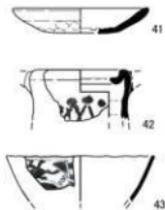
#### 土坑 2071 (第27図、図版二三)

土師器・瓦質土器・白磁・青磁・焼締陶器・施釉陶器・瓦・石器が出土している。

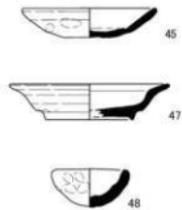
土坑 2006



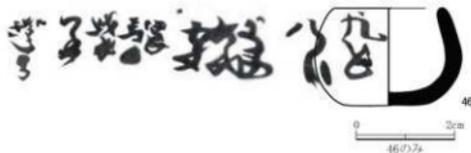
溝 2009



溝 2011



土坑 2010



土坑 2014



第 26 図 第 2 遺構面出土遺物実測図 I (縮尺 1/1・1/4)

76は石器の横形石匙である。石材は京都産出の赤色チャートである。縄文時代のもと考えられる。混入品であろう。

出土した遺物の時期は、12世紀末～13世紀中葉（京都VI期～VII期）である。

#### 土坑 2076（第28図、図版二三）

土師器・須恵器・緑釉陶器・白色土器・瓦質土器・白磁・青磁・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦である。

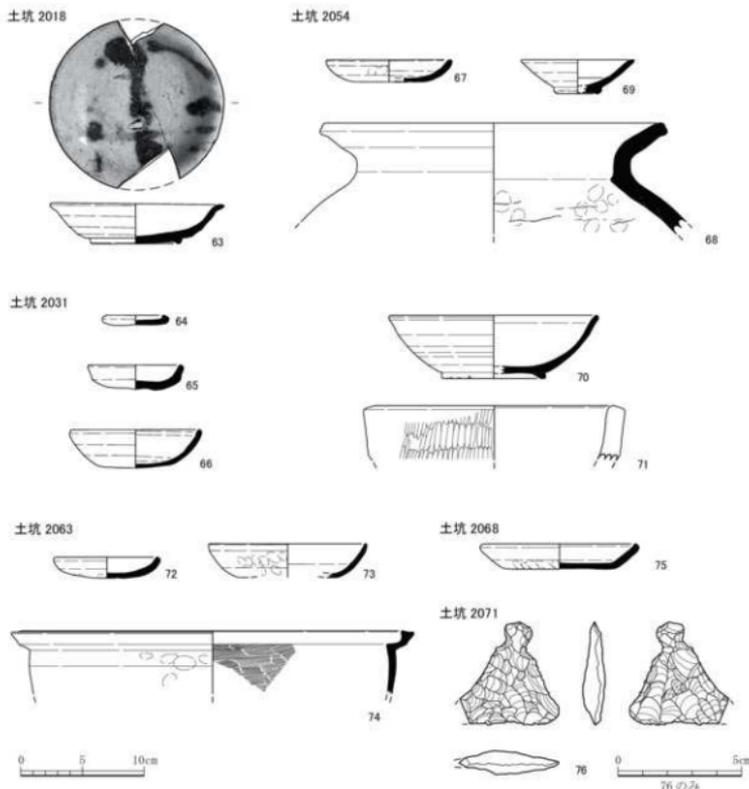
77～79は土師器である。77・78は皿で、内面に浅い凹線状図線がみられる。77は口縁端部に煤が付着しており灯明皿である。79は焙烙鍋で、口縁端部は上方に摘み上げて三角形を呈する。内外面に煤が付着している。80は緑釉陶器の碗である。高台は畳付がやや外反する輪高台であり、内外面に緑釉が施されるが、被熱または風化で剥離が進んでいる。10～11世紀のもので考えられる。81・82は瓦質土器の瓦灯である。中央部に請け皿を持つ皿で、内傾した請け部が短く立ち上がり傘と組み合う。82は背面の口縁部に防風の覆いが付着している。83～88は施釉陶器である。83は皿で、内外面に透明度の高い灰釉が施され、畳付は露胎である。84は瀬戸美濃の天目茶碗である。体部は直線的に開き、口縁部は直立して端部は外反する。高台の削り込みは浅い。16世紀末（大窯第4段階）のもので考えられる。85は志野の筒型茶碗である。底部は基筋底で、内外面に貫入のある長石釉が施される。86は瀬戸美濃の耳付水注で、錆釉に褐釉が上掛けされている。87は京焼系の香茶碗で、外面上半部にカキ目、内外面に灰釉が施される。88は唐津の向付で、方形の外面体部四方には椀垣文、東屋文、草花文、竹文、見込みには飛雁文が描かれた絵唐津である。古唐津で1600～1620年代のもので考えられる。89・90は砥石である。89は小口に研磨溝が1条みられる。仕上砥石で、石材は珪質頁岩（鳴滝砥石）である。90は小口も含めて5面使用されている。仕上砥石で、石材は珪藻土で焼物の可能性がある。

出土した遺物の時期は、16世紀中葉～17世紀前葉（京都X期中～XI期中）である。

#### 土坑 2078（第28図、図版二四）

土師器・瓦質土器・灰釉陶器・白磁・青磁・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦・土製品（土鈴）・金属製品（鉄釘・銅銭）が出土している。

91～94は土師器である。91～93は皿で、91は赤色系の小型、92・93は外面体部下半にユビオサエ、内面に浅い凹線状図線がみられる大型である。92は内面に全面朱塗が施される。成分分析の結果、ベンガラである。どちらも口縁端部に煤が付着しており灯明皿である。94は焙烙鍋で、玉縁状口縁で浅型である。外面は右方向のヘラケズリ、内面は不定方向の板ナゲが施される。内面には煤が付着している。95は瓦質土器の瓦灯である。上部に請け皿を持つ傘で、正面に方形の灯り窓、背面に逆三角切り込み状の煙出し孔が推定できる。96は焼締陶器の瓶で、外面底部に「十」とヘラ描きされる。97・98は施釉陶器である。97は唐津の折縁皿で、見込みに胎土目跡が残る。灰釉が潰け掛けされる。古唐津で17世紀前葉のもので考えられる。98は瀬戸美濃の天目茶碗で、体部は直線的に開き口縁部は直立し端部は外反する。16世紀末（大窯第4段階後半期）のもので考えられる。99は磁器の皿で、内面見込みに青花鹿文、削出し高台の畳付に窯砂が付着する。景德鎮産で16世紀末のもので考えられる。



第27図 第2遺構面出土遺物実測図2 (縮尺1/2・1/4)

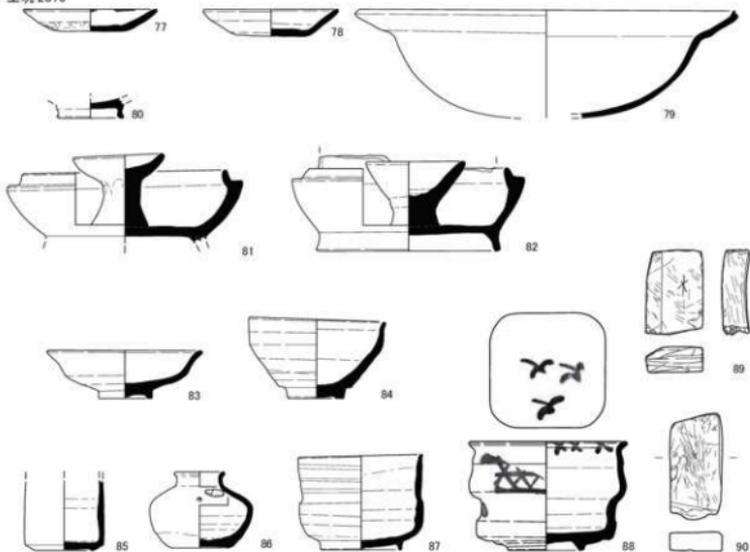
出土した遺物の時期は、16世紀中葉～17世紀前葉(京都X期中～XI期中)である。

#### 遺構外遺物 (第28図、図版二四)

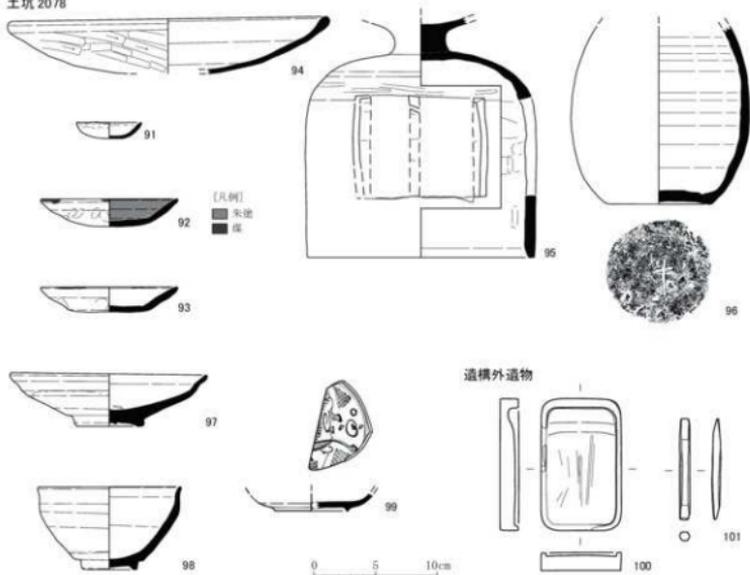
100は石製品の硯である。四隅は丸く面取りされている。陸に使用による擦痕と墨が付着する。石材は泥質岩が熱変成を受けたホルンフェルスである。101は石製品の角筆と思われる。角筆は、墨を用いず紙に筆先を押し付けて書き込む筆記具で、文字や図画の下描きなどに使われていた。両端部は楔状に尖らせており、一端部は使用のため摩滅している。石材はわずかに雲母が混じるホルンフェルスである。

100・101はB2グリッドの黒褐色粘質土層から出土している。

土坑 2076



土坑 2078



第28图 第2遺構面出土遺物実測図3 (縮尺1/4)

#### 第4節 第3遺構面出土遺物

##### 土坑3007 (第29図、図版二四)

土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦質土器・施釉陶器・瓦が出土している。

102は平瓦で、凹面にコビキ痕が残り、側端部は面取り調整がされている。103は丸瓦で、102に組み合うものであろう。

出土した遺物の時期は、14世紀後半～15世紀前葉および16世紀(京都Ⅷ期およびX期)である。

##### 土坑3015 (第29図、図版二四)

土師器・須恵器・瓦質土器・青磁・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦・金属製品・その他(骨)が出土している。

104・105は土師器である。104は赤色系の皿で、口縁端部に煤が付着している。105は鍋で、口縁は外反し端部は内側に尖らせている。106は焼締陶器である。信楽の挿鉢で、挿り目は摩滅をしており4～5条1単位である。15世紀後半～16世紀中葉のものと考えられる。107～は施釉陶器である。107は志野の小皿で、全面に長石釉が施される。外面底部は削出し高台で、口縁端部は外反する。16世紀後葉(大窩第3段階後半期)のものと考えられる。108は唐津の小坏で、内外面に灰釉が掛けられており、内面にトチン痕、外面底部に回転糸切り痕が残る粗雑なつくりである。109は輸入陶器の天目茶碗で、体部は丸みを帯びた形状であり、削出し高台は削り込みが浅い。施された柿釉は厚い。中国福建省産で13世紀～14世紀のものと考えられる。110は伊万里の磁器の皿である。見込みと外面体部および高台内に染付が描かれる。全体に被熱している。17世紀末～18世紀初頭のものと考えられる。111は丸瓦である。凸面にヘラ状工具による陰刻が認められる。

出土した遺物の時期は、16世紀中葉～17世紀前葉(京都X期～XI期)である。

##### 土坑3016 (第29図、図版二四)

土師器・灰釉陶器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦が出土している。

112は灰釉陶器の碗である。口縁端部は外反し、内面には使用痕が認められ赤彩が付着している。

出土した遺物の時期は、16世紀末～17世紀中頃(京都XI期)である。

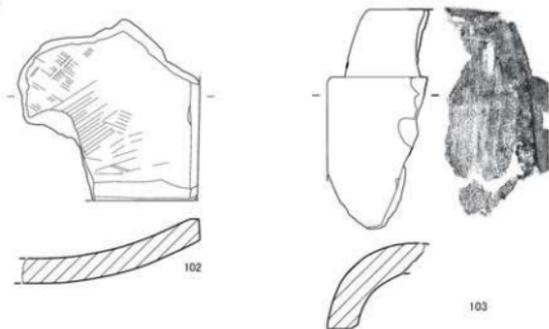
##### 土坑3025 (第29図、図版二四・二五)

土師器・須恵器・瓦質土器・白磁・青磁・焼締陶器・施釉陶器・瓦が出土している。

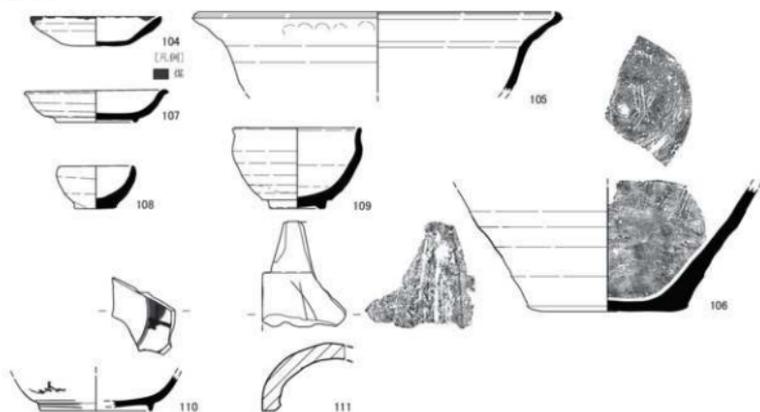
113は瓦質土器の皿で、底部と体部の境界は強く屈曲し口縁部は外反する。114～118は土師器の皿である。114は口縁を内側へ折り返すコースター形である。115・116は赤色系である。115は口縁部のヨコナデが強く、端部は上方へ摘まみ上げて断面は三角形である。116は体部下半が外面のオサエにより内側へ窪む。117・118は白色系で、117はヘソ皿である。118は薄手の椀形で、口縁部に一段の強いヨコナデが施される。119は青磁の碗である。外面に鎮連弁文、軸は酸化炭焼成で黄褐色を呈するもので、高台内は回転ヘラケズリで釉刺ぎされている。龍泉窯産で13世紀前半のものと考えられる。他に菊花文の暗文がみられる瓦器碗がある。

出土した遺物の時期は、12世紀末～14世紀後半(京都Ⅵ期～Ⅶ期)である。

土坑 3007



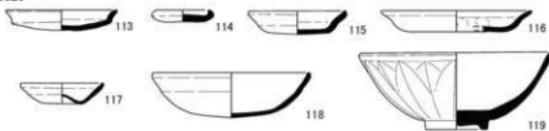
土坑 3015



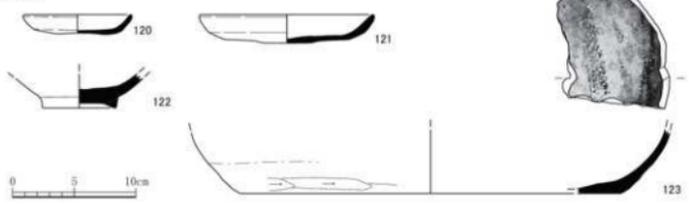
土坑 3016



土坑 3025



土坑 3043



第 29 图 第 3 遺構面出土遺物実測図 1 (縮尺 1/4)

#### 土坑 3043 (第 29 図、図版二五)

土師器・須恵器・白磁・焼締陶器・施釉陶器が出土している。

120・121は土師器の皿である。赤色系で、120は小型、121は大型である。122は山茶碗の碗である。南部系の12世紀後葉～13世紀初頭(尾張型第5型式期)のものと考えられる。123は施釉陶器の盤である。黄釉褐彩で内面に鉄絵花文が描かれる。中国磁灶窯産で12世紀～13世紀のものと考えられる。

出土した遺物の時期は、12世紀末～13世紀中葉(京都VI期)である。

#### 土坑 3062 (第 30 図、図版二五)

土師器・須恵器・緑釉陶器・白磁・施釉陶器・瓦・石製品(砥石)が出土している。

124～128は土師器の皿である。124は口縁を内側へ折り返すコースター形である。125～127は赤色系で、125・126は小型、127は体部下半が外面のオサエにより内側へ窪む。128は白色系の坏形である。129は緑釉陶器の碗である。有段輪高台で、近江産で10世紀後半のものと考えられる。130は施釉陶器の壺か瓶である。体部内面には胴雜ぎの跡が認められる。中国南部地方産と考えられる。131は軒平瓦で、瓦当文様は唐草文である。

出土した遺物の時期は、12世紀前葉～13世紀前葉(京都V期中～VI期中)である。

#### 土坑 3070 (第 30 図、図版二五)

土師器・須恵器・白磁・緑釉陶器・焼締陶器・施釉陶器・磁器が出土している。132は土師器の皿である。赤色系で、内面底部と体部の境界は浅く窪む。133は焼締陶器である。信樂の播鉢で、播り目は著しく摩滅する6条1単位である。16世紀後半のものと考えられる。

出土した遺物の時期は、16世紀初頭～17世紀中頃(京都X期～XI期)である。

#### 土坑 3080 (第 30 図、図版二五)

土師器・緑釉陶器・黒色土器・瓦質土器・山茶碗・白磁・焼締陶器・瓦が出土している。

134・135白色系の土師器の皿である。134はへソ皿で、底部中央を明瞭に押し上げる。135は碗形である。136は山茶碗の碗である。南部系の13世紀前葉～中葉(尾張型第6～7型式)のものと考えられる。137は平瓦である。凹面に縦方向のナデ調整がされている。

出土した遺物の時期は、13世紀後葉～15世紀前葉(京都VII期～VIII期)である。

#### 土坑 3089 (第 30 図、図版二五)

土師器・須恵器・瓦質土器・焼締土器・施釉陶器・瓦が出土している。

138は土師器の皿である。赤色系で、外面体部下半にはユビオサエ、内面に凹線状図縁がみられる。口縁端部には煤が付着している。139・140は施釉陶器である。139は志野の皿で、全面に長石釉が施される。16世紀後半(大窯第3段階後半期)のものと考えられる。140は瀬戸美濃の天目茶碗で、削出し高台の幅は広く、外面体部下半の回転ヘラケズリは明瞭で上半部との境に段ができ、口縁端部は強く外反する。柿釉に黒褐釉を流し掛けしている。17世紀前葉(大窯第5段階)のものと考えられる。141は石製品の角筆と思われる。両端部は楔状に尖らせており、一端は使用のためやや摩滅している。石材はわずかに雲母が混じるホルンフェルスである。

出土した遺物の時期は、16世紀初頭～17世紀中頃(京都X期～XI期)である。

#### 土坑 3094 (第 30 図、図版二五)

土師器・須恵器・瓦質土器・白磁・青磁・施釉陶器・金属製品(刀子)が出土している。

142～147は土師器である。142～144は赤色系の皿で、142はヘソ皿、底部中央の押し上げは弱い。143は内面の底部と体部の境界が強く屈曲し浅く窪む。144は坏形で、外反する口縁部から端部を若干上方へ向けて収めている。外面底部には板状圧痕がみられる。145～147は白色系の皿で、145はヘソ皿、146・147は小型である。148は瓦質土器の碗で、外面体部下半はヘラケズリ、体部上半から内面はヨコナデが施される。149は須恵器の鉢で、口縁端部は平坦な面をつくり内側に折り返す。内面には使用痕が認められる。

出土した遺物の時期は、13世紀後葉～14世紀末(京都Ⅶ期～Ⅷ期中)である。

#### 土坑 3095 (第 30 図、図版二六)

土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦質土器・白磁・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦・その他(骨)が出土している。

150・151は土師器の皿である。赤色系で、150は外面はオサエ、内面は一定方向のナデで仕上げられる。口縁部には煤が付着している。151は内面に浅い凹線状圈線がみられる。口縁部には煤が付着している。152・153は施釉陶器である。152は輸入陶器の天目茶碗で、体部は丸みを帯びた形状であり、削出し高台は小振りで畳付けは摩滅している。施された黒釉は禾目状を呈し厚い。中国福建省産である。13世紀～14世紀のものと考えられる。153は唐津の大皿で、内外面に灰釉が施される。古唐津で17世紀前葉のものと考えられる。

出土した遺物の時期は、16世紀初頭～17世紀中頃(京都Ⅹ期～Ⅺ期)である。

#### 土坑 3096 (第 30 図、図版二六)

土師器・須恵器・白磁が出土している。

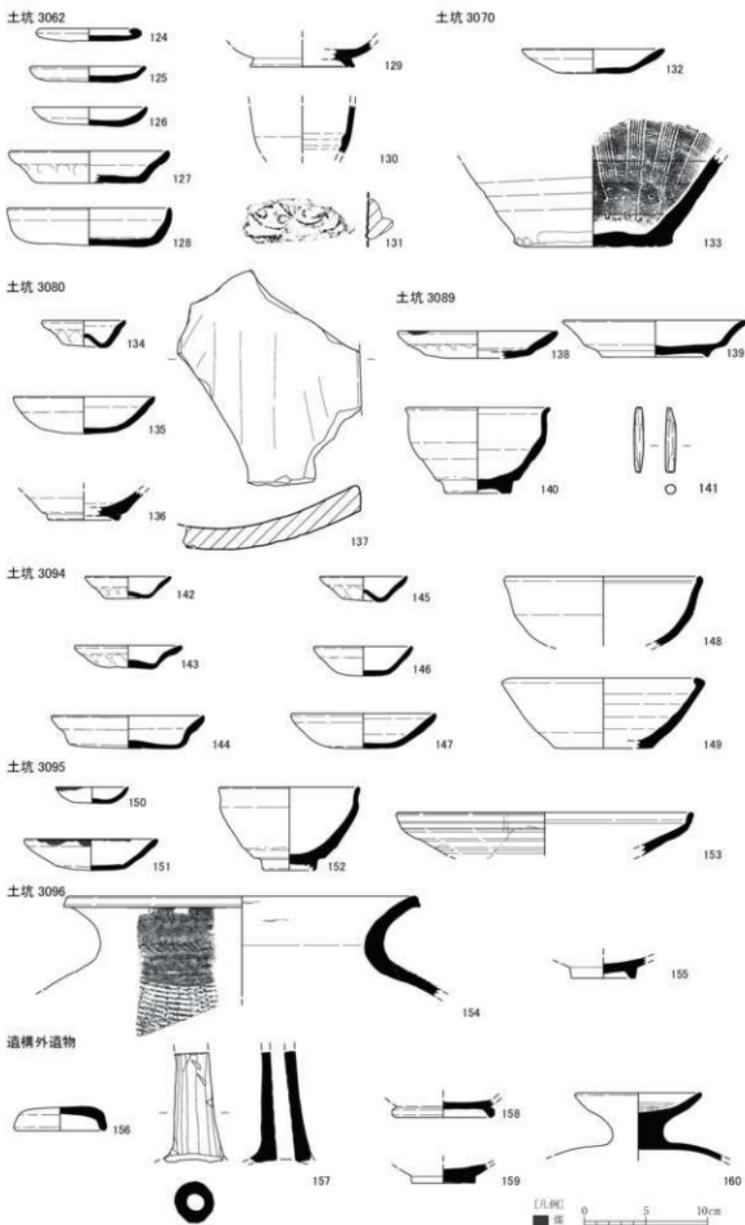
154は須恵器の甕である。外面体部には単位の短い平行タタキ、頸部にはタタキ後ヨコナデが施される。155は白磁の碗である。高台は削出しである。

出土した遺物の時期は、9世紀～12世紀(京都Ⅱ期～Ⅴ期)である。

#### 遺構外遺物 (第 30 図、図版二六)

156は土師器の蓋である。焼き塩壺に組み合わせるものである。157は白色土器の高坏である。脚部には縦方向のケズリによる面取りで14面を持つ。158は灰釉陶器の碗である。厚みのある三日月高台で、10世紀前半(0-53号窯式期)のものと考えられる。159は緑釉陶器の碗である。外面底部には回転糸切り痕が残る削出しの円盤状高台である。釉は風化により剥離している。160は瓦質土器の瓦灯である。上部に請け皿を持つ傘で、請け皿の内面にはヘラミガキが密に施される。傘の内面には煤が付着している。

157～159はA3グリッド、156・160はB4グリッドの整地層から出土している。



第 30 图 第 3 遺構面出土遺物実測図 2 (縮尺 1/4)

## 第5節 第4遺構面出土遺物

### 土坑 4007 (第31図、図版二六)

土師器・須恵器・瓦質土器・白磁・青磁・焼締陶器・施釉陶器・瓦・金属製品(鉄釘)が出土している。

161～164土師器の皿である。161・162は赤色系で、161は内面底部がやや盛り上がる小型、162は反外する口縁部から端部を上方へ向けて収めている。163・164は白色系で、163はヘソ皿で、底部中央の押し上げは弱く、口縁端部を丸く収めている。164は碗形で体部から口縁部にかけて丸みを帯びて立ち上がる。165は施釉陶器である。古瀬戸の輪花皿で、輪花は八方向で、外面底部に回転糸切り痕が残る。内外面口縁部に灰釉が施される。

出土した遺物の時期は、14世紀中頃～15世紀前葉(京都Ⅷ期)である。

### 柱穴 4012 (第31図、図版二六)

土師器が出土している。

166は土師器の皿である。赤色系でコースター形である。

出土した遺物の時期は、11世紀前葉～12世紀末(京都Ⅴ期古～Ⅵ期古)である。

### 土坑 4017 (第31図、図版二六)

土師器・瓦質土器・焼締陶器・施釉陶器・白磁が出土している。

167は瓦質土器の釜で、体部から口縁部にかけて直立する。

出土した遺物の時期は、11世紀前葉～13世紀中葉(京都Ⅴ期古～Ⅵ期新)である。

### 土坑 4019 (第31図、図版二六)

土師器・焼締陶器・施釉陶器・土製品(埴場)が出土している。

168は施釉陶器である。黄瀬戸の小杯で、底部は削出し高台である。16世紀後葉(大窩第3段階後半期)のものと考えられる。

出土した遺物の時期は、16世紀中葉～後葉(京都Ⅹ期中～新)である。

### 土坑 4029 (第31図、図版二六)

土師器・瓦が出土している。

169～171は土師器の皿である。169は赤色系で、体部下半が外面のオサエにより内側へ窪む。170・171は白色系で、170はヘソ皿である。171は碗形で器厚は全体に薄手である。172は軒瓦である。瓦当文様は側面蓮華文で、外区には18個の連珠文が配されている。

出土した遺物の時期は、13世紀前葉～15世紀前葉(京都Ⅶ期中～Ⅷ期新)である。

### 土坑 4030 (第31図、図版二六)

土師器・灰釉陶器・瓦質土器が出土している。

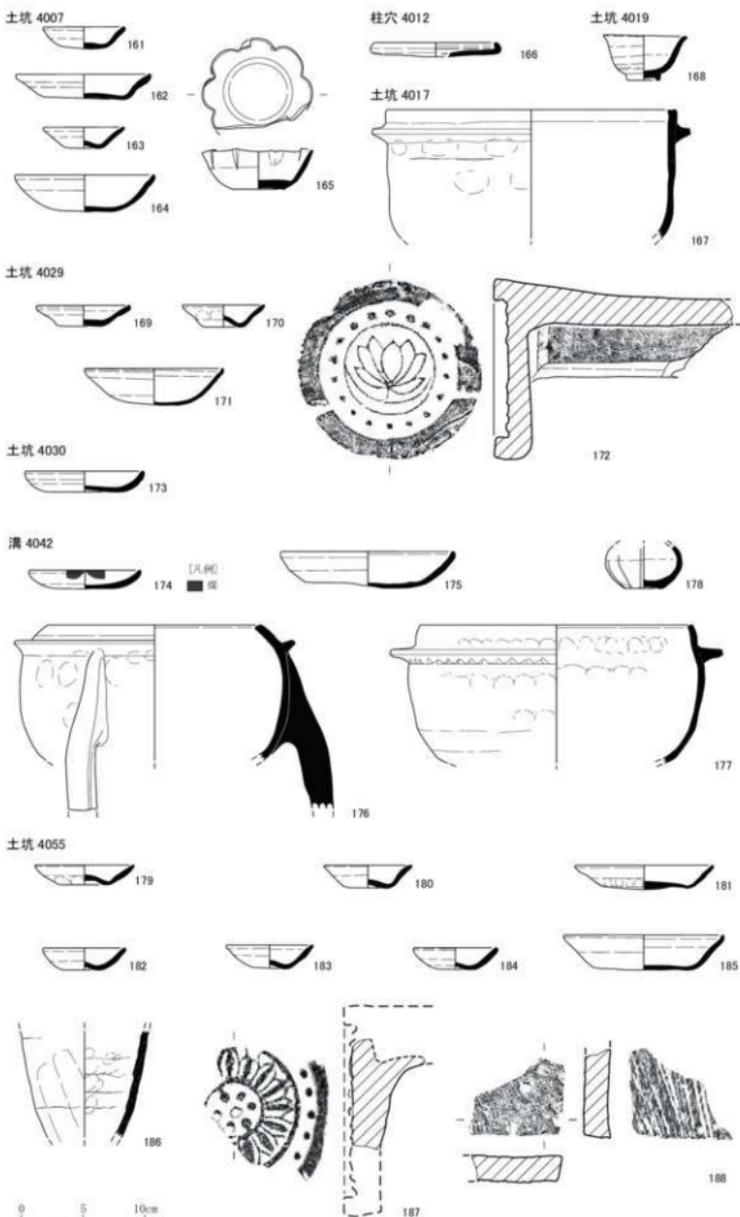
173は土師器の皿である。赤色系で小型である。

出土した遺物の時期は、11世紀末～12世紀前葉(京都Ⅴ期古～Ⅵ期中)と考えられる。

### 溝 4042 (第31図、図版二六)

土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦質土器・白磁が出土している。

174・175は赤色系の土師器の皿である。174は小型である。175は大型で胎土には1～2mm大



第 31 图 第 4 遺構面出土遺物実測図 (縮尺 1/4)

の金雲母や砂粒を含む。176・177は瓦質土器の釜で、体部から口縁部にかけて内傾する。176は三足付羽釜である。178は施釉陶器の小瓶である。外面体部には縦方向に推定12条の沈線、内外面に灰釉が施される。

出土した遺物の時期は、12世紀前葉～13世紀前葉（京都Ⅴ期中～Ⅵ期中）である。

#### 土坑 4055（第31図、図版二七）

土師器・須恵器・瓦質土器・白磁・青磁・焼締陶器・施釉陶器・瓦が出土している。

179～186は土師器である。179～181は赤色系の皿で、179・180はヘソ皿である。181の外底部には板状圧痕がみられる。底部中央を押し上げている。182～185は白色系の皿で、182・184はヘソ皿で、底部中央の押し上げは弱い。185の体部は開きぎみで口縁端部を上方へつまみ上げている。186は壺類である。体部内外面にはユビオサエと輪積み痕が明瞭に残る。187・188は瓦である。187は軒丸瓦で、瓦当文様は単弁蓮華文であり、中房には1+6個の蓮子が配されている。188は平瓦である。凹面に布目痕、凸面に縄目痕が残る。

出土した遺物の時期は、13世紀後葉～15世紀前半（京都Ⅶ期中～Ⅷ期中）である。

### 第6節 第5遺構面出土遺物

#### 土坑 5004（第32図、図版二七）

土師器・須恵器・白磁・陶器・金属製品（鉄釘）が出土している。

189～194は土師器の皿である。189～192は赤色系で、189・190は小型である。191・192は大型で、外反する口縁部から端部を若干上方へ向けて収めている。191は口縁部に煤が付着しており灯明皿である。193・194は白色系で、193はヘソ皿、194は碗形である。195は陶器の小皿である。薄手で外面底部は糸切り痕が残る。内面に赤色顔料が付着している。成分分析の結果、辰砂（水銀朱）である。朱墨の溶き皿として用いられたと考えられる（註2）。

出土した遺物の時期は、14世紀中葉～15世紀初頭（京都Ⅶ期新～Ⅷ期中）である。

#### 土坑 5005（第32図、図版二七）

土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦質土器・青磁・施釉陶器・瓦・石製品（砥石）・金属製品（鉄釘）が出土している。

196～199は土師器の皿である。196・197は赤色系で、196は小型で、体部下半が外面のオサエにより内側へ窪む。197は大型で、外反する口縁部から端部を若干上方へ向けて収めている。外面底部に板状圧痕がみられる。198・199は白色系で、198はヘソ皿、199は碗形である。

出土した遺物の時期は、14世紀中葉～15世紀初頭（京都Ⅶ期新～Ⅷ期中）と考えられる。

#### 土坑 5014（第32図、図版二七）

土師器・金属製品（鉄釘）が出土している。

200～202は赤色系の土師器の皿である。200は小型で、外面底部に板状圧痕がみられる。201・202は大型で、口縁端部は内傾し三角形を呈する。

出土した遺物の時期は、13世紀初頭～中葉（京都Ⅵ期中～新）である。

**土坑 5020** (第 32 図、図版二七)

土師器・須恵器・青磁が出土している。

203～205は土師器の皿である。203・204は「て」字状口縁の皿である。205は赤色系で、2段回みナデが施され口縁端部はやや外反する。

出土した遺物の時期は、11世紀中葉～12世紀前半(京都IV中～V期中)である。

**土坑 5024** (第 32 図、図版二七)

土師器・須恵器・白磁・焼締陶器・施釉陶器が出土している。

206は須恵器の甕である。口縁は強く外反し、端部は面をつくる。他に「て」字状口縁の土師器の皿がある。

出土した遺物の時期は、11世紀～12世紀および16世紀後半(京都IV期～V期およびX期中～新)である。

**池 5026** (第 32 図、図版二七)

土師器・施釉陶器が出土している。

207は古式土師器の壺である。口縁は強く外反し、口縁端部から頸部にかけてヘラナデが施される。208は施釉陶器の壺か瓶である。内外面体部と底部に黒釉が施される。中国磁州窯産の11世紀以降、特に14世紀～16世紀のものかと思われる。

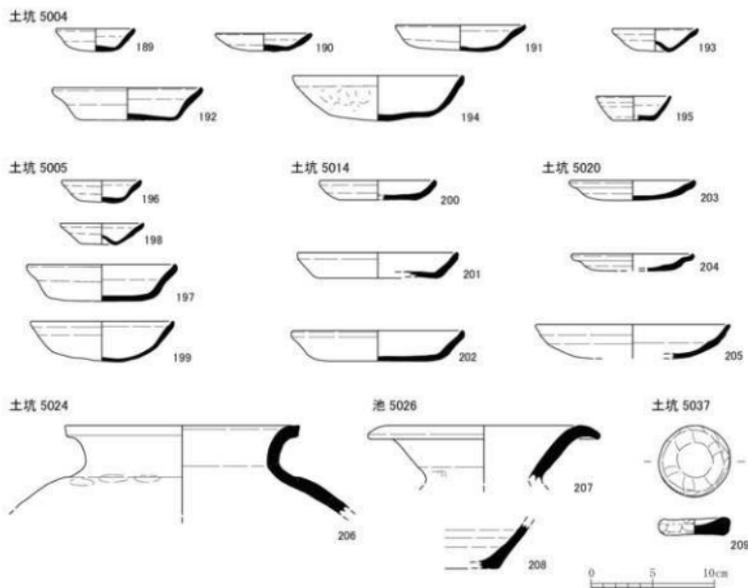
出土した遺物の時期は、11世紀中葉または14世紀～16世紀(京都IV期またはVII期中～XI期古)である。

**土坑 5037** (第 32 図、図版二七)

土製品が出土している。

209は土製品の加工円盤である。土器の甕か壺の底部を、再加工による面取り整形で円盤状に仕上げている。胎土は密で黒粒角閃石が含まれている。弥生時代後期中河内の土器と考えられる。

出土した遺物の時期は、弥生時代後期以降である。



第32図 第5遺構面出土遺物実測図(縮尺1/4)

## 註

- (1) 尾藤德行 2005『平安京左京六条三坊五町跡』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- (2) 埴塙・取鍋と赤色顔料の成分分析は、エネルギー分散蛍光X線分析法による定性分析および簡易定量を行った。装置は自社所有のハンドヘルド蛍光X線分析装置VANTA(オリンパス製)を用いた。X線管球はロジウム(Rh)ターゲットで、検出元素はマグネシウム(Mg)からウラン(U)までである。埴塙・取鍋の付着物として銅(Cu)とスズ(Sn)を含有する試料は青銅、銅と亜鉛(Zn)を含有する試料は真鍮と判断した。銅を主として鉛(Pb)やその他の元素を含有する試料は銅合金と表記した。また、赤色顔料のうち、水銀(Hg)と硫黄(S)が検出された試料は辰砂(水銀朱)、鉄(Fe)が多量に検出された試料はベンガラと判断した。

## 第5章 科学分析

### 第1節 平安京左京三条四坊十五町跡のプラント・オパール分析

森 将志 (株式会社パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

平安京左京三条四坊十五町跡では、室町時代～安土桃山時代の遺構と考えられている土坑が検出されている。この土坑では、最下部に黒色の灰が堆積していた。以下では、土坑から採取された灰について行ったプラント・オパール分析の結果を示し、考察を行った。

#### 2. 分析試料および方法

分析試料は、室町時代～安土桃山時代の遺構と考えられている土坑 2020 から採取された黒色 (7.5YR1.7/1) 灰 1点である。この試料について、以下の手順で分析を行った。

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する (絶対乾燥重量測定)。別に試料約 1g (秤量) をトルビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ (直径約 0.04mm) を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20 ～ 30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、植物珪酸体由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが 300 個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、第 34 図に載せた。

#### 3. 結果と考察

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1g 当りの各プラント・オパール個数を求め (第 5 表)、分布図に示した (第 33 図)。以下に示すプラント・オパール個数は、試料 1g 当りの検出個数である。

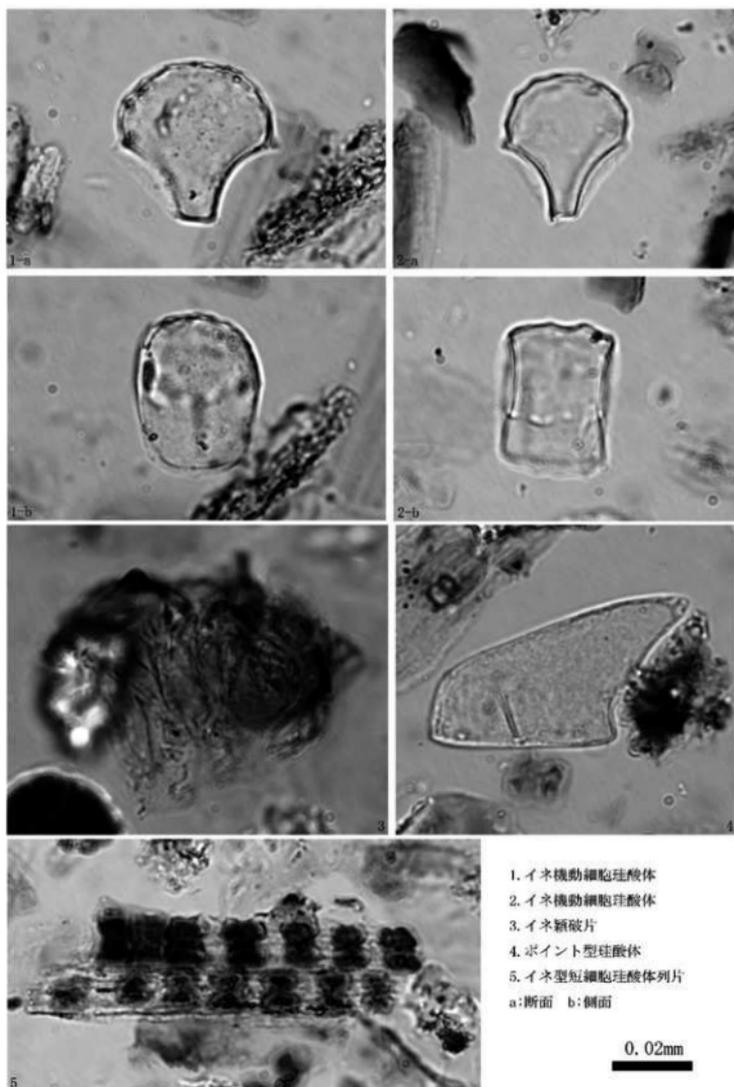
検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とイネ穎破片、ポイント型珪酸体、イネ型短細胞珪酸体列片が確認できた。なかでもイネ機動細胞珪酸体が多く含まれており、1,586,300 個検出された。この機動細胞は葉の表側表皮にある細胞である。他の分類群の機動細胞珪酸体は検出されておらず、イネ機動細胞珪酸体のみが大量に検出されたため、灰はイネの葉身が燃えたものであり、イネの葉身を燃やした灰が土坑 2020 の底に敷かれていたか廃棄された可能性や、土坑 2020 の底に敷かれたか廃棄されたイネの葉身を含む藁が何らかの理由で燃えた可能性などが推測される。

第5表 試料1g当りのプラント・オパール個数

イネ (個/g)	イネ穎破片 (個/g)	ポイント型珪酸体 (個/g)	イネ型短細胞珪酸体 (個/g)
1,586,300	2,900	107,500	427,100



第33図 灰に含まれる植物珪酸体分布図



第 34 図 灰から検出された植物珪酸体

## 第2節 平安京左京三条四坊十五町跡の花粉分析

森 将志 (株式会社パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

平安京左京三条四坊十五町跡において古植生を検討するため、花粉分析用の試料が採取された。以下では、花粉分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。

### 2. 試料と方法

分析試料は、池 5026 から6点 (試料 No. B～G)、土坑 5038 から1点 (試料 No. H) 採取された計7点である (第6表)。池 5026 と土坑 5038 は、ともに平安時代中期の遺構と考えられており、試料の堆積順としては、下位から試料 H, B, G, F, E, D, C の順に重なる。なお、一部の試料 (試料 No. B, G) については珪藻分析も行われている。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

試料 (湿重量約2～4g) を遠沈管にとり、10% 木酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46% フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離 (比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離) を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理 (無水酢酸9:濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎) を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、十分な量の花粉が含まれていない試料についてはプレパラート1枚の全面を検鏡するに留めた。さらに、単体標本 (PLC. 2249～2256) を作製し、写真を第36図に載せた。

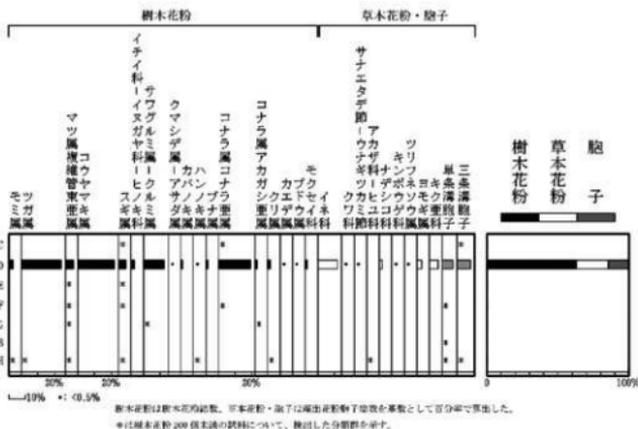
第6表 花粉分析試料一覧

試料名	遺構名	種類	調査区	層位	時期	土相	
						池以降の時期	
C	5026	池	調査区西壁	5面上整地①	平安時代中期	-	灰オリーブ色 (5Y 4/2) シルト
D				5面上整地②			オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) シルト
E				①			灰オリーブ色 (5Y 4/2) 細粒砂質シルト
F				②			灰オリーブ色 (5Y 4/2) シルト
G				④			灰オリーブ色 (5Y 4/2) 細粒砂質シルト
B	5038	土坑	調査区北壁	石敷下層②	池築造以前	灰オリーブ色 (5Y 4/2) 細粒砂質シルト	
H				調査区西壁		①	オリーブ黒色 (3Y 3/1) シルト

### 3. 結果

7試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉17、草本花粉9、形態分類のシダ植物胞子2の総計28である。これらの花粉・胞子の一覧表を第7表に、花粉分布図を第35図に示した。花粉分布図では、樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を、草本花粉・胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図表においてハイフン (-) で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。さらに、クワ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

今回の分析試料は花粉の保存状態が良好ではなく、十分な量の花粉が含まれていたのは試料 No. Dのみである。試料 No. D ではツガ属やコウヤマキ属、サワグルミ属 - クルミ属、コナラ属コナラ亜属などの産出が目立つ。



第 35 図 平安京左京三条四坊十五町跡における花粉分布図

第 7 表 産出花粉胞子一覽表

学名	和名	C	D	E	F	G	H
樹木							
<i>Abies</i>	モミ属	-	5	-	-	-	2
<i>Tsuga</i>	ツガ属	-	48	-	-	-	1
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	-	10	3	2	12	1
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	-	44	-	-	-	-
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	1	9	1	1	-	1
Taxaceae - Cephalotaxaceae - Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	4	-	-	-	-
<i>Pterocarya - Juglans</i>	サワグルミ属-クルミ属	-	25	-	-	1	-
<i>Quercus - Oakrya</i>	クマシデ属-アサダ属	-	1	-	-	-	-
<i>Betula</i>	カバノキ属	-	2	-	-	-	-
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	-	1	-	-	-	1
<i>Fagus</i>	ブナ属	-	2	-	-	-	-
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	1	39	-	1	-	-
<i>Quercus subgen. Cyclobalanus</i>	コナラ属アカシネ属	-	3	-	-	1	-
<i>Gastanoa</i>	クリ属	-	3	-	-	-	1
<i>Acer</i>	カエデ属	-	1	-	-	-	-
<i>Vitex</i>	ブドウ属	-	1	-	-	-	-
<i>Oleaceae</i>	モクセイ科	-	3	-	-	-	-
草本							
Gramineae	イネ科	-	38	-	-	-	-
Urticaceae	ウラボシ科	-	1	-	-	-	-
<i>Polygonum sect. Perricaria - Echinocaulon</i>	サナエタデ節-ウナギフカミ節	-	1	-	-	-	-
Chenopodiaceae - Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	-	-	-	-	-	1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	-	5	-	-	-	-
Ranunculaceae	キンギョウグサ科	-	1	-	-	-	-
<i>Impatiens</i>	フリフネソウ属	-	1	-	-	-	-
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	-	9	-	-	-	-
<i>Tubulliferae</i>	キク亜科	-	16	-	-	-	-
シダ植物							
monolete type spore	単条溝胞子	-	21	-	14	-	3
trilete type spore	三条溝胞子	1	25	-	-	-	1
Arboreal pollen	樹木花粉	2	201	4	4	14	-
Nonarboreal pollen	草本花粉	-	72	-	-	-	1
Spores	シダ植物胞子	1	46	-	14	-	3
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	3	319	4	18	14	3
unknown	不明	-	9	-	-	1	-

#### 4. 考察

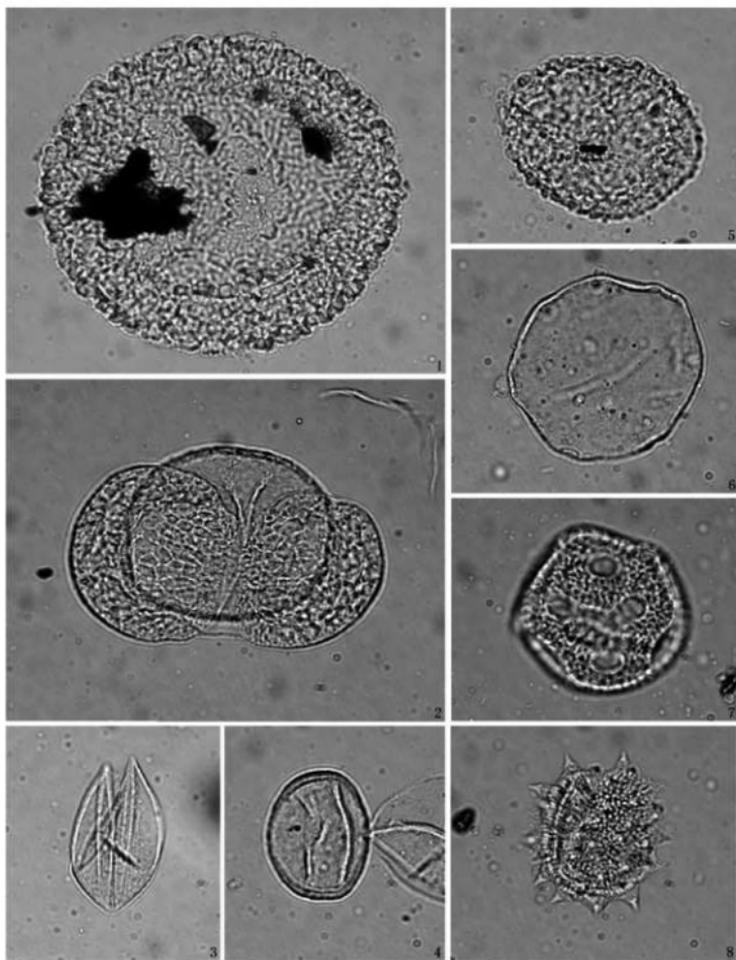
花粉は、一般的に湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境下で堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され、消失してしまう。そのため、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では花粉が残りにくい。試料 No. B, G の珪藻分析によると、十分な量の珪藻化石が得られておらず、絶えず水分を湛えた堆積環境ではなかったようである。よって、池 5026 や土坑 5038 は酸化的な堆積環境であったため、花粉が分解された可能性がある。こうしたなか、試料 No. D では十分な量の花粉が得られた。以下では、試料 No. D の花粉化石群集に基づいて遺跡周辺の古植生を検討した。

試料 No. D では、ツガ属やコウヤマキ属などの針葉樹や、サワグルミ属-クルミ属やコナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹の産出が目立ち、遺跡周辺ではこうした樹木が分布を広げていた可能性がある。ただし、これらの樹木が当時の植生の中で優占していたのかどうかは疑問が残る。例えば京都盆地では、遺跡発掘にもなつて実施された 1990～2009 年の花粉分析のデータが整理されており（佐々木ほか、2011）、平安時代の平安京城ではスギ属やイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、コナラ属アカガシ亜属、クリ属-シイ属などが主要な樹木花粉となっている。これらの分類群は、試料 No. D では産出率が低く、平安時代における京都盆地の一般的な傾向と試料 No. D とでは花粉組成が全く異なる。また、平安京右京三条三坊四町跡で行われた平安時代前半の堆積物の花粉分析の結果（バリノ・サーヴェイ株式会社、2012）では、モミ属やツガ属が優占する花粉化石群集が得られているが、風化により花粉組成が歪曲されている可能性が指摘されている。

本分析においても、分析試料は全体的に花粉化石の保存状態が非常に悪いため、風化により花粉組成が歪曲されている可能性は十分に考えられる。このように、試料 No. D の花粉化石群集が、当時の植生を反映していない可能性を示す状況がいくつか挙げられるが、産出した分類群が当時存在していたのは確かである。試料 No. D で産出が目立つ分類群の生態的特徴を考慮して分布域を推察すると、ツガ属やコウヤマキ属は遺跡周辺の丘陵地の岩石地に、サワグルミ属-クルミ属は沢沿いなど水分条件の良好な場所に、コナラ属コナラ亜属は丘陵地斜面などに生育していた可能性が考えられる。あるいは、人為的影響の可能性も考えられ、試料採取地点周辺にツガ属やコウヤマキ属、サワグルミ属-クルミ属、コナラ属コナラ亜属などが植栽されていた状況も推測できる。

#### 引用文献

- (1) バリノ・サーヴェイ株式会社 2012 「自然科学分析」『平安京右京三条三坊四町跡』 pp. 46-51、京都市埋蔵文化財研究所
- (2) 佐々木尚子・高原 光・湯本貴和 2011 「堆積物中の花粉組成からみた京都盆地周辺における「里山」林の成立過程」『地球環境』16号 pp. 115-127



- |                                |                            |
|--------------------------------|----------------------------|
| 1. ツガ属 (PLC. 2249)             | 2. マツ属複維管束型属 (PLC. 2250)   |
| 3. イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科 (PLC. 2251) | 4. コナラ属アカガシ亜属 (PLC. 2252)  |
| 5. コウヤマキ属 (PLC. 2253)          | 6. サワグルミ属-クルミ属 (PLC. 2254) |
| 7. ナデシコ科 (PLC. 2255)           | 8. キク亜科 (PLC. 2256)        |

第36図 平安京左京三条四坊十五町跡 池5026 試料 No. D から産出した花粉化石

### 第3節 堆積物中の珪藻化石群集

野口真利江 (株式会社パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

珪藻は、10～500  $\mu\text{m}$  ほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている (小杉, 1988; 安藤, 1990)。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境 (例えばコケの表面や湿った岩石の表面など) に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

ここでは、平安京左京三条四坊十五町跡において採取された土層堆積物試料中の珪藻化石群集を調べ、堆積環境について検討した。

#### 2. 試料と方法

第8表 珪藻化石分析試料一覧

分析No.	試料名	型	遺構名	種別	層位	時期		堆積物の特徴
						下敷下層②	池築造以前	
1	B	調査区北壁	5026	池	①	平安時代中期以前	池築造以前	灰オリーブ色 (5Y 4/2) 粗粒砂質シルト
2	G	調査区西壁				-	灰オリーブ色 (5Y 4/2) 細粒砂質シルト	

試料は、池 5026 から採取された2点の土層堆積物である (第8表)。試料は、調査区の北壁と西壁から採取された。池 5026 は、平安時代中期以前の遺構と考えられており、分析No. 1 (試料No. B) は池築造以前の堆積物と考えられている。

各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

(1) 湿潤重量約1.0gを取り出し、秤量した後ピーカーに移して30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を20回ほど繰り返した。(3) 懸濁液を遠心管に回収し、マイクロベットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作製した。

作製したプレパラートは顕微鏡下600～1000倍で観察し、プレパラートの2分の3以上の面積について同定・計数した。珪藻殻は、完形と非完形 (原則として半分程度残っている殻) に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。さらに、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物1g当たりの殻数を計算した。また、保存状態の良い珪藻化石を選び、写真を第38図に載せた。

#### 3. 珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉 (1988) および安藤 (1990) が設定し、千葉・澤井 (2014) により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、海水種は海水不定・不明種 (?) として、淡水種は広布種 (W) として、その他の種はまとめて不明

種(?)として扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明(?)として扱った。以下に、小杉(1988)が設定した海水～汽水域における環境指標種群と、安藤(1990)が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

[外洋指標種群(A)]: 塩分濃度が35‰以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

[内湾指標種群(B)]: 塩分濃度が26～35‰の内湾水中を浮遊生活する種群である。

[海水藻場指標種群(C1)]: 塩分濃度が12～35‰の水域の海藻や海草(アマモなど)に付着生活する種群である。

[海水砂質干潟指標種群(D1)]: 塩分濃度が26～35‰の水域の砂底(砂の表面や砂粒間)に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミナシ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。

[海水泥質干潟指標種群(E1)]: 塩分濃度が12～30‰の水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミナシ主体の貝類相やカナなどの甲殻類が見られる。

[上流性河川指標種群(J)]: 河川上流部の溪谷部に集中して出現する種群である。これらは、礫面全体で岩にびったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

[中～下流性河川指標種群(K)]: 河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

[最下流性河川指標種群(L)]: 最下流部の三角洲の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角洲地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

[湖沼浮遊生指標種群(M)]: 水深が約1.5m以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

[湖沼沼沢湿地指標種群(N)]: 湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

[沼沢湿地付着生指標種群(O)]: 水深1m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態が優勢な出現が見られる種群である。

[高層湿原指標種群(P)]: 尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原のように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

[陸域指標種群(Q)]: 上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である(陸生珪藻と呼ばれている)。

[陸生珪藻A群(Qa)]: 耐乾性の強い特定のグループである。

[陸生珪藻B群(Qb)]: A群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

#### 4. 結果

堆積物から検出された珪藻化石は、海水種が1分類群1属1種、淡水種が16分類群11属10種であった(第9表)。これらの珪藻化石は、海水域における1環境指標種群(C1)、淡水域における4環境指標種群(K、O、Qa、Qb)に分類された。珪藻化石群集の特徴から、堆積物2点はI帯とII帯に分類された(第37図)。

以下では、各珪藻分帯における珪藻化石の特徴とその堆積環境について述べる。

##### I帯(分析No. 1)

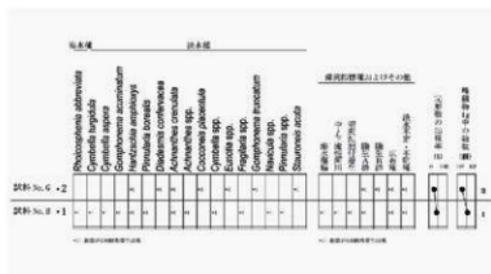
堆積物1g中の珪藻殻数は $1.4 \times 10^3$ 個、完形殻の出現率は45.0%である。海水種と淡水種が検出された。堆積物中の珪藻殻数は非常に少ない。環境指標種群では、海水種の海水藻場指標種群(C1)、淡水種の中～下流性河川指標種群(K)、沼沢湿地付着生指標種群(O)、陸生珪藻A群(Qa)、陸生珪藻B群(Qb)が検出された。

珪藻化石の産出数が非常に少ない点と、環境指標種群の特徴から、基本的にジメジメとした不安定な水域環境が考えられる。

##### II帯(分析No. 2)

堆積物1g中の珪藻殻数は $5.3 \times 10^2$ 個、完形殻の出現率は28.6%である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は非常に少ない。環境指標種群では陸生珪藻A群(Qa)のみが検出された。

珪藻化石の産出数が非常に少ない点と、環境指標種群の特徴から、基本的にジメジメとした陸域環境が考えられる。



第37図 堆積物中の珪藻化石分布図(主な分類群を表示)

第9表 堆積物中の珪藻化石産出表(種群は引用文献(2)による)

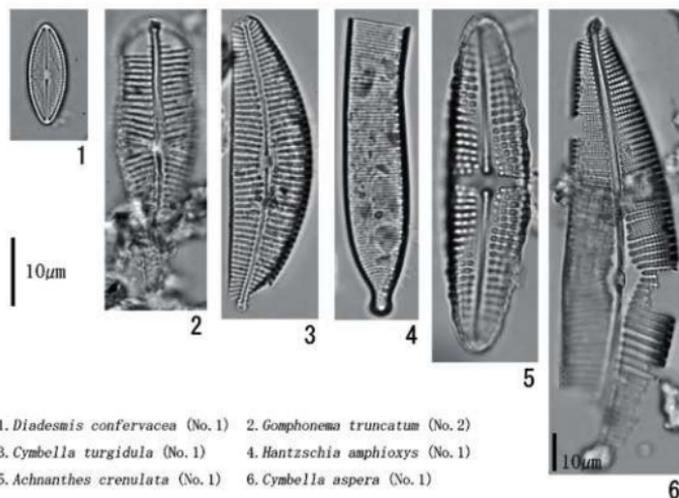
No.	分類群	種群	1	2
1	<i>Rhoicosphenia abbreviata</i>	C1	1	
2	<i>Achnanthes crenulata</i>	W	5	2
3	<i>A. spp.</i>	?	2	
4	<i>Cocconeis placentula</i>	W		1
5	<i>Cymbella aspera</i>	O	1	
6	<i>C. turgidula</i>	K	1	
7	<i>C. spp.</i>	?	1	
8	<i>Diadomesmia confervacea</i>	Qb	1	
9	<i>Eunotia spp.</i>	?		1
10	<i>Fragilaria spp.</i>	?	1	
11	<i>Gomphonema acuminatum</i>	O	1	
12	<i>G. truncatum</i>	W		1
13	<i>Hantzschia amphioxys</i>	Qa	3	1
14	<i>Navicula spp.</i>	?	1	
15	<i>Pinnularia borealis</i>	Qa	1	
16	<i>P. spp.</i>	?	1	
17	<i>Stauroneis acuta</i>	W		1
18	Unknown	?		
海水藻場			1	
中～下流性河川			K	1
沼沢湿地付着生			O	2
陸生A群			Qa	4
陸生B群			Qb	1
広布種			W	5
淡水不定・不明種			?	6
その他不明種			?	1
海水種			1	
淡水種			19	7
合計			20	7
完形殻の出現率(%)			45.0	28.6
堆積物1g中の殻数(個)			1.4E+03	5.3E+02

## 5. 考察

池 5026 の堆積物 2 点からは、珪藻化石がほとんど検出されなかった。池築造以前の堆積物（試料 No. B）は粗粒砂質シルトで、池の最下層の④層（試料 No. G）は細粒質シルトである。どちらも砂質シルト堆積物であるため、堆積速度が速かった可能性や、人為的影響を受けて堆積している可能性などが考えられる。池築造以前（試料 No. B）では、わずかだが河川指標種群や沼沢湿地指標種群が検出されているため、不安定な水域環境であった可能性がある。池築造直後（試料 No. G）は、築造以前よりも珪藻化石の検出数が少なく、環境指標種群では陸生珪藻のみの産出に留まっている点から、ジメジメとした陸域環境の堆積物で構成されていると推定される。よって、池築造初期の頃は水深があまり深くなかった可能性や、水深の変動が著しかった可能性、池の壁面や水路などからの土砂供給があった可能性などが考えられる。

## 引用文献

- (1) 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』第 42 号 pp. 73-88
- (2) 千葉 崇・澤井裕紀 2014 「環境指標種群の再検討と更新」『Diatom』第 30 巻 pp. 7-30
- (3) 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』第 27 号



第 38 図 堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真

#### 第4節 平安京左京三条四坊十五町跡の動物遺体

Battssengel Tsogzolmaa [バトツェンゲル ツォグゾルマー] (株式会社イビソク)

今回の調査では、江戸時代のゴミ穴と考えられる、いくつかの遺構などから動物遺体が出土した。本稿は、その中からウマ・ウシの骨を中心に抽出し、分析を行った内容である。

抽出した遺体は哺乳類16点あり、その内家畜が15点(ウシ6点、ウマ4点、ウマかウシ5点)、野生動物が1点である(図版二八)。

骨1(B3グリッド、第3遺構面上)は、ウシの左手骨近位端であり、横割り切断痕がみられる。骨2(土坑3093)は、ウシの頭骨の骨端部遠位端である。横割り切断する際に使用した道具の刃先痕が残っている。骨3(土坑1038)は、ウシの左手骨の骨端部遠位端である。横割り切断痕がみられる。骨4(土坑1038)は、ウシの中足骨の骨端部遠位端である。横割り切断痕がみられる。骨5(土坑1097)は、ウシの左手骨である。切断された痕跡はみえないが、破断箇所に直径0.3cmの小孔が残っており、ここで骨を叩き割ったものと考えられる。骨6(B2グリッド攪乱)は、ウシ中足骨の骨端部遠位端である。横割り切断痕がみられる。

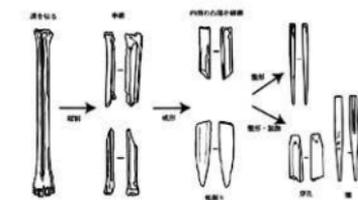
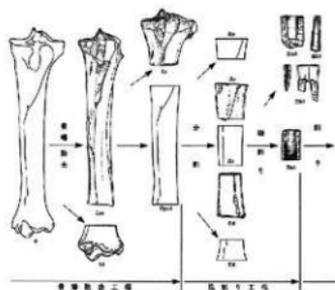
骨7(土坑2086)は、ウマの頭骨の骨端部遠位端である。横割り切断する際に使用した道具の刃先痕が残っている。骨8(土坑1038)は、ウマの頭骨の骨端部遠位端である。横割り切断痕がみられる。骨9(土坑3093)は、ウマの左手骨か中足骨の骨端部遠位端であり、横割り切断する際に使用した道具の刃先痕が残っている。骨10(B2グリッド攪乱)は、ウマの左手骨の骨端部で、長さは約17.4cmである。近位端に小孔が残っている。横割り切断痕がみられる。

骨11(土坑1097)は、ウシかウマの左手骨か中足骨の近位端であり、横割り切断痕がみられる。骨12(土坑3015)は、ウマかウシの中足骨か中足骨の骨端部近位端であり、縦割りと横割りの切断痕がみられる。骨13(土坑3015)は、ウマかウシの中足骨か左手骨の近位端である。縦割りと横割りの切断痕がみられる。骨14(B2グリッド攪乱)は、ウマかウシの中足骨か左手骨の骨幹部である。骨幹を分割して、粗材を整える前の状態だと考えられる。横割り切断痕がみられる。骨15(A3グリッドの攪乱)は、ウマかウシの長骨であり、半円形で縦3cm横3.5cmである。骨幹部で作った未成品の可能性があり、埋没していた近くに銅製品があったのか青緑色に変色している。

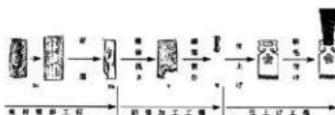
骨16(土坑1035)は髀と思われる。長さ11.7cm、直径0.4cmであり、鹿の角を加工している。

なお、ここでは、骨の長軸骨に対して直角に切断したものを「横割り切断」、長軸骨に平行するものを「縦割り切断」とした(第39・40図)。

以上の内、切断痕があるのは、ウマ・ウシの四肢骨であった。それらは、骨髓を取り出すための痕跡の可能性が考えられる。骨髓は煮沸してゼラチンを抽出し、ニカワなどに利用したのであろう。骨髓の取り出しは、鋸などの刃物で切断する方法が主である。骨5・10のように叩き割った骨も同じ目的であったのかもしれない。また、骨16のような骨製品の製作も行われていたようである。



第40図〔縦割り切断〕菱の製作工程（丸山2007）



第39図〔横割り切断〕菱の製作工程（西本他1999）

#### 参考文献

- (1) 西本豊弘・松井章 1999「家畜その2ーウマ・ウシ」『考古学と動物学ー考古学と自然科学ー②』 pp. 169-208、同成社
- (2) 丸山真史 2007「中世遺跡に見る「都市的な場」ー阪神間の遺跡における動物遺存体の研究ー」『動物考古学』第24号 pp. 65-75、動物考古学研究会

## 第6章 まとめ

今回の調査で得られた成果は、平安時代中期から江戸時代初期にかけての整地と遺構の変遷を確認することができたことである。合計400㎡程の調査区であったが、3つの調査区が散在したことで最大南北28m×東西27.5m四方の土層堆積と遺存状況を概ね把握することができた。ここでは、整地および遺構の分布、平安京に関連する遺構の圃池について（池5026、土坑5028、5038）、江戸時代の牛馬骨出土遺構についての詳細報告をもってまとめとする。

### 第1節 整地および遺構の分布

**整地について** 遺構を検出した生活面について、上面より時期を遡って考察する。

第1～3遺構面は室町時代前期から江戸時代初期にかけての整地層であり、場所によって土質は異なっている。厚さは0.1～0.2m程度の暗褐色または灰褐色の砂泥が主体である。突き固められた明確な硬化面は、現在の麩屋町通に近い1・3区の西側（A2・A3グリッド）の一部で認められた。2区北側（C3グリッド）での整地層の状況は、1・3区西側と似通っている。ただし標高は一致するものではなく、同時になされた整地であるとは判断できない。2区の整地層出土遺物は安土桃山時代から江戸時代前期にかけての陶磁器類が多く、1・3区にみられた整地層よりも新しい時代に複数回なされたものとみるべきである。逆に言えば、現在の往来に近い西側の整地が踏み固められ、かつ江戸時代以降も大きく壊されていないのは当然であろう。

第4遺構面は、平安時代後期に造成された、いわゆるウグイス色の整地層での検出となった。ただ、この色調的特徴がみられた層位は調査区の西側（A2・A3グリッド）の一部の範囲で、以東では灰褐色や暗褐色が強い砂泥による層位が主体であった。砂泥による整地は鎌倉時代に下るものと考えられる。もっとも、平安京城の広範に施されたウグイス色の整地層は積々厚さ50cm程のもので、場所によっては洪水堆積砂礫の地山上に建物が築かれていたと思われる。

第5遺構面は、沖積砂礫層で構成される地山での検出であったが、古墳時代以前の遺物はごくわずかに出土したものの、平安京造営以前の遺構は確認できなかった。何らかの遺構が確認できれば、縄文時代晩期から古墳時代の集落跡である烏丸御池遺跡の東限となる可能性も考えられたが、遺跡の範囲外であることを裏付けられた結果となった。

**遺構について** 遺構は重複関係や密度により必ずしも整地および周辺遺構の時期と同一とは限らない。したがって遺構毎の性格を分析した上で、一部の遺構は調査面を跨って説明する。

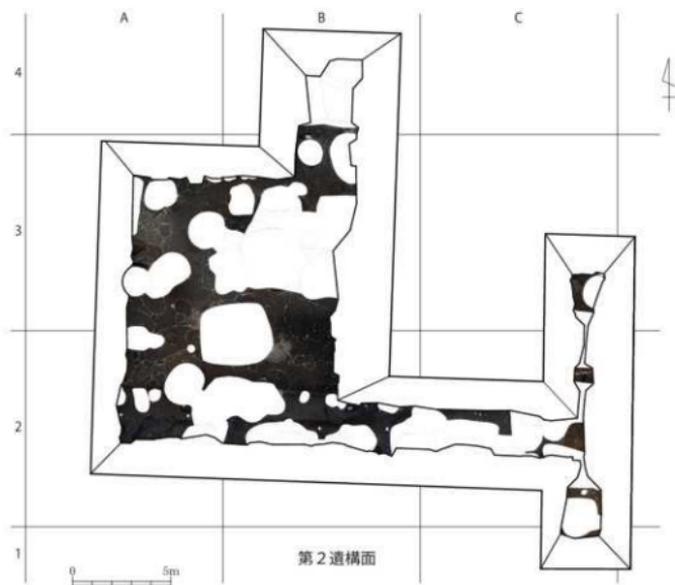
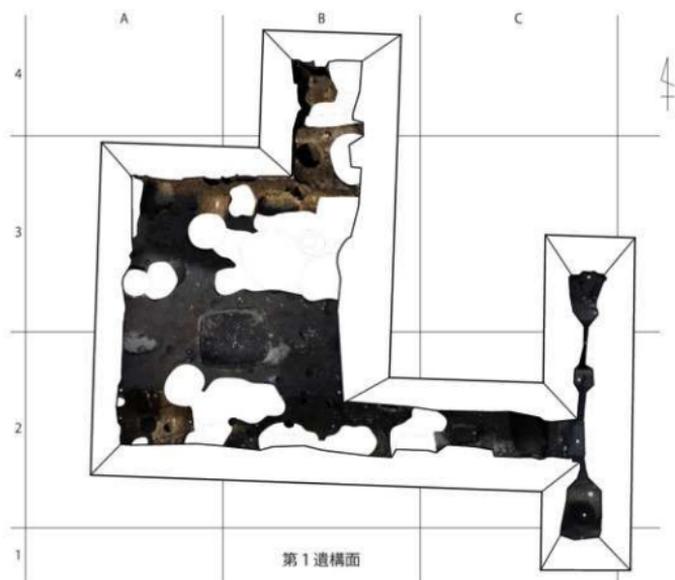
条坊と戸主が意識された遺構としては、第2遺構面と第5遺構面でも検出した東西一直線に延びる溝2009・2011、5006と溝4042が挙げられる。溝2009・2011、5006は四行八門の北四門と五門境界線からは1m程南に、溝4042は6m程北にずれている。溝2009・2011と溝5006は同一の溝ではなく、少なくとも半間（約0.9m）の間をもって途切れていることから、ここで行き来できるような通路を備えた屋敷割の境に廻らせた雨落溝か用水路であったかもしれない。溝4042は幅1.25m、深さ0.6mを測る栗研堀に近い形状の掘り込みだが、東延長線上の2区までには続いていない。断面形状が左と右で傾斜が異なっていること、室町時代の遺物が出土している

ことから、館の周囲を巡る防御施設としての性格を含んでいた可能性なども考えられる。

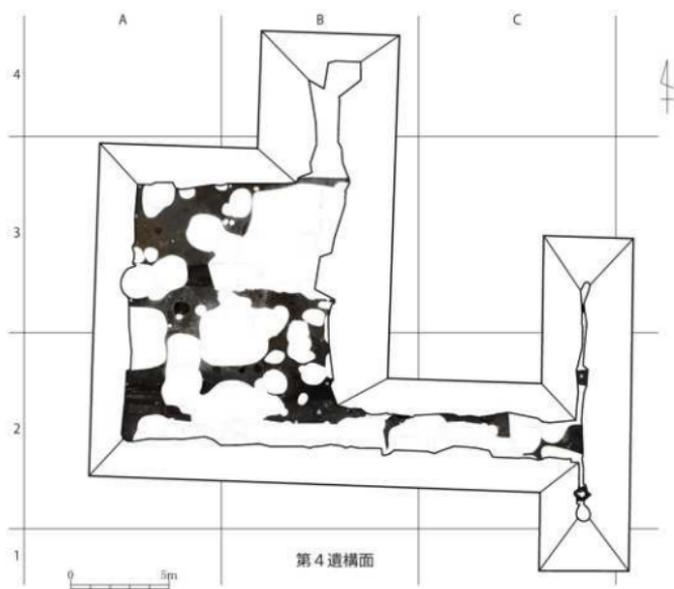
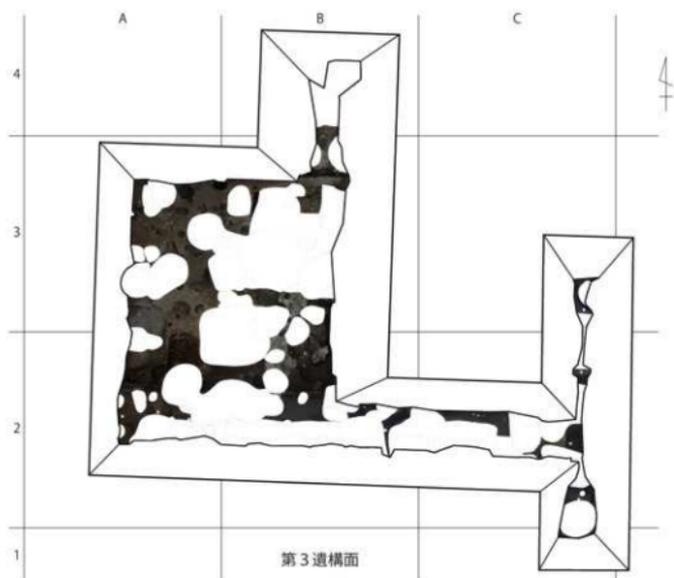
直径2mを超えるような大型の土坑は、土坑1017、2014、2076、2078、3015、3024、4017、4055、5014、5024など調査面を限らず全城にある。土坑5024は平坦な底面をもつ大型の遺構で、上層は壊されているものの下層は残存しており、京都Ⅳ期の土師器皿が出土している。これにより年代は平安時代中期に上る可能性があるが、大部分が調査区外で全体形状は不明である。直径1m程までの中規模の土坑群からは、土器類が多く出土する傾向があった。土坑2031、2054、2063、2089、3062、3094、4055などがある。特に土坑3094、4055、5004・5005は、まとまって土師器皿が廃棄されている。土師器皿はほとんどが京都Ⅶ期～Ⅷ期のものである。当地は室町時代後期には応仁の乱以降に形成された下京城の外であるが、室町時代前期においての集住は存外と密であったのだろう。生活の中での土器などを捨てた廃棄土坑以外では、生産施設由来のいわゆる産業廃棄に伴った遺構もある。土坑2020の最下層土は均質な黒色粘質土が堆積している。土壌分析により、主成分は稲藁が燃えた灰であったことが分かった。近辺の調査区南壁際からは銅滓や焼土粒がみつかり、金属加工の工房が存在していたと考えられる。土坑3014は、埋土が灰色粘土主体で最下層に炭化物層で成るもので、周辺遺構の堆積とは明らかに異なっている。周辺整地層からも鋳造関連の遺物として輪羽口や埴塼、銅製品の破片などもみつかり、土坑2020と同様に鋳物工房の操業に伴った廃棄土坑の可能性が高い。

建物の痕跡として、礎石1034、柱穴1041、2003、2004、2034、4043や、東西方向で並ぶ柱列1、柱列2、柱列3がある。柱列は桁行約1.7m～1.8mの建物跡の可能性が高い。調査を行った井戸は井戸1023、1035があり、いずれも江戸時代のものである。井戸1023は井戸枠瓦で組んであるもの、井戸1035は方形の竪穴に三和土が張られた半地下式の構造であり、室内に設けられたものと考えられる。他には、江戸時代以降につくられた穴蔵であろう方形石組も石組1015、1038、1098など複数基を確認している。

総じてみると、中世に属する遺構の分布は濃密であるものの、比して大規模な建物の痕跡は少ない。調査区は十五町の西二～三行北三～五門に収まり、天正の道筋改変以前の条坊地割では、西側南北に延びる富小路、南側東西に延びる三条坊門小路から各々15丈(約45m)程も離れている。そもそも、町屋が発展する安土桃山時代以前の室町時代では下京の北東外城であった。当地は中世において集住や往来の空間ではなく、耕地や空地となっていた時期が断続してあったはずである。またこの場所は、室町時代から続く上京下京の旧市街地とは異なり、南北方向の通りの付け替えを行った上で長方形街区とした新興の町屋である。近世以降発達した町屋によって空閑地が消滅していくまで、火災や洪水に伴った大規模な整地以外での開発は考えにくい。特に通りから奥に入る2区(西三行北四～五門)は、1・3区(西二行北三～五門)に比べ安土桃山時代にあたる建物痕跡の薄さを考えると、麩屋町通と御幸町通の新設を迎えても、しばらくは生活や産業廃棄物の自家処理に利用した実質的な空閑地であったのだろう。遺構の分布状況からは、江戸時代に入っては町屋の裏庭または中庭として活況を呈していた様子が窺える。



第41図 整地および遺構検出範囲1 (縮尺1/250)



第42図 整地および遺構検出範囲2 (縮尺1/250)

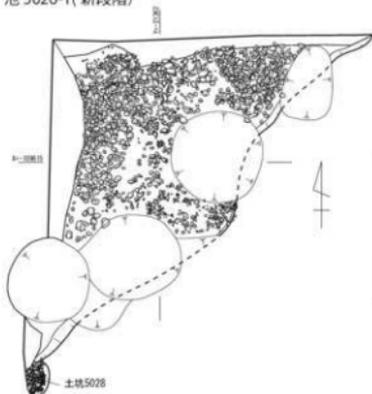
## 第2節 園池について

**池 5026** 平安時代中期の邸宅である山井殿との関連性を示す遺構である。底面には拳大の玉石が全体に敷かれており、可能性としては園池州浜の一部であろう。玉石は砂岩などで構成されているようで、鴨川の川原石として一般にみられるものである。本調査地の南西40m地点で行われた同町域内の発掘調査では、11世紀代の土器が出土した池と溝がみつまっている(註1)。この池は、石敷などは伴わない浅い落ち込みであるようだが、調査区の東壁際で検出されたものであり、大部分が東方へ続いていくと考えられる。池5026の汀は南西方向へ延びており、これに接続する可能性を残す。また、池5026の土壌分析から判明した針葉樹のツガやコウヤマキ、落葉広葉樹のクルミヤコナラなどの花粉化石の存在は、特定の植物が鑑賞目的で植栽されていた可能性を示しているのではないだろうか。前章での試料分析では、全体に保存状態が悪いという断りはあるが、花粉組成が平安時代の京都盆地の一般的な傾向と合致していないことは確かである。また珪藻化石の検出が非常に少ない理由についての考察の中で、水深の変動が著しかったという可能性に注目したい。これは水の湧出と引き込みの両環境が整った循環性の高い流水の園地であったことを証するものではないだろうか。埋土は含有物の少ない砂質土が主体で、埋め戻したというよりは流水環境による堆積とみられる。石敷下の溝状の窪みについても、池の造成による人工のものではなく、自然流水の痕跡とも考えられる。3区北壁西側(第5図)では石敷と地山の間にも堆積土層が確認できる。この層は、石敷上層(池5026-1)と区別し、池5026-2としている。池の埋土からの出土遺物は輸入陶器を含み希少性は高いものの少量で、平安時代と室町時代のいずれかに属する。このため池の埋没時期は室町時代まで下る可能性もあるが、造営年代は層位解釈を鑑みて平安時代中期と考えたい。

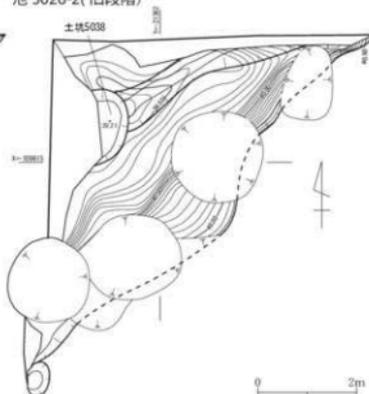
**土坑 5038** 池5026の石敷の下に掘り込まれているもので、石が敷かれた時点ですでに埋没していたであろう状況である。埋土は均質な粘土で、埋没を防ぐ木枠や石が充填されたような痕跡はない。判断材料は少ないが、このことと石敷下の堆積土層(池5026-2)により、池には新旧2段階の時期があり、石敷は改修後のものかもしれない。左京三条十三町跡・烏丸御池遺跡の発掘調査では、室町時代の池の調査が行われ、池の水深は20cm、標高37.25m程であったという考察がされている(註2)。この池の中央には水が湧く泉が設けられていた。池5026の最底面で検出した土坑5038も、同様に泉の可能性はある。池が成立する下限水位の底面の標高はおおよそ39.5m、池上端は標高40.5mであり、前述した高い循環性を資する湧泉式の池と仮定すれば、標高40m弱で水位を保っていたものと推察できる。現地表面からは3m程下になる。なお、近隣住宅に現存する井戸は、地下約20mから地下水を汲み上げているようである。本調査を根拠として、当時の地下水位の正確な復元は容易ではないものの、豊富な地下水と水捌けのよさの両立によって安定した居住が可能な土地であったことは間違いないだろう。

**土坑 5028** 池5026の上端際に位置する集石土坑もしくは石積みで、遺存状況としては池5026によって壊されている。石は池の石敷のものよりも小さい。池の関連構造物であるならば、陸部に設けられた滝組基部の根石の可能性も考えられる。ただ、遺構の西側は調査区外で部分的な土層観察に限られたため、想像の域を出るものではない。

池 5026-1(新段階)



池 5026-2(旧段階)



第43図 池5026の変遷(縮尺1/100)

### 第3節 牛馬骨出土遺構について

動物遺体、特に切斯痕がある牛馬骨がまとまって出土した遺構がある。石組遺構1038、土坑1097・2086・3015・3093であり、これらは散在するものではなくB2～B4グリッドにかたまっている。前章の動物遺体に関する分析では、主にニカワを精製するための材料であったと考察した。これまで平安京跡出土の動物遺体の解釈については、祭祀であったり、斃牛馬処理であったりの可能性が度々検討されている(註3)。本調査での遺存状況は、出土部位がほぼ四肢骨であること、共存遺物も土師器や陶磁器などのごく一般的な食膳具であるなど、いずれの可能性とも違いものである。前述したように出土範囲も限定的で、宅地から排出した生ゴミ廃棄に近い処理をされたものとみてよいだろう。



写真1. 牛馬骨出土B2～4グリッド(北から)

#### 註

- (1) 水谷明子 2015 『平安京左京三条四坊十五町烏丸御池遺跡一駄屋町の調査一』 古代文化調査会
- (2) 松吉祐希 2017 『平安京左京三条三坊十三町跡・烏丸御池遺跡』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- (3) 丸山真史 2017 「平安京跡出土の牛馬骨の解釈に関する問題点」 『洛史 研究紀要』 第11号 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

第10表 出土遺物観察表

遺物番号	遺物番号	器種	器形	法量 (cm)			調整・成型		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
1	土坑 1017	土器器	皿S	(10.6)	1.8	(5.3)	ヨコナデ・ ユビオサエ	ヨコナデ・ ナデ	7.5R 7/4 に近い褐色	
2	土坑 1017	青磁	碗	-	-	4.75	ロクロナデ・ 削出し高台・ 黄釉 (高台・ 黄釉)	ロクロナデ・ 黄釉	釉: 5G7/1 明色・ 灰白色 地: 7.5Y7/2 灰白色	初期伊万里
3	土坑 1017	焼酎陶器	搦鉢	(33.0)	[6.2]	-	ロクロナデ	ロクロナデ・ 掻目7条1 単位	5Y8/2 灰褐色	信楽 B7 類
4	土坑 1017	施釉陶器	天目茶碗	11.4	6.9	3.1	ロクロナデ・ 回転ヘラケ ズリ・削出 し高台・鉄 釉	ロクロナデ・ 鉄釉	釉: 7.5Y8/2 黒褐色 地: 2.5Y8/2 灰白色	瀬戸美濃 大塚第4段 層
7	土坑 1018	施釉陶器	碗	(10.2)	5.0	(4.5)	ロクロナデ・ 回転ヘラケ ズリ・削出 し高台・灰 石釉	ロクロナデ・ 灰石釉	釉: 10Y8/3 浅黄褐色 地: 10Y8/2 灰白色	瀬戸美濃
8	土坑 1021	土器器	羽釜	21.2	[10.4]	-	ロクロナデ・ ヨコナデ	ヨコハケ・ ナデ	外: 7.5Y8/4 浅黄褐色 内: 5Y8/6 褐色	内面に覆付着
9	土坑 1021	施釉陶器	向付	-	[5.3]	-	ナデ・露部 鉄釉給	ナデ・露部 鉄釉給	2.5Y8/2 灰白色	露部
10	土坑 1021	磁器	大皿	(25.0)	4.5	(12.0)	底部紫砂 青花	ロクロナデ・ 青花彫小風 風文	釉: 10Y8/1 灰白色	福建省漳州窯産
11	土坑 1021	土製品	輪郭口	長さ [7.6]	直径 [4.0]	内径 1.2	ナデ	-	外: 7.5Y8/4 に近い褐色 内: 7.5Y8/3 に近い褐色	外面に付着 外面黒熟
12	井戸 1023	瓦	井戸袴瓦	高さ 28.6	幅 24.7	厚さ 3.9	凸: 押型	凹: ナデ	凸: 3A/ 灰白色 凹: 2.5Y5/1 黄灰色	凹面に縦方向の縞り傷
13	井戸 1023	瓦	井戸袴瓦	高さ 28.4	幅 24.3	厚さ 2.9	凸: 押型	凹: ナデ	凸: 3A/ 灰白色 凹: 3N/ 黄灰色	
14	土坑 1027	土器器	皿S	11.3	2.2	6.3	ヨコナデ・ ユビオサエ	ヨコナデ・ ナデ	7.0R8/3 浅黄褐色	口縁部に覆付着 灯明皿
15	土坑 1027	土器器	焙烙鉢	29.1	5.9	-	ヨコナデ・ ナデ	ヨコナデ・ ナデ	外: 7.5Y8/2 灰褐色 内: 7.5Y7/3 に近い褐色	外面に覆付着
16	土坑 1027	施釉陶器	漬鉢皿	13.9	2.6	5.9	ロクロナデ・ ヘラケズリ・ 灰釉	ロクロナデ・ 砂目煎・灰 釉	釉: 7.5Y7/ 灰白色 地: 10Y7/4 に近い黄 褐色	唐津
17	土坑 1027	施釉陶器	小杯	6.5	2.4	3.3	ロクロナデ・ 回転ヘラケ ズリ・削出 し高台・黄 瀬戸釉	ロクロナデ・ 黄瀬戸釉	釉: 2.5Y7/3 淡黄色 地: 2.5Y8/2 灰白色	黄瀬戸
18	土坑 1027	磁器	小碗	9.2	6.0	3.9	ロクロナデ・ 削出し高台・ 染付	ロクロナデ・ 黄釉	釉: 5G78/1 灰白色 地: 2.5Y8/1 灰白色	初期伊万里
20	土坑 1028	軟質磁器 陶器	盞	-	2.8	-	ユビオサエ・ 黄釉	ユビオサエ・ 黄釉	2.5Y8/2 灰白色	風化により釉剥離
21	井戸 1035	施釉陶器	京碗	(9.2)	5.6	(4.8)	ロクロナデ・ ケズリ・削 出し高台・ 黄釉鉄給	ロクロナデ・ 黄釉	釉: 2.5Y7/4 浅黄色 地: 2.5Y8/2 灰白色	京焼
22	井戸 1035	施釉陶器	中皿	(11.8)	7.5	(10.7)	ロクロナデ・ 削出し高台・ 黄釉	ロクロナデ・ 黄釉鉄給 富士水文	釉: 2.5Y6/4 に近い黄 褐色 地: 2.5Y8/1 灰白色	唐津 京焼風陶器
23	井戸 1035	青磁	皿	(13.8)	3.8	(5.1)	ロクロナデ・ 削出し高台・ 黄釉 (高台・ 黄釉)	ロクロナデ・ 黄釉・見込 小蛇の目輪 割き	釉: 2.5G78/1 灰白色 地: 8N/ 灰白色	肥前
24	井戸 1035	磁器	碗	(10.1)	5.6	4.0	ロクロナデ・ 染付コン ニャク印判 草文	ユビオサエ・ 黄釉	釉: 10Y8/1 灰白色 地: 8N/ 灰白色	伊万里
25	井戸 1035	磁器	仏鉢具	(6.6)	6.2	3.6	ロクロナデ・ 染付草文・ 染付コン ニャク印判 牡丹文	ロクロナデ・ 黄釉	釉: 8N/ 灰白色 地: 8N/ 灰白色	伊万里
26	石組土坑 1038	土器器	皿S	(10.8)	2.3	-	ヨコナデ・ ユビオサエ・ ナデ	ヨコナデ・ ナデ	外: 7.5Y8/4 に近い褐色 内: 7.5Y8/4 浅黄褐色	
27	石組土坑 1038	施釉陶器	京碗	13.0	5.0	5.6	ロクロナデ・ 削出し高台・ 高台内刷目・ 黄釉	ロクロナデ・ 黄釉鉄給 富士水文	釉: 2.5Y8/4 淡黄色 地: 5Y8/1 灰白色	京焼
28	石組土坑 1038	磁器	碗	10.8	7.1	5.0	ロクロナデ・ 削出し高台・ 黄釉無釉・ 染付草文文	ロクロナデ・ 黄釉	釉: 7.5G78/1 黄緑灰色 地: 7.5G78/1 明緑灰色	初期伊万里
29	石組土坑 1038	磁器	大皿	(24.6)	4.8	(14.2)	ロクロナデ・ 削出し高台・ 染付草文・ 青花	ロクロナデ・ 青花草文文	釉: 8N/ 灰白色 地: 8N/ 灰白色	福建省漳州窯産

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			調整・成型		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
30	石組土坑 1038	土製品	埴埴	G0.3	[13.0]	(13.0)	ナデ	ナデ	外: 2.0Y7/1 灰白色 内: N3/ 緑灰色	外面に自然蝕・付着物あり
31	土坑 1048	土器器	皿Ac	(7.9)	1.0	-	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄褐色	
32	土坑 1048	土器器	皿N	(13.4)	2.6	(8.4)	ヨコナデ・ エビオサエ	ヨコナデ・ ナデ	7.5YR8/4 浅黄褐色	
33	土坑 1050	施釉陶器	皿	(12.0)	3.5	4.0	ロクロナデ・ タズリ・削 出し高台	ロクロナデ・ 削し高台・ 鉄軸	軸: 5YR/1 灰白色 地: 10YR8/3 にぶい黄 褐色	唐津
34	土坑 1050	施釉陶器	皿	-	[4.0]	(13.2)	ロクロナデ・ 鐵部軸	ロクロナデ・ 目跡・鐵部 軸	軸: 2.5YR/3 赤灰色 地: 2.5YR/3 浅黄褐色	鐵部
35	土坑 1050	施釉陶器	椀鉢	(38.8)	15.9	(13.6)	エビオサエ・ ロクロナデ・ ヘラタズリ	ロクロナデ・ 器目目1条1 單位	5YR4/3 にぶい赤褐色	丹波 寶期D類 内面に 赤色顔料(ベンガラ) 付着
36	土坑 1097	施釉陶器	碗	9.5	5.4	4.0	ロクロナデ・ 回転ヘラケ ズリ・削出 し高台・灰 軸	ロクロナデ・ 目跡・灰軸	軸: 5Y7/2 灰白色 地: 2.5YR/2 灰白色	瀬戸美濃
37	土坑 1097	施釉陶器	皿	12.9	3.3	7.0	ロクロナデ・ 削出し高台・ 長石軸	ロクロナデ・ 目跡・長石 軸・鉄部鐵軸 嵌花文	軸: 2.5YR/1 灰白色 地: 2.4YR/2 灰白色	志野
38	土坑 1097	瓦	巴文新頭 大野平江	瓦当部高 (4.0)	瓦当部幅 [10.0]	厚さ 1.8	凸: 横方向 のヘラナデ	凸: 赤目肌	凸: 10YR8/3 浅黄褐色 凹: 10YR8/3 浅黄褐色	山城産小
39	土坑 2006	瓦器土器	瓦灯籠	(19.0)	[5.3]	15.5	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR3/1 黒褐色	
40	土坑 2006	施釉陶器	天目茶碗	11.7	6.9	4.6	ロクロナデ・ 回転ヘラケ ズリ・削出 し高台・鉄 軸	ロクロナデ・ 鉄軸	軸: 5YR4/1 にぶい赤褐 色 地: 2.5YR/2 灰白色	瀬戸美濃 豊楽第1段 階
41	溝 2009	土器器	皿5	(11.0)	2.0	-	ヨコナデ・ エビオサエ	ヨコナデ・ ナデ	7.5YR8/4 浅黄褐色	
42	溝 2009	施釉陶器	水甕	(7.8)	[4.1]	-	ロクロナデ・ 長石軸鉄軸	ロクロナデ・ 長石軸	外: 5YR7/6 褐色 内: 2.5YR/2 灰白色	志野小
43	溝 2009	磁器	輪花碗	(12.0)	[3.7]	-	ロクロナデ・ 青花染馬文	ロクロナデ・ 藍軸	軸: 10YR/1 灰白色	景徳鎮産
44	土坑 2010	施釉陶器	碗	-	-	(5.1)	ロクロナデ・ 回転ヘラケ ズリ・長石 軸	ロクロナデ・ 長石軸	軸: 2.5YR/1 灰白色 地: 2.5YR/2 灰白色	志野
45	溝 2011	土器器	皿5	(11.0)	2.4	(5.0)	ヨコナデ・ エビオサエ	ナデ・ヨコ ナデ	7.5YR7/4 にぶい褐色	
46	溝 2011	土器器	つぼつぼ	2.3	2.0	1.8	ナデ・エビ オサエ	ナデ	7.5YR8/2 灰白色	外面に墨書
47	溝 2011	施釉陶器	段皿	(13.0)	2.9	(7.1)	ロクロナデ・ 削出し高台・ 灰軸	ロクロナデ・ 灰軸	軸: 5YR/1 灰白色 地: 5YR/1 灰白色	瀬戸美濃
48	溝 2011	土製品	取鉢	6.3	3.1	-	エビオサエ	エビオサエ	外: 2.0Y7/1 灰白色 内: 10YR7/1 灰白色	内面に緑青付着
49	土坑 2014	土器器	皿Sr	5.6	1.3	-	エビオサエ	ナデ	外: 7.5YR8/3 浅黄褐色 内: 7.5YR7/6 褐色	
50	土坑 2014	土器器	皿Sb	9.4	2.1	4.7	ヨコナデ・ エビオサエ	ヨコナデ	7.5YR8/3 浅黄褐色	
51	土坑 2014	土器器	皿S	11.0	2.2	6.3	ヨコナデ・ エビオサエ	ナデ・ヨコ ナデ	5YR8/3 褐色	
52	土坑 2014	施釉陶器	片口椀鉢	(32.5)	14.2	12.6	ロクロナデ・ エビオサエ	ロクロナデ・ 器目目6条1 單位	外: 5YR5/4 にぶい赤褐 色 内: 3M/ 灰白色	信楽 B6b 類
53	土坑 2014	施釉陶器	皿	6.4	2.1	3.9	赤切痕・黄 瀬戸軸	黄瀬戸軸	軸: 2.5YR/3 赤灰色 地: 2.5YR/2 灰白色	黄瀬戸
54	土坑 2014	施釉陶器	天目茶碗	11.6	7.1	5.0	ロクロナデ・ 回転ヘラケ ズリ・削出 し高台・鉄 軸	ロクロナデ・ 椀軸	軸: 5YR3/4 暗赤褐色 地: 2.5YR/2 灰白色	瀬戸美濃 豊楽第2段 階
55	土坑 2014	施釉陶器	折縁大皿	(26.6)	4.8	11.0	ロクロナデ・ 回転ヘラケ ズリ・削出 し高台・鐵 部軸	ロクロナデ・ 鐵部軸鉄軸	2.5YR/2 灰白色	鐵部
56	土坑 2014	青磁	碗	11.1	7.1	4.9	ロクロナデ・ 施釉(高台 型軸)	ロクロナデ・ 藍軸	軸: 7.5G7/1 明緑灰色 地: M/ 灰白色	初期伊万里
57	土坑 2014	磁器	筒形碗	8.6	7.7	5.8	ロクロナデ・ 削出し高台・ 染付團子唐 草文	ロクロナデ・ 藍軸	10YR/1 灰白色	初期伊万里
58	土坑 2014	土製品	取鉢	(4.4)	2.2	-	エビオサエ	-	外: 2.5YR5/3 にぶい赤 褐色 内: 2.5YR/1 黄灰褐色	内面に緑青付着
59	土坑 2014	土製品	取鉢	7.8	4.0	-	エビオサエ	-	2.5YR/1 灰白色	内面地熱し赤色化
60	土坑 2014	土製品	取鉢	13.6	[5.6]	-	ナデ	ナデ	外: 7.5YR6/4 にぶい黄 褐色 内: 10YR4/3 にぶい黄 褐色	

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			調整・成型		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
63	土坑 2018	施結陶器	皿	14.3	3.4	7.3	ロクロナダ・ 回転ヘラク ズリ・削出 し高台	ロクロナダ	軸: 5Y8/3 淡黄色 地: 7.5Y8/4 浅黄褐色	真瀬戸
64	土坑 2031	土師器	皿Ac	5.4	0.8	5.1	ナダ	ロクロナダ・ ナダ	2.5Y8/2 灰白色	
65	土坑 2031	土師器	皿N	7.8	2.1	4.0	ヨコナダ	ヨコナダ・ ナダ	10Y8/3 浅黄褐色	
66	土坑 2031	土師器	皿S	10.7	3.15	-	ヨコナダ	ナダ・ヨコ ナダ	10Y8/2 灰白色	
67	土坑 2054	土師器	皿S (10.1)	1.8	-	-	ヨコナダ・ ユビオサエ ナダ	ヨコナダ・ ナダ	外: 10Y8/2 に近い黄 褐色 内: 10Y8/2 灰黄褐色	
68	土坑 2054	須恵器	壺 (28.2)	[9.1]	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ・ ナダ・ユビ オサエ	外: N7/ 灰白色 内: M6/ 灰色	
69	土坑 2054	白磁	皿	(9.2)	2.8	(3.8)	ロクロナダ・ 削出し高台	ロクロナダ・ 圈縁	軸: 5Y7/1 灰白色 地: 5Y8/1 灰白色	
70	土坑 2054	山茶碗	碗	(17.6)	5.2	(8.4)	ロクロナダ・ 貼付け高台・ 糊状瓦葺	ロクロナダ	2.5Y7/1 灰白色	南部器屋型型 4 型式期 内面に使用痕
72	土坑 2063	土師器	皿S	8.7	1.7	-	ヨコナダ・ ユビオサエ・ 板状瓦葺	ヨコナダ・ ナダ	5YK7/6 褐色	
73	土坑 2063	土師器	皿S (12.9)	2.8	-	-	ヨコナダ・ ナダ・ユビ オサエ	ヨコナダ・ ナダ	外: 10Y8/3 浅黄褐色 内: 10Y8/2 灰白色	
74	土坑 2063	瓦質土器	鉢 (32.7)	[5.3]	-	-	ユビオサエ・ ナダ	ナダ・ヨコ ナダ	外: K3/ 暗灰色 内: 2.5Y8/1 灰白色	
75	土坑 2068	土師器	皿S (12.8)	2.1	-	-	ヨコナダ・ ユビオサエ・ ナダ	ヨコナダ・ ナダ	7.5YK7/4 に近い褐色	
77	土坑 2076	土師器	皿S	10.8	1.8	-	ヨコナダ・ ユビオサエ・ ナダ	ヨコナダ・ ナダ	10Y8/2 灰白色	煤付着 灯明皿 外面 に黒煤あり
78	土坑 2076	土師器	皿S	11.0	2.4	5.7	ヨコナダ	ヨコナダ	10Y8/2 灰白色	
79	土坑 2076	土師器	焙烙鍋	31.0	[9.1]	-	ヨコナダ	ヨコナダ	外: 7.5Y8/4 1 褐色 内: 7.5Y8/2 明褐色	煤付着
80	土坑 2076	練結陶器	碗	-	[11.6]	5.4	ロクロナダ・ 貼付け高台・ 筋結	ロクロナダ・ 筋結	軸: 2.5Y7/6 明黄褐色 地: 7.5Y8/8 灰白色	故窯により軸の跡差む
81	土坑 2076	瓦質土器	瓦灯皿	19.1	[7.3]	-	ロクロナダ・ ユビオサエ・ ナダ	ロクロナダ	10Y8/1 褐色	
82	土坑 2076	瓦質土器	瓦灯皿	18.9	[7.7]	(15.0)	ロクロナダ・ ナダ・貼付 け高台	ロクロナダ	7.5Y 8/4 1 褐色	
83	土坑 2076	施結陶器	皿	12.6	4.0	(4.3)	ロクロナダ・ 削出し高台・ 灰結	ロクロナダ・ 灰結	軸: 7.5Y8/1 灰白色	
84	土坑 2076	施結陶器	天目茶碗	11.1	5.7	4.5	ロクロナダ・ 回転ヘラク ズリ・削出 し高台・鉄 結	ロクロナダ・ 鉄結	軸: 7.5Y8/2 黄褐色 地: 2.5Y8/2 灰白色	瀬戸美濃 大冨第 4 段 第
85	土坑 2076	施結陶器	筒形茶碗	-	-	(4.6)	ケズリ・削 出し高台・ 灰石結	灰石結	軸: 2.5Y8/1 灰白色 地: 2.5Y8/1 灰白色	志野
86	土坑 2076	施結陶器	耳付水注 (4.1)	6.2	4.5	4.5	ロクロナダ・ 回転糸切痕・ 鉄結・板状瓦 葺	ロクロナダ	軸: 7.5Y8/4 1 明褐色 地: 10Y8/6 黄褐色	瀬戸美濃
87	土坑 2076	施結陶器	香茶碗	10.1	7.8	6.6	ロクロナダ・ キキ目・貼 付け高台・ 灰結	ロクロナダ・ 灰結	2.5Y8/3 淡黄色	京焼系
88	土坑 2076	施結陶器	向付 (12.8)	8.9	6.2	6.2	ロクロナダ・ 削出し高台・ 灰石結・鉄 結・板状瓦・ 東屋文・草 花文・持立	ロクロナダ・ 灰石結 ・板状瓦 ・東屋文	軸: 7.5Y6/2 灰褐色 地: 5Y8/6 黄褐色	古津津
91	土坑 2078	土師器	皿Sr	5.3	1.35	-	ヨコナダ・ ユビオサエ	ナダ	7.5YK7/4 に近い褐色	
92	土坑 2078	土師器	皿S	11.1	2.2	-	ヨコナダ・ ユビオサエ	ヨコナダ・ ナダ・ペン タラ造	5Y8/4 淡褐色	口縁部に煤付着 灯明 皿
93	土坑 2078	土師器	皿S	11.1	2.1	6.4	ヨコナダ・ ユビオサエ	ヨコナダ・ ナダ	7.5Y8/6 浅黄褐色	煤付着 灯明皿
94	土坑 2078	土師器	焙烙鍋 (26.1)	[4.7]	-	-	ヨコナダ・ ヘラクズリ	ヨコナダ・ 板ナダ	外: 10Y8/4 1 浅黄褐色 内: 7.5Y8/3 に近い褐色	近江産 内面に煤付着
95	土坑 2078	瓦質土器	瓦灯傘	-	[19.6]	(18.4)	ロクロナダ・ ナダ	ナダ・ナダ・ ユビオサエ	外: 10Y8/4 1 褐色 内: 10Y8/5 1 褐色	
96	土坑 2078	施結陶器	瓶	-	[14.6]	8.7	ロクロナダ・ ナダ・底面 ヘラクズリ	ロクロナダ	5Y8/3 に近い赤褐色	唐津小

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			調整・成型		色調	備考	
				口径	器高	底径	外面	内面			
97	土坑 2078	施釉陶器	折縁皿	16.0	4.4	5.7	ロクロナデ・ 灰釉	ロクロナデ・ 磨上目跡・ 灰釉彫絵	軸: 10Y6/2 灰黄褐色 地: 10R7/3 に近い黄 褐色	古唐津	
98	土坑 2078	施釉陶器	天目茶碗	11.6	6.8	4.5	ロクロナデ・ 回転ヘラケ ズリ・削出 し高台・黒 釉	ロクロナデ・ 黒釉	軸: 7. 5YR3/1 黒褐色 地: 2. 5R8/2 灰白色	瀬戸美濃 大冨第4段 階後半期	
99	土坑 2078	磁器	皿	-	[1.4]	(5.9)	削出し高台・ 薬付窯砂・ 青灰染文	ロクロナデ・ 黒釉	軸: 7. 5G9/1 明緑灰色 地: 8R/ 灰白色	景徳鎮産	
102	土坑 3007	瓦	平瓦	長さ [14.8]	幅 [14.8]	厚さ 2.0	削: ケズリ・ ヘラ切り・ 面取り	凸: ケズリ	面: 布目肌 面取り	凸: 5S/0 灰色 面: 3M/0 灰色	
103	土坑 3007	瓦	丸瓦	長さ [7.0]	幅 [8.1]	厚さ 2.5	凸: ナデ	削: 布目肌 面取り	凸: 5S/0 灰色 面: 3M/0 灰色		
104	土坑 3015	土師器	皿S	(10.6)	2.4	-	ヨコナデ・ ナデ	ヨコナデ・ ナデ	7. 5YR7/4 に近い褐色	内面に煤付着 灯明皿	
105	土坑 3015	土師器	鉢	(20.0)	[6.5]	-	ロクロナデ・ ユビオサエ	ロクロナデ	外: 10R13/1 黒褐色 内: 7. 5YR5/3 に近い褐色	外面に煤付着	
106	土坑 3015	焼酎陶器	播鉢	-	[10.5]	(13.0)	ロクロナデ	掘り目4～5 条1単位	7. 5YR7/4 に近い褐色	信楽 内面使用肌	
107	土坑 3015	施釉陶器	小皿	11.2	2.7	6.5	ロクロナデ・ 回転ヘラケ ズリ・長石 釉	ロクロナデ・ 長石釉	2. 5YR2/ 灰白色	志野 大冨第3段階後 中期	
108	土坑 3015	施釉陶器	小杯	6.0	3.5	3.3	ロクロナデ・ 回転糸切肌 黒釉	ロクロナデ・ 目跡・黒釉	外: 7. 5YR5/3 に近い褐色 内: 5Y6/2 灰オリーブ 色	唐津	
109	土坑 3015	施釉陶器	天目茶碗	(10.4)	6.6	4.6	ロクロナデ・ 削出し高台・ 黒釉	ロクロナデ・ 黒釉	7. 5YR4/2 灰褐色	中国福建省産	
110	土坑 3015	磁器	皿	-	[2.9]	(8.8)	ロクロナデ・ 回転ヘラケ ズリ・薬付 窯砂・染付	ロクロナデ・ 染付	7. 5G9/1 明緑色	伊万里 内外面被熱	
111	土坑 3015	瓦	丸瓦	長さ [8.6]	幅 [6.7]	厚さ 1.4	凸: ナデ・ 彫刻	削: ナデ・ 布目肌・面 取り	凸: 2. 5Y6/1 黄灰色 面: 10R7/4 に近い黄褐色		
112	土坑 3016	灰釉陶器	碗	-	[5.6]	-	ロクロナデ・ 黒釉	ロクロナデ・ 黒釉	外: 5Y6/2 灰オリーブ 内: 5Y6/1 灰色	内面に使用肌 赤釉付 着	
113	土坑 3025	瓦質土器	皿	9.0	1.7	8.1	ヨコナデ・ ナデ・ユビ オサエ	ヨコナデ・ ナデ	外: 5S/0 灰色 内: 3M/0 灰色	乙訓郡地域産	
114	土坑 3025	土師器	皿Ac	5.0	1.0	-	ナデ	ナデ	10YR8/2 灰白色		
115	土坑 3025	土師器	皿S	8.0	1.9	-	ヨコナデ・ ナデ	ヨコナデ・ ナデ	7. 5YR8/4 浅黄褐色		
116	土坑 3025	土師器	皿N	(12.2)	1.7	(8.2)	ヨコナデ・ ユビオサエ 後ナデ	ヨコナデ・ ユビオサエ 後ナデ	10YR7/3 に近い黄褐色		
117	土坑 3025	土師器	皿Sh	6.8	1.7	-	ヨコナデ・ ナデ	ヨコナデ・ ナデ	2. 5YR2/ 灰白色		
118	土坑 3025	土師器	皿S	(12.8)	3.7	-	ヨコナデ・ ナデ	ヨコナデ・ ナデ	2. 5YR2/ 灰白色		
119	土坑 3025	青磁	碗	15.5	6.3	6.0	ロクロナデ・ 回転ヘラケ ズリ・黒連 文・黒釉	ロクロナデ・ 黒釉	地: 5Y6/4 に近い褐色 軸: 2. 5Y5/3 黄褐色	龜泉楽産	
120	土坑 3043	土師器	皿N	8.8	1.6	-	ヨコナデ・ ナデ	ヨコナデ・ ナデ	7. 5Y7/4 に近い褐色		
121	土坑 3043	土師器	皿N	(14.2)	2.3	-	ヨコナデ・ ユビオサエ 後ナデ	ヨコナデ・ ユビオサエ 後ナデ	7. 5Y7/3 に近い褐色	4cm 以下の石を含む	
122	土坑 3043	山茶碗	碗	-	[2.8]	(6.0)	ロクロナデ・ 削出し高台	ロクロナデ	外: 5Y6/1 灰色 内: 2. 5Y6/2 灰黄色	南部系尾張型5型式	
123	土坑 3043	施釉陶器	盤	-	[5.3]	(20.8)	ロクロナデ・ ヘラケズリ ナデ・黒釉 彫絵	ロクロナデ・ ヘラケズリ ナデ・黒釉 彫絵	外: 10R16/2 灰黄褐色 内: 5Y7/3 黄褐色	磁灶楽産	
124	土坑 3062	土師器	皿Ac	8.6	1.0	-	ナデ	ナデ	10YR7/3 に近い黄褐色		
125	土坑 3062	土師器	皿N	9.5	1.3	-	ヨコナデ・ ナデ	ヨコナデ・ ナデ	10YR6/3 に近い黄褐色		
126	土坑 3062	土師器	皿N	9.3	1.7	-	ヨコナデ・ ナデ	ヨコナデ・ 一方向のナ デ	10YR6/3 に近い黄褐色		
127	土坑 3062	土師器	皿N	(13.0)	2.5	(8.0)	ヨコナデ・ ナデ・ユビ オサエ	ヨコナデ・ ナデ	10YR6/3 に近い黄褐色		
128	土坑 3062	土師器	皿S	13.3	3.3	-	ヨコナデ・ ナデ	ヨコナデ・ ナデ	7. 5YR6/4 に近い褐色		
129	土坑 3062	緑釉陶器	碗	-	[2.2]	(8.4)	ロクロナデ・ 削出し高台・ 黒釉	ロクロナデ・ 黒釉	10Y4/2 オリーブ灰色	若江産	

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			調整・成型		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
130	土坑 3062	施釉陶器	空心瓶	-	[4.0]	-	ロクロナダ・黒釉	ロクロナダ・黒釉	10YR3/2 黒褐色	中国南部地方産
131	土坑 3062	瓦	唐草文軒平瓦	高さ [3.3]	幅 [9.1]	厚さ -	凸: 型押し	凹: -	外: 3A/0 灰色 内: 3S/0 灰色	
132	土坑 3070	土師器	甌 N	(11.6)	2.0	-	ヨコナダ・ニビオサエ後ナダ	ヨコナダ・ナダ	7.5YR7/6 褐色	
133	土坑 3070	施釉陶器	播鉢	-	[7.5]	12.8	ロクロナダ	ロクロナダ・摺り目6条1単位	外: 5YR4/2 灰褐色 内: 5YR4/6 赤褐色	伊集 径 8mm までの石を多く含む
134	土坑 3080	土師器	甌 Sh	6.9	2.2	3.8	ヨコナダ・ニビオサエ後ナダ	ヨコナダ・ナダ	2.5YR/2 灰白色	
135	土坑 3080	土師器	甌 S	11.4	3.1	-	ヨコナダ・ニビオサエ後ナダ	ヨコナダ・ナダ	2.5YR/3 淡黄色	
136	土坑 3080	山茶碗	碗	-	[2.3]	(5.6)	ロクロナダ・ナダ	ロクロナダ	5Y7/1 灰白色	南部系尾張型 6~7 型式
137	土坑 3080	瓦	平瓦	長さ [17.6]	幅 [15.0]	厚さ 1.7	凸: ナダ	凹: ナダ	7.5Y5/1 灰色	
138	土坑 3089	土師器	甌 N	(13.0)	[2.2]	-	ヨコナダ・ニビオサエナダ	ヨコナダ・ナダ	7.5YR5/4 に近い褐色	口縁部に付着 灯明皿
139	土坑 3089	施釉陶器	甌	15.0	3.0	8.6	ロクロナダ・胎付け灰台・長石釉	ロクロナダ・長石釉	2.5Y7.2 灰黄色	志野 大塚第3段階後半期
140	土坑 3089	施釉陶器	天目茶碗	11.8	7.0	5.4	ロクロナダ・ハラケズリ・粉釉に黒釉掛け流し	ロクロナダ・粉釉に黒釉掛け流し	釉: 5YR3/4 暗赤褐色 地: 2.5Y6/3 に近い褐色	瀬戸美濃 大塚第5段階
142	土坑 3094	土師器	甌 Nb	7.0	1.8	3.7	ヨコナダ・ニビオサエ後ナダ	ヨコナダ・ナダ	7.5YR7/4 に近い褐色	
143	土坑 3094	土師器	甌 N	8.7	1.9	-	ヨコナダ・ニビオサエ後ナダ	ヨコナダ・ナダ	7.5YR7/6 褐色	径 4mm 以下の石を含む
144	土坑 3094	土師器	甌 N	12.4	2.7	-	ヨコナダ・ニビオサエ後ナダ	ヨコナダ・ニビオサエナダ	7.5YR7/4 に近い褐色	内面に付着
145	土坑 3094	土師器	甌 Sh	7.1	2.1	3.6	ヨコナダ・ニビオサエ後ナダ	ヨコナダ・ナダ	2.5YR/2 灰白色	
146	土坑 3094	土師器	甌 S	8.0	2.4	4.2	ヨコナダ・ナダ	ヨコナダ・ナダ	2.5YR/3 淡黄色	
147	土坑 3094	土師器	甌 S	11.8	2.9	-	ヨコナダ・ニビオサエ後ナダ	ヨコナダ・ナダ	10YR8/3 淡黄褐色	
148	土坑 3094	瓦質土器	碗	(15.3)	[5.7]	-	ヨコナダ・ハラケズリ	ヨコナダ・ナダ	2.5Y5/1 黄灰色	瓦質焼成 大和産
149	土坑 3094	須恵器	鉢	(16.4)	5.8	(8.0)	ロクロナダ・回転糸切痕	ロクロナダ	2.5Y4/1 黄灰色	東播磨
150	土坑 3095	土師器	甌 Nr	5.9	1.4	-	ニビオサエナダ	ナダ	10YR7/4 に近い黄褐色	口縁部に付着 灯明皿
151	土坑 3095	土師器	甌 N	10.8	2.5	-	ヨコナダ・ナダ	ヨコナダ・ナダ	10YR7/4 に近い黄褐色	口縁部に付着 灯明皿
152	土坑 3095	施釉陶器	天目茶碗	(11.4)	6.9	4.0	ロクロナダ・回転ハラケズリ・削出し灰台・黒釉	ロクロナダ・黒釉	10YR5/3 に近い黄褐色	中国福建省産
153	土坑 3095	施釉陶器	大甌	(24.1)	[3.6]	-	ロクロナダ・灰釉	ロクロナダ・灰釉	2.5Y7/2 灰黄色	古唐津
154	土坑 3096	須恵器	甕	(28.8)	[8.2]	-	ヨコナダ・タタキ後ナダ・タタキ	ヨコナダ	N5/0 灰色	
155	土坑 3096	白磁	碗	-	[1.7]	(5.2)	削出し灰台・黒釉	黒釉	外: 5Y7/2 灰白色 内: 5Y7/1 灰白色	
156	B4 7' 7y)' 3 面上	土師器	甌 (横き皿型)	7.5	2.0	-	ヨコナダ・ナダ・ニビオサエ	ヨコナダ・ナダ	5YR7/6 褐色	
157	A3 7' 7y)' 3 面上	白色土器	高坏	-	-	-	ナダ・ケズリによる面取り 14 面	-	2.5YR/2 灰白色	
158	A3 7' 7y)' 3 面上	灰釉陶器	碗	-	[1.4]	8.4	ロクロナダ・ハラケズリ・胎付け灰台・黒釉	ロクロナダ・黒釉	10YR6/2 灰黄褐色	鏡投 0-53 号塗期
159	A3 7' 7y)' 3 面上	緑釉陶器	碗	-	[1.5]	(5.0)	ロクロナダ・ケズリ・回転糸切痕	ロクロナダ	2.5Y6/1 黄灰色	風化により縁割離
160	B4 7' 7y)' 3 面上	瓦質土器	瓦灯傘	径径 10.0	[5.6]	-	ロクロナダ	ナダ・ハラミガキ	外: 10YR5/2 灰黄褐色 内: 10YR6/1 黄灰色	内面に付着
161	土坑 4007	土師器	甌 N	6.7	1.8	-	ヨコナダ・ナダ	ヨコナダ・ナダ	7.5YR7/6 褐色	
162	土坑 4007	土師器	甌 N	10.9	2.1	-	ヨコナダ・ナダ・ニビオサエ	ヨコナダ・ナダ・ニビオサエ	7.5YR8/4 淡黄褐色	

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			調整・成型		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
							外面	内面		
163	土坑 4007	土師器	皿Sh	6.6	1.7	-	ヨコナダ・ナダ	ヨコナダ・ナダ	2. 5Y8/2 灰白色	
164	土坑 4007	土師器	皿S	11.4	3.0	-	ヨコナダ・ナダ	ヨコナダ・ナダ	10Y8/2 灰白色	
165	土坑 4007	施釉陶器	輪花皿	9.0	3.3	4.4	ロクロナダ・高切痕・灰釉	ロクロナダ・ナダ	外: 5Y8/6 白色 内: 2. 5Y8/2 灰白色	古瀬戸 内面に使用痕
166	柱穴 4012	土師器	皿Ac	(10.6)	1.2	-	ナダ	ナダ	7. 5Y8/4 浅黄褐色	
167	土坑 4017	瓦質土器	釜	(23.4)	[10.5]	-	ヨコナダ・ナダ・ユビオサエ・貼付罫帯	ヨコナダ	外: N4/0 灰色 内: 10Y7/1 灰白色	
168	土坑 4019	施釉陶器	小杯	(6.5)	[3.7]	2.6	ロクロナダ・回転ヘラケズリ・削出し高台・黄瀬戸釉	ロクロナダ・黄瀬戸釉	外: 2. 5Y8/2 灰白色 内: 2. 5Y7/4 浅黄褐色	黄瀬戸 大塚第3段階後半期
169	土坑 4029	土師器	皿N	(7.6)	1.7	-	ヨコナダ・ナダ	ヨコナダ・ナダ	7. 5Y8/4 に近い褐色	
170	土坑 4029	土師器	皿Sh	(6.6)	1.8	(3.4)	ヨコナダ・ユビオサエ後ナダ	ヨコナダ・ナダ	10Y8/2 に近い黄褐色	
171	土坑 4029	土師器	皿S	11.2	3.0	-	ヨコナダ・ナダ	ヨコナダ・ナダ	外: 10Y8/3 浅黄褐色 内: 10Y8/4 浅黄褐色	1~2mmの砂粒を少量・3~5mmの石を含む
172	土坑 4029	瓦	側面溝溝文軒丸瓦	瓦当部径 14.7	長さ [19.3]	厚さ -	凸: ナダ・型押し	凹: ヘラ切り・布目痕	N7/0 灰色	
173	土坑 4030	土師器	皿N	(9.6)	1.7	-	ヨコナダ・ナダ	ヨコナダ・ナダ	7. 5Y8/4 に近い褐色	
174	溝 4042	土師器	皿N	(9.1)	1.5	-	ヨコナダ・ユビオサエ後ナダ	ヨコナダ・ナダ	7. 5Y8/4 に近い褐色	内外面に煤付着 灯明皿
175	溝 4042	土師器	皿N	14.2	3.0	-	ヨコナダ・ユビオサエ後ナダ	ヨコナダ・ユビオサエ後ナダ	7. 5Y8/6 褐色	1~2mmの金雲母・砂粒を含む
176	溝 4042	瓦質土器	釜	(17.2)	15.0	-	ヨコナダ・ヘラケズリ	ヨコナダ	10Y8/1 黄褐色	
177	溝 4042	瓦質土器	釜	(22.0)	11.2	-	ヨコナダ・ユビオサエ	ヨコハケ後ユビオサエ	10Y8/1 黄褐色	外面に煤付着
178	溝 4042	施釉陶器	小瓶	-	3.5	3.0	ロクロナダ・身方方向の注線・灰釉	ロクロナダ・内面	外: 5Y7/2 灰白色 内: 5Y7/1 灰白色	
179	土坑 4055	土師器	皿Nb	(8.0)	1.6	(4.0)	ヨコナダ・ユビオサエ後ナダ	ヨコナダ・ナダ	5Y7/6 褐色	
180	土坑 4055	土師器	皿Nb	7.1	1.9	-	ヨコナダ・ナダ	ヨコナダ・ナダ	7. 5Y8/4 浅黄褐色	
181	土坑 4055	土師器	皿N	11.2	2.0	-	ヨコナダ・ナダ・ユビオサエ・板状注痕	ヨコナダ・ナダ・ユビオサエ	5Y8/4 に近い褐色	1mm程度の砂粒・2mm程度の石を含む
182	土坑 4055	土師器	皿Sh	6.7	1.8	-	ヨコナダ・ユビオサエ後ナダ	ヨコナダ・ナダ	2. 5Y8/3 淡黄褐色	
183	土坑 4055	土師器	皿Sh	7.0	1.9	-	ヨコナダ・ナダ・ユビオサエ	ヨコナダ・ナダ	10Y8/2 灰白色	
184	土坑 4055	土師器	皿Sh	6.9	1.8	-	ヨコナダ・ナダ	ヨコナダ・ナダ	10Y8/2 灰白色	
185	土坑 4055	土師器	皿S	13.0	2.9	-	ヨコナダ・ナダ	ヨコナダ・ナダ	外: 10Y8/3 浅黄褐色 内: 10Y8/2 灰白色	
186	土坑 4055	土師器	巻腹	-	[8.7]	-	ナダ・ユビオサエ	ナダ・ユビオサエ	7. 5Y8/6 褐色	内外面に輪模みあり内面に煤付着
187	土坑 4055	瓦	葺屋文軒丸瓦	瓦当部径 [6.0]	瓦当部幅 [6.1]	厚さ -	凸: ナダ・型押し	凹: ナダ	N4/0 灰色	
188	土坑 4055	瓦	平瓦	長さ [7.6]	幅 [8.5]	厚さ 2.0	凹: 布目痕	凸: 縄目痕	N5/0 灰色	
189	土坑 5004	土師器	皿N	6.4	1.9	-	ヨコナダ・ナダ・ユビオサエ	ヨコナダ・ナダ	7. 5Y8/4 に近い褐色	
190	土坑 5004	土師器	皿N	7.8	1.5	-	ヨコナダ・ユビオサエ後ナダ	ヨコナダ・ナダ	7. 5Y8/4 に近い褐色	
191	土坑 5004	土師器	皿N	10.6	2.2	-	ヨコナダ・ユビオサエ後ナダ	ヨコナダ・ユビオサエ後ナダ	5Y8/6 褐色	口縁部に煤付着 灯明皿
192	土坑 5004	土師器	皿N	12.2	2.7	-	ヨコナダ・ユビオサエ後ナダ	ヨコナダ・ナダ	5Y8/6 褐色	
193	土坑 5004	土師器	皿Sh	7.0	1.9	-	ヨコナダ・ナダ	ヨコナダ・ナダ	2. 5Y8/2 灰白色	
194	土坑 5004	土師器	皿S	13.9	3.7	-	ヨコナダ・ナダ・ユビオサエ	ヨコナダ・ナダ	2. 5Y8/2 灰白色	
195	土坑 5004	陶器	小皿	(6.1)	2.0	(3.9)	ロクロナダ・高切痕	ロクロナダ	10Y8/3 に近い黄褐色	内面に赤色顔料(顔彩)付着

遺物番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			調整・成型		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
196	土坑 5005	土師器	皿 N	6.5	1.9	-	ヨコナダ・ナダ	ヨコナダ・ナダ	7.53R/6 褐色	
197	土坑 5005	土師器	皿 N	12.2	6.0	-	ヨコナダ・ナダ・ユビオサス・板状圧痕	ヨコナダ・ナダ	5YR7/6 褐色	
198	土坑 5005	土師器	皿 Sh	6.8	1.8	-	ヨコナダ・ナダ	ヨコナダ・ナダ	2.53R/2 灰白色	
199	土坑 5005	土師器	皿 S	11.7	3.3	-	ヨコナダ・ナダ・ユビオサス	ヨコナダ・ナダ	2.53R/2 灰白色	
200	土坑 5014	土師器	皿 N	9.4	1.6	-	ヨコナダ・板状圧痕	ヨコナダ・ナダ	10YR7/3 に近い黄褐色	金雲母を微量に含む
201	土坑 5014	土師器	皿 N	(13.0)	2.1	-	ヨコナダ・ナダ	ヨコナダ・ナダ・ユビオサス	2.5Y7/2 灰黄色	
202	土坑 5014	土師器	皿 N	(14.0)	2.5	-	ヨコナダ・ナダ	ヨコナダ・ナダ・ユビオサス	10YR7/3 に近い黄褐色	
203	土坑 5020	土師器	皿 A	12.5	1.6	-	ヨコナダ・ナダ	ヨコナダ・ナダ	7.53R/4 に近い褐色	
204	土坑 5020	土師器	皿 A	(10.0)	1.4	-	ヨコナダ・ナダ・ユビオサス	ヨコナダ・ナダ・ユビオサス	10YR7/4 に近い黄褐色	
205	土坑 5020	土師器	皿 N	(15.8)	[2.8]	-	ヨコナダ・ナダ・ユビオサス	ヨコナダ・ナダ	10YR8/2 灰白色	
206	土坑 5024	須恵器	甕	(19.0)	[7.3]	-	ヨコナダ・ユビオサス・自然釉	ヨコナダ・ユビオサス・自然釉	9G/0 灰色	
207	地 5026 墓下層	古式土師器	壺	(28.8)	[8.0]	-	ナダ・ヘラナダ・タテハケ	ヘラナダ	10YR8/3 黄褐色	
208	地 5026 下層	施釉陶器	壺か瓶	-	[3.7]	-	ロクロナダ・黒釉	ロクロナダ・黒釉	地：10YR8/1 灰白色 釉：10YR1.7/1 黒色	福州窯産か 雲母を含む
209	土坑 5037	土製品	加工円盤	長さ 5.9	幅 5.8	厚さ 1.4	面取り	-	外：7.5YR5/3 に近い褐色 内：10YR4/3 に近い黄褐色	中河内土器 生駒山西麓

第 11 表 出土石製品観察表

遺物番号	遺構番号	種類	器種	法量 (cm)			石材	備考
				長さ	幅	厚さ		
5	土坑 1017	石製品	砥石	[6.4]	4.2	1.8	アブライト	
6	土坑 1017	石製品	砥石	[7.4]	3.1	1.5	ホルンフェルス (珪質頁岩が熱変成を受けたもの)	砥面 2 面
19	土坑 1027	石製品	砥石	[9.8]	4.4	1.7	珪質頁岩	
61	土坑 2014	石製品	砥石	[5.5]	5.0	1.5	珪質頁岩	
62	土坑 2014	石製品	砥石	[10.2]	5.0	1.1	珪質頁岩	
71	土坑 2054	石製品	石鏝	口径 (21.0)	器高 [4.5]	-	緑泥岩・結晶片岩	側面・外面に面取りケズリあり 砥石などに再利用か。
76	土坑 2071	石器	横形石匙	4.2	[4.0]	0.9	赤色チャート	縄文時代
80	土坑 2076	石製品	砥石	[6.9]	4.6	2.1	珪質頁岩 (珪質砥石)	2 次加工か 砥面 3 面
90	土坑 2076	石製品	砥石	[8.7]	4.2	1.6	珪質土 (燻物)	砥面 5 面
100	B2 <sup>1</sup> ・1 <sup>1</sup> 2 面上	石製品	硯	10.8	6.5	1.5	ホルンフェルス (珪質頁岩が熱変成を受けたもの)	墨付着
101	B2 <sup>1</sup> ・1 <sup>1</sup> 2 面上	石製品	角筆か	8.3	0.8	0.7	ホルンフェルス	片端部摩滅、使用痕か
141	土坑 3089	石製品	角筆か	5.3	0.8	0.7	ホルンフェルス	片端部摩滅、使用痕か



## 報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうさんじょうしぼうじゅうごちょうあと
書名	平安京左京三条四坊十五町跡
副書名	亀屋町・上白山町における埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	イビソク京都市内遺跡調査報告
シリーズ番号	第16輯
編著者名	吉村品、石井明日香、Battsengel Tsogzolmaa、株式会社パレオ・ラボ
編集機関	株式会社イビソク
所在地	〒612-8425 京都府京都市伏見区竹田中殿町86番地 TEL.075-632-8109
発行年月日	2018年8月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
<small>へいあんきょうさきょうさんじょうしぼうじゅうごちょうあと</small> 平安京左京三条四坊十五町跡	<small>きょうとしちゅうきょうく</small> 京都市中京区 <small>ごんぎやまのまち</small> 御幸町通御池 上る亀屋町 386番4、 <small>きょうとしちゅうきょうく</small> 京都市中京区 <small>かめやのまち</small> 亀屋町通御池 上る上白山町 243・245・ 247・249番	26106	1	35°	135°	20160905 }	417.5㎡	ホテル 建設
				00'	45'			
				06"	28"	20170421		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京左京三条四坊十五町跡	都城跡	平安時代中期	土坑、溝、池	土師器・須恵器・陶磁器	園池
		平安時代後期～鎌倉時代	柱列、土坑、溝、道路状遺構	土師器・須恵器・陶磁器・瓦質土器・瓦	
		室町時代前期	土坑	土師器・須恵器・陶磁器・瓦・石製品	
		室町時代後期～安土桃山時代	柱穴、土坑、溝	土師器・瓦質土器・陶磁器・瓦・石製品	
		江戸時代	柱穴、土坑、溝、井戸	土師器・瓦質土器・陶磁器・瓦・石製品・牛馬骨	
要約		平安時代中期から江戸時代にかけての整地と遺構の変遷を確認した。平安時代には貴族の邸宅である山井殿があったとされ、それに関連する庭園の池などの遺構を検出した。江戸時代の土坑や井戸からは、陶磁器のほか鋳造関連遺物や牛馬骨が出土した。			

## 平安京左京三条四坊十五町跡

—亀屋町・上白山町における埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 2018年8月

編集  
発行 株式会社イビソク

住所 京都府京都市伏見区竹田中殿町8番地  
〒612-8425 TEL 075-632-8109

印刷 富士出版印刷株式会社